

ひかり輝く「全人教育」

須賀学園の100年

学校法人 須賀学園

理事長 須賀 淳

## はじめに

須賀学園は、平成十二年十一月三日に創立百周年を迎えました。明治三十三年（一九〇〇）創立以来、明治、大正、昭和、平成と四代にわたって風雪を乗り越え、学園の教育理念である「全人教育」に邁進して、今日、宇都宮共和大学、宇都宮短期大学、宇都宮短期大学附属高等学校、宇都宮短期大学附属中学校の四つの学校に、3000名の学生、生徒を擁し、5万名にのぼる卒業生を輩出するにいたったことは感慨ひとしおのものがああります。

このよるこびを『ひかり輝く「全人教育」——須賀学園の百年』にまとめてみました。教育は人間の仕事の中で最も尊いものであると同時に、最も難しいものであると思います。なぜなら、教育の対象は人間であり、ひとりひとりが十人十色といわれるように各々の個性を持っているからです。そのひとりひとりの個性に応じて、ひとりひとりをいかに伸ばすかが「全人教育」です。そして、社会はつねに変動し、教育もまたその変動に即応しなければなりません。

須賀学園創立者の須賀栄子先生は、はじめは小さな学校でしたが、理想を高く揚げ、気位を持って教育にあたりました。官尊民卑の弊風の中での教育実践は、幾多の困難に直面し、そのたびに学校の経営も試練に立たされ、創立者としての辛苦にはなみなみならないものがあったようです。栄子先生の三十五年にわたっての陣頭指揮は、まさに不撓不屈の権化といってよいでしょう。二代目校長須賀友正先生は、昭和九年栄子先生の後を継ぎ、四十八年にわたり本学園の発展に尽力しました。とくに昭和二十年七月十二日夜の宇都宮大空襲に遭遇しては、戦火の中に身を挺して学籍簿をはじめ学校の重要書類を守り、戦後は灰燼に帰した校舎の戦災復興に全力を傾注しました。さらに六三制の教育制度の改革、経済混乱の中での学校経営には厳しいものがありましたが、「全人教育」の伝統と誇りを守り、歯を食いしばって闘いました。

私は、こうした二代にわたる父祖の姿を目の当たりにして育ちましたので、私学は独自の崇高な理想と信念によって成り立ち、時世の移り変わりの中でつねに建学の精神を守るとともに、時代の変化に対応し、調和をはかることがもっとも大切であることを骨の髄まで実感しています。古きをのみ守ってはいならないし、また新しいものばかりを追ってはいけないと心して、今日まで戦後の半世紀を身命を賭して本学園の教育に取り組んできました。教育の持っている厳しさ、難しさは、日々ますます強く感じるどころですが、今日までよくここまでやってこられたと思います。

これも、須賀栄子先生、須賀友正先生がその生涯のすべてを擲って築いた基礎があり、またその使命を共有する多くの教職員、さらには本学園で学んだ学生生徒とその御家族のお力添えがあつたからであると感謝しています。

創立百周年を記念してこの学園の歴史をまとめたいと考えたとき、私の心に一番強くあったのは、須賀学園がどのような初心、初志、気構えで今日にまでいたったかを、二十一世紀を担う人たちにいかに伝えるかということでした。それは「全人教育」に集約されますが、ただ単に百年の歴史をなぞるのではなく、それがいかに具体的に日々の教育の中で実践されてきたかが大切ではないかと思いました。そのため、できるだけ多くの教職員、学生生徒の生きた声を交えながら百年史を綴ることにしました。幸いなことに、生徒会誌「ひめまつ」が昭和二十二年以来毎年刊行され、これがそのまま学園の歴史を記録しています。また卒業生や御家族から、本学園創立以来の貴重な写真や作品、成績表さらには制服、卒業証書、賞状などを数多く寄贈していただいています。これらの資料により執筆も比較的円滑に進めることができました。これらの品々は、毎年秋に開催される学校祭で展示するとともに資料室に保管されています。

とくに別冊となっている「須賀学園史料集」は、今日あるを期して、須賀家に伝わる古文書や本学園創成期の史料を集め、十数年前に本校教諭、図書館長であった国漢の碩学河住玄先生に委嘱して、解説し、忠実に復元して、解説を附し、「須賀学園史料集」として粗末な印刷物にまとめておいたものを、このたび復刻したものです。いわば明治の創成期から大正、昭和初期までの本校のなまの歴史です。あえてこれを刊行するのは、栃木県における私学がどのような歩みを重ねてきたかを具体的に知る手がかりとなるものであり、栃木県教育史あるいは日本の私学教育史の貴重な史料でもあったからにはほかなりません。

また、戦後十年ごとに刊行されてきた本学園の同窓会名簿もおおいに参考になりました。この名簿作成にあたっては、明治、大正、昭和、平成の卒業生の改姓、住所変更、市町村合併、新住居表示等のため、完璧を期することはきわめて困難でした。原本となった明治以来の卒業生名簿や学籍簿は、戦争末期の宇都宮大空襲により本校の校舎が全焼した際に、須賀友正先生が猛火をおかして防空壕に運び入れ、完全に守り抜いたものです。これらの貴重な名簿も、長い年月と防空壕の湿気のために、手をふれればくずれ落ちるような痛みかたで、一枚一枚ていねいにはがして、やっと判読できる状態でした。これらの卒業生名簿や学籍簿の一冊一冊、一字一字が、学園の長い歴史をはっきりと刻みこんでいます。明治時代は、須賀栄子先生の直筆で、一人一人ていねいに美濃半紙に毛筆で墨書されていますし、戦争中や終戦直後の物資不足の時には、粗悪なワラ半紙にうすいインクの文字がにじんでいます。その後は、紙質も印刷もりっぱで、日本経済の高度成長を物語っています。ひとりひとりの卒業生の氏名をなぞりながら、学園百年はこのひとりひとりが築き上げてきたものだ実感しています。

生徒会誌「ひめまつ」に掲載された多くの人々の記録も再録しましたが、いずれも時代を越え「全人教育」が求めているところを的確に示していると思います。その一言一言が私たちの胸にずっと重く響くのは、やはり百年の伝統というものでしょう。

あえてこの百年史を私が書き下したのは、学生生徒およびその御家族の皆さんにぜひ読んでいただきたいと願ったからです。「故きを温ねて新しきを知れば、以て師たるべし」という孔子の言葉があります。学ぶとは何か、子どもを育てるとは、あるいはこれからの教育は、と疑問を感じたら、ぜひともこの本をひもといていただきたいと思います。きっと自信と誇りをもった毎日を実感できるようになるのではないのでしょうか。

この百年史の執筆に際しては、太田茂雄教頭先生をはじめ、長年にわたり本学園の教育に尽瘁された先生方のお力に負うところが大きかったです。また、本学園の戦後の貴重な記録となった生徒会誌「ひめまつ」の編集を五十数年間にわたって担当された手塚武先生、和久誠先生、そして現在の若い先生方に深い謝意を表します。

そして、特筆しなければならないのは、実質的に私と一体となって、膨大な資料の蒐集、整理、執筆、発刊にあたってくださった学校法人須賀学園顧問村瀬峻一先生のお力なくしては、この百年史は実現しなかったことでしょう。あわせて心から御礼を申し上げます。

平成十二年十一月三日

須賀学園創立百周年の佳き日に

須賀学園理事長 須賀 淳

## ひかり輝く「全人教育」須賀学園の一〇〇年

### 目 次

はじめに	1
<b>第一章 「一人は一校を代表する」</b>	<b>6</b>
二十一世紀こそ「全人教育」 ひとりひとりに価値 学園精神の基盤 勉強で未来を確実に	
<b>第二章 県初の女子私学に生涯かけた栄子先生</b>	<b>10</b>
「全人教育」百年前から いっしょに生活して教育 ピカピカの学校 勉強もしつけも厳しく お嫁に行ってもめられる 生涯独身で教育 校風高く評価 受け継がれる伝統 つねに新しい足跡を	
<b>第三章 実務教育に全力、友正校長</b>	<b>25</b>
父が後を継ぐ 母華子も教壇に立つ 名物バザーはじまる 栄子先生の銅像	
<b>第四章 激動の戦時中の学校生活</b>	<b>29</b>
戦争で変わる学校 勤労奉仕が勉強 援農に出る 戦争拡大で授業中止に 学徒出陣で入隊	
<b>第五章 戦災から見事に復興</b>	<b>40</b>
校舎全焼、学籍簿を守る 大学と教壇かけ持つ 学校に花を 六三制の学制改革 「ひめまつ」創刊 特別講座とバザーの復活	
<b>第六章 栄えある伝統のうに</b>	<b>53</b>
美は微笑のうちに ソフトボール全国制覇 音楽も全国入賞 音楽科誕生	
<b>第七章 多様化で特色を出す</b>	<b>63</b>
特色ある学校に 「多様化」を推進 能力・特性を伸ばす クラスは通し番号で 短大音楽科の誕生	
<b>第八章 校名、宇短大附属高校に</b>	<b>73</b>
「全人教育」で活気 「須賀さん」から「宇短附」へ 念願の記念講堂を建設	
<b>第九章 県内私学初の東大合格を実現</b>	<b>82</b>
陣頭指揮に立つ 全地域で父母と懇談 県内私学初の東大合格 広がる国際交流	
<b>第十章 待望の大学誕生</b>	<b>93</b>
「全人教育」を進める中で IT革命の拠点として 栄子先生が見守る	

**第十一章 人にやさしい宇短人間福祉学科**……………97

「福祉のまちづくり」を担う 生きる「全人教育」

**第十二章 創立百年——教育は人なり**……………99

もっとも尊くむずかしい教育 若い世代に継承 平和に勉強できる  
幸せ 私学の誇りと自信 百周年を新たな出発に

**あの日 あの時**

目標を具体化して実践…9 厳しい中に温かさ…24 小さな身体で  
働く…39 猛練習で成果得る…62 校名変更大反響…81 調理科  
フランスへ…92 活発な音楽活動…96

**あとがき** …………… 108

**別添資料** 須賀学園の百年

- 校旗
- 校章と制服の移り変り
- 校歌
- 創立百周年記念学園歌
- 寄宿生の歌
- 生徒・学生数一覧
- 施設設備
- 年表

**別冊** 須賀学園史料集

須賀榮子先生銅像銘文、須賀榮子卒業進級証、共和裁縫女学校の概要、大正十年四月の共和裁縫女学校沿革一覧、私立共和裁縫女学校時代、昭和五年度宇都宮須賀女学校学校要覧、宇都宮須賀女学校創立満三十周年時の学校概要（昭和五年十二月六日記）、宇都宮須賀女学校入学者調、宇都宮須賀女学校在籍者調、須賀榮子先生の苦闘史（相沢幸吉記）、須賀家系譜、宇都宮須賀女学校史

## 第一章 「一人は一校を代表する」

### 二十一世紀こそ「全人教育」

明治三十三年十一月三日に設立された須賀学園は、平成十二年十一月三日に満百年を迎えました。栃木県最古の女子私学として今日まで教育活動が続けることができたのは、何といても「一人は一校を代表する」という言葉通り、ひとりひとりの学生生徒を育ててきた「全人教育」という教育理念がつねに守られ、それに基づいての教育を実践してきた賜物と感激するとともに誇りに思っています。

今日、二十一世紀とはどのような世紀なのだろうかと胸をふくらませています。科学技術はますます発達し、いままで解決が困難だと思われていた難病克服や食糧増産、災害の事前防止、老化の防止などさまざまな課題が解決し、情報通信技術やバイオ、新エネルギー技術などにのってひとりひとりがもっと豊かに平和に暮らせるのではないかと、あるいは自由に何でも好きなように活動できる機会がつけられるのではないかと、夢は大きく広がっています。ただ、その一方で、不安や自信喪失が広がっているのも事実です。石油資源や環境問題、人口の伸び、食糧、そして民族紛争や心の悩みなどを考えると、ちょっと立止まらざるを得ません。とてもこれからの百年がバラ色とは言えないような気がします。

私はこの須賀学園の百年の歴史を振り返りつつ、二十一世紀を展望した場合、やはり「全人教育」こそが、私たちの毎日に唯一の自信と見通しを与えてくれるのではないかと確信しています。というのは、どんな時代や社会になろうとも、この世に生まれ育ち、生活するひとりひとりが、いかに生きていくかが一番大切なテーマではないのだろうか、私たちが自らが生きるという確信を持ち、どんな事態に対しても、与えられている知恵と力で取り組み、乗り越えていけるかどうか問われていると考えているからです。



高く掲げられている教育理念



いつも生徒とともに —— スケート教室

## ひとりひとりに価値

「一人は一校を代表する」という言葉にこそそうした考えが反映されています。私の父である第二代理事長兼校長・須賀友正先生は、第二次世界大戦の戦中、戦後の厳しい社会情勢の中であって、この言葉を胸に須賀学園の発展に尽力して来ましたが、その意義を次のように書いています。

私がよく申す「一人は一校を代表する」と言う言葉は生徒の一人一人がそれぞれに本校生徒としての価値を知って、その価値を自分で見捨ててはいけないと言う意味です。それほど「一人」と言う人間の価値を見逃してもらいたくないのです。皆さんにそれぞれ個性があると同時に、それぞれの価値が皆さんにはあります。或る人には無価値なものが、他の人には重大な価値である場合もあり得る。皆さんがその各々の価値を出し合って、暮らして行ったら世の中はまたどんなにか値打ちのあるものになるかわからない。価値を自覚する心こそ、人間の大きな喜びであり、幸福への素材だと思います。学校はその価値のあり場を皆さんに認識してもらい、価値のあり方を勉強してもらって修業の場でもあります。

善い事、悪い事——それだけによって物事はきめられない。価値こそはその人のその時の心の中にだけ存在するものだ。健全な価値を育てるために、健全な心を育てて下さい……。

（「ひめまつ」第三号＝昭和二十四年二月発行）

須賀学園の「全人教育」はまさに、この呼びかけにあるように、学生生徒ひとりひとりの価値を発見し、磨き、育てていくという「一人は一校を代表する」に凝縮されています。

二十一世紀がどうあろうとも人間そのものが大きく変わるようには思えません。歴史は繰り返すという言葉のように、これからも幾多の困難や苦しみ、戦いや競争もあるでしょう。これからの百年はいままで四半世紀分のスピードで何でも進展していく時代になるだろうとの予測もありますが、根本は人間です。

人間がどう生きていくかは人類誕生と同時に問われる永遠の課題ですが、何よりもひとりひとりの価値を大切にこそ、その時代も社会も光り輝いてくるのではないのでしょうか。

私は、人間の仕事のうちでもっとも尊く、またむずかしいものは教育であると信じています。それは対象が十人十色、それぞれ個性を持った人間であるからです。教育はその個性を生かしながら、人それぞれに伸ばしてゆかなければなりません。私は、崇高な理想と信念によって創設された須賀学園の建学の精神に基づき、時々刻々と移り変わる時代の趨勢を見きわめながら須賀学園の教育に日々取り組んでいます。



## 学園精神の基盤

私は、須賀学園の中で生まれ、育ったので、戦前・戦中・戦後の私学の苦労というものを身をもって体験しています。戦前は、教育は国の事業であるという考え方から、私学は公立学校の補完としての地位しか与えられていませんでした。世間一般も官尊民卑の気風が強かったので、子供心にも悲しい思いをしたことがありました。しかし、いまは、私学振興という国の政策もあり、また、私学関係者の努力もあって、私学は大きく発展充実し、その地位が向上しました。誰もが私学を尊重するようになったので、戦前のようなつらい思いをすることも少なくなりました。今や私学は、「教育は私学から」、「私学は一つ」の合言葉のもとに、それぞれ特色を発揮し、お互いに切磋琢磨しながら、公立学校とともに日本の教育を担っているという気概のもとにがんばっています。今の私を支えているのは「一人は一校を代表する」という建学の精神があってのことです。

学生生徒の皆さんは、つねに前向きに、試練に立ち向かう気概がほしいと思っています。江戸時代前期の儒学者で熊沢蕃山という人がいます。この人は、学問を志し、中江藤樹について陽明学を学びましたが、入門に際し、藤樹が引受けなかったので、二夜をひさしの下で過し、これを見かねた藤樹の母のすすめで入門できたという話があります。蕃山は意志の強い人で、

憂きことのなほこの上に積もれかし  
限りある身の力ためさむ

と歌っています。私の座右の銘としている歌です。ともすればくじけそうになる弱い自分の心に鞭うって、次から次へと押寄せてくるつらいこと、大変なことに対し、背を向けずに、積極的に立向かって、それを打開してゆく。そういう強い心をもちたいものであると、私はいつも自分を励ましています。

## 勉強で未来を確実に

このごろは、勉強の方はまあまあ適当に、クラブ活動などで楽しい学校生活を送ればよいという風潮があります。クラブ活動も人間形成のうえで欠くことのできない大切なものであることはいまでもありませんが、学生生徒に求められているのは、何といっても勉強です。未来の自分を確実なものにするために、自分の限界いっぱいまで努力するところにさわやかな満足感が得られるのです。授業を受けながら、その背後にあるもの、例えば体験とか生きざまといった人間性を常に見つめ、悩みごとと一緒に考える先生、体験談や生き方を話してくれる先生が求められています。そのためには、先生も学生生徒とともに

学び、学生生徒の手を引き、時には手を引かれながら、人間探求の道を進むようにしなければならぬと思います。

二宮尊徳翁の教えに「水車の理」というのがあります。水車は水の中に入って初めて回りますが、水の中に全く没してしまっただけでは回らない。水から上ったままでは空回りするだけである。この水を学校に置きかえたとき、水車である先生はいかにあるべきかを知ることができます。教育は二十一世紀の進展の中で新しい役割を求められていますが、こうした基本的あり方は変わらないと確信します。須賀学園がその教育活動の基盤として「一人は一校を代表する」を教職員、学生生徒の共通の宝として持っていることは大いに誇ってよいと思います。

須賀学園創立百周年を迎え、私は「一人は一校を代表する」という伝統に改めて感謝するとともに、原点に戻ってこれからの教育研究に意を決して取り組んでいかねばならないと強く感じています。

同時に、私たちは責任をもって教育の任にあたるためにも須賀学園の百年の伝統と歴史を、関係するすべての学生生徒や教職員、父母、同窓生とで共有し、広く社会に向けて知らせる必要があると思います。須賀学園百年を語りつつ、二十一世紀はどうあるべきなのだろうか、どのように進展するのだろうかを考えたいと思います。

あの日 あの時

「目標を具体化して実践」

ひめまつ 20号から

「一人は一校を代表する」—この生活目標をどう実行するか、先生も生徒も真剣に考えます。二年十一組では、学校生活について「言葉づかいを正しくする。校則を守る。礼儀を正しくする。学習意欲を持ち、すべての面で積極的に協力し合う。校内を美しくする」こととし、社会生活では「学校生活と同様の礼節に加えて、他人に親切にする。社会福祉に協力する」こととみんなで話し合った結果をまとめています。

家庭生活については「親への反抗をなくし、家の手伝いをよくし、予習復習をする。両親と姉妹を尊重する」こととして、これらをひとつひとつ着実に実行して、「一人は一校を代表する」を前進させようと呼びかけています。重要なのは、「自由な発想に基づいて、手近かな問題をひとつひとつ克服することである」と説き、そのためには、「勇気と意志」こそが力になるとお互いを励ましています。どんな時代や社会になっても変わることのないこの学園精神を高く掲げて歩んでいきたいと思っています。(昭和41年3月発行)

## 第二章 県初の女子私学に生涯かけた栄子先生

## 「全人教育」百年前から

須賀学園の教育理念である「全人教育」は、明治三十三年十一月三日、須賀栄子先生が宇都宮市西塙田町に共和裁縫教習所を創立した時に始まります。その当時はまだ封建時代の名残りが強く、女子教育は不要であるという考えが根強く残っていました。そうした時代であったにもかかわらず、栄子先生は二十七才という若い女性の身をもって宇都宮に本校を創設しました。



須賀栄子先生

当時の栃木県内をみると、栃木女学校（宇女高前身）が創立されたのが、明治八年、栃木中学校（宇高前身）十二年、栃木県簡易農学校（宇農高前身）二十八年、栃木県尋常中学校栃木分校（栃高前身）二十九年、栃木県第三中学校（真岡高前身）三十三年、栃木県第四中学校（佐野高前身）三十四年、宇都宮商業補習学校（宇商前身）三十五年と主だった学校が次々とつくられてゆきました。宇都宮に東北本線が開通したのが明治十八年、田中正造が第二帝国議会に足尾鉍毒について質問書を提出したのが二十四年、足利銀行が資本金十五万円で開業したのが二十八年と、近代国家としての動きが本格化する中で教育が重視され、それに必要な体制が整えられていった時代です。須賀学園もこうした中で明治三十三年に産声をあげたわけですが、多くの学校が官立であり、しかも女学校は県内に栃木女学校（宇女高前身）たった一校という時代に、私学として若い女性がひとりで女学校を始めたところに注目したいと思います。

作新学院の前身の下野英学校が宇都宮に創立されたのは明治十八年で須賀学園に十五年遡りますが、宇都宮実用英語簿記学校（宇学前身）は四十四年、足利裁縫女学校（白鷗足利前身）大正四年、佐野裁縫女学校（清澄前身）同十一年と比べても女性の手で学校を創設するのは大変早かったといえます。とくに、女子教育については、栃木高等女学校が明治三十四年、県女子師範学校が明治三十七年、佐野高女三十九年、足利高女四十二年と本学園に数年遅れていることを合わせて考えると、栄子先生がどんなに熱い想いで須賀学園の礎を築いたかがわかります。

それを進めたのは明るく豊かな国家社会の基礎は、健全な家庭の建設にあり、その家庭の中心となってその責任を果たすことこそ、女性のもっとも尊い使命であり、その真価を發揮できる女性の育成が重要であるという須賀栄子先生の確固たる信念です。これは全人教育の出発になりますが、その灯をかかげて、昭和九年にお亡くなりになるまで実に三十五年の長い年月にわたって、若い女性たちに真の使命を自覚させ、共和の精神に目覚め、

そして実践に徹する堅実で気品高い女性の育成に力をつくした業績は、栃木県女子教育界の草分けとして、高く評価され多くの人々の尊敬を集めているゆえんです。

## いっしょに生活して教育

栄子先生は、明治の初め、宇都宮市内で唯一の小学校であった東小学校から栃木県尋常中学校（現在の宇高）の女子部を卒業して、東京神田の大成学館に進み、英語、理科、裁縫などを学び、当時としては最高の教育を受けました。

これらの勉強を通して先生がもっとも強く感じたのは、日本の国を発展させ、国際的地位を高めるためには、まず何よりも次の世代を担う人間を、いかに教育するかにある。そのためには母となる人を育てることがもっとも必要かつ急務であるという点です。先生の三十五年にわたる教育活動のすべては、この大きな理想によって貫かれています。「りっぱな母親をつくる」——それには英語、理科、数学などの普通教科を学習することはもちろん大切ですが、それにもまして重要なことは、まず人間をつくること、そして実際の生活に役立つ技術・技能を身につける。即ち、先生は、人間形成の基礎となる学問と、実生活に直結する実技を全人教育として考え、実行したのです。

設立趣旨書を見ますと、先生がどのような考え、気持ちで開校したかがうかがえます。

当地方ニ於ケル女子教育ヲ視ルニ、今尚満足スベカラザル点少ナシトセズ。例之設備整ヘルモ形式ニ流ルルアリ。内容質実ナルモ規模小ナルモノアリ。或ハ実用ニ適セントシテ却テ営利ニ傾キ、或ハ智育ニ偏スルノ弊アリテ、動モスレバ徳育充分ナラズ。偶々其設備内容両ナガラ較完全ナルモノアルモ定員ニ制限セラルルガ為メ、学生収容ノ数少シ。(中略) 女子教育ノ欠陥ニ鑑ミテ自己ノ理想ヲ追ヒ、高尚ニ馳セズ卑近ニ流レズ、主トシテ裁縫手芸ヲ授ケ、且ツ齊家必須ノ学科ヲ補ヒ、専ラ女徳ノ涵養ニ努メ以テ聊カ県下教育ノ為メ微衷ヲ致サンコトヲ期スル所以ナリ。

定員百名だったのを明治四十四年に倍増し、入学資格は高等小学校卒業程度にして、年令十四歳以上の品行方正の女子としています。修業年限は二年で、修身、裁縫、家政、算術、作文、習字、作法などを教育しました。年間の経費は「五百五拾円」で、授業料一円二十銭と記録されています。

女性としての身だしなみと技芸の習得、今日の言葉でいえば、生活指導に重点をおき、裁縫という実習を通して生徒たちに創造の喜びを持たせ、同時に強い忍耐力を養おうと考えたのです。それは徹底した実行・実践の教育であり、そのために先生は生徒たちと毎日の起居を共にして、日常生活の中で生徒たちに、自ら、こうあるべきという姿の模範を示したのです。吉田松陰の松下村塾のように塾教育という理想的な場で人間形成の教育を行

ったわけです。

## ピカピカの学校

学校は宇都宮の昔の城跡、三の丸の満々と水をたたえたお堀のそばで、静かな住宅街の一角にありました。大谷石にかこまれた正門入口には、枝ぶりの美しい松の木が植え込まれ、四季を通じて変わることのない美しさを誇っていました。正門を入れてだれもがまず驚くことは、石畳がきれいに水洗いされ、ちり一つとどめない美しさでした。地方からでてきた父兄の中には、石畳があまりにもきれいなので、履物を脱いで手にもって入ってきたという話が伝わっています。これは、先生の方針に従って、清掃が徹底して行われていたという一例です。この例が物語るように、先生はなにごとによらず、徹底的にやらなければ気のすまない人でもありました。

「女には教育はいらない」という男尊女卑の時代です。当時県内には宇都宮と栃木に県立の女学校が二つしかありません。共和裁縫女学校の誕生は、ひとりの先駆的な一女性が身をもって実践してみせるという画期的な教育内容だっただけに、栃木県の女子教育に大きな衝撃を与えました。

学校の生徒は三百人ぐらいで、県内をはじめ茨城、埼玉方面からも入学しました。ほとんどが寄宿舎に入り、栄子先生と一緒に寝食を共にし、夜は先生から自分の生い立ちや物に不自由した時代のあったことなどの話を聞きました。先生は自室では机の前にきちんと正座し、姿勢を崩さず読書し、その姿を生徒たちは見習ったそうです。

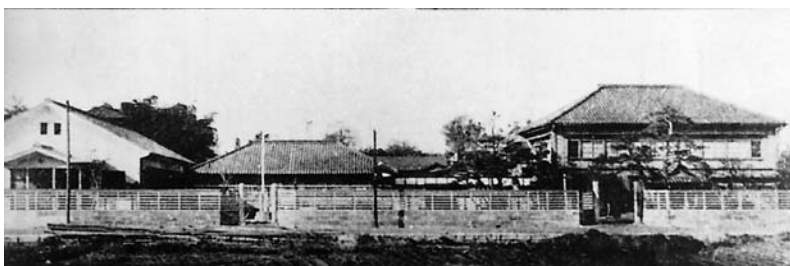
学校の発展ぶりについて、昭和五十六年十月一日に発行された宇都宮市の「日野町の歴史」は西塙田町からの移転について、「共和裁縫女学校」という項目をわざわざ設けて次のように記しています。

明治三十七年十月、私立共和裁縫女学校が市内西塙田町から日野町に移転してきた。

同校は、須賀栄子女史の経営する裁縫および実科を教授する栃木県における女子教育界の草分けといわれた学校で、明治三十三年十一月三日宇都宮市西塙田町に創立、はじめ「私立共和裁縫教習所」と称したが、生徒数の増加にともない校舎が狭隘となったので、日野町に転居したものである。

同校は、これより明治四十三年十月まで満六ヵ年余を日野町で開校しつづけていたが、同年十月二十日市内河原町に新築移転、大正四年までの卒業生は、六百数十人に達した。明治四十四年のころは、三百人の生徒を有し、裁縫・修身・家政・算術・作文・習字・作法のほか、手芸科を置き、また茶の湯、挿花の随意科を併設した。日野町の人々は同校に好意を寄せ協力したが、特に篠崎安平氏は何かと後援したので、教育の実績はいよいよ上

った。



昭和初期の校舎全景



当時の卒業記念写真

## 勉強もしつけも厳しく

栄子先生の生徒に対する無言の教えによって読書の習慣が自然と身について、いまなおそれを続けていると多くの卒業生が語っています。先生にじかに接して、その人柄から多くのことを学び、その後の人生のいき方に役立てたわけです。ここに「全人教育」の原点があるのではないのでしょうか。

明治三十四年に入学した渡辺甲（キノエ）さんはこうした学校生活について次のように書いています。

私は本校の卒業生で、創立二年目、栄子先生がまだ二十八才のころから教えをうけた者です。共和裁縫女学校と改称されたばかりでした。

栄子先生は当時並び無き英才とうたわれ、気品高く、すぐれた識見をもち、ほんとうに若々しくご立派でした。私の在学中の生徒数は三十名程度で、そのうち七名が寄宿生だったと思います。私も寄宿舎におりましたし、一番年少者でもあり、それに母が亡くなっていたので、休暇中でも帰省せずいつも校長先生とご一緒に学校で過ごしたものです。こんな私を先生は我が子のように（あるいは妹のようにであったろうか）母代わりに面倒をみて下さいました。お作法はとくにやかましく、正しくきびしいしつけ、お掃除の仕方、食事のつくり方、服装容儀にいたるまで、それこそ一から十まで仕込んで下さいました。もちろん本命である学問、技芸の指導はいたれり尽くせりで、勉強としつけ両面にわたってきたえられたという言葉がいちばんよくあてはまるのではないかと思います。

## お嫁に行ってほめられる

また、明治末入学の卒業生の福田アキノさんは、当時の勉強ぶりをなつかしんで次のように語っています。学校生活が温かな雰囲気にもまれていたことがうかがえます。

私は明治四十五年四月入学ですが、その年の八月に明治天皇陛下がおかくれになりましたので、同月から大正元年となりました。

一年生の四月から七月までは自宅から学校へ通いましたが、第二学期からは仲のよい床井マスさんと学校の寄宿舎に入りました。当時の校名は共和裁縫女学校で、授業料は月六十銭、寄宿舎費は食費ともで八円でした。

本校はその頃、松が峰の現在の校長先生の御自宅のあるあたり一帯にあり、宇都宮城跡のお堀が校門の前にひろがり、たくさんの鯉が泳いでいました。校舎の二階から見おろしますとほんとうによい眺めでした。私のクラスには福島県から二人、茨城県から一人お友達がきていました。当時は県立女学校が県内に二校しかありませんでしたから、全県下から本校に生徒が集まり、また遠く県外からも多勢の生徒がきておりました。

学校の授業科目はお裁縫が主でしたが、そのほか、家政（衣・食・住）、習字、作文、手芸、お作法、生花などがありました。当時は修学旅行や遠足などはありませんでしたが、大正天皇陛下が日光の田母沢御用邸においでの際などには、宇都宮駅までお出迎やお見送りに、栄子校長先生がお先に立ち、生徒一同がまいりました。そのときは、はかまも折り目正しく、たびも真白のきれいなものをはいてゆきました。

栄子校長先生は、良妻賢母主義の女子教育を進め、栃木県の女子教育の草分けとして、大正天皇陛下からごほうびをいただきました。それはちょうど私達の在学中のことで、生徒たちは心からお祝い申し上げたことでした。

卒業写真は、先生を前列に、卒業生はそのうしろに階段のように立ち並び、全員一緒にとりました。現在は卒業生の数も多いのでこのようにはまいりませんでしょう。制服のはかまのうえにバンドをしめるようになったのは、私達より一年あとの大正四年からのようです。

本校の卒業生は、きれいずきでお裁縫も上手で、どこへお嫁にいてもほめられ者でした。これは現在の卒業生でも同じことでしょう。

## 生涯独身で教育

「全人教育」という言葉こそまだありませんでしたが、栄子先生を中心に全校の生徒と教職員が一丸となって、よりよい人間になろうと努力を重ねている様子がうかがえます。先生の生い立ちについて触れてみます。先生は明治六年四月十八日に群馬県の館林藩の士族（代々勘定奉行）須賀正直の六女として生まれ、生後一ヶ月も経たないうちに病気で母を失い、間もなく父も世を去り、一番上の姉、寿賀子に育てられました。寿賀子は、明治天皇の内親王である常宮、周宮という二人の宮さまの女官をしていましたが、両親を失ったため、宮中からさがって先生たち小さい妹たちの養育にあたりました。この姉が武士の家の育ちであり、そのうえ宮中に仕えていたので、しつけの点はとくに厳しく、つらいことが多かったことなどを話しながら、人間としての生き方、暮らし方をそのままに生徒た



ちに伝えていきました。

生徒たちは、こうして時にふれ折りにふれて、先生に身近かに接し、その人柄から多くを学びとって、先生の人格に知らず識らずのうちにひきつけられていったわけです。孫にあたる私にとっては、生徒たちに対する「厳しい校長」というよりも、「孫に甘いやさしい祖母」という印象が強かったと思います。私の一家は、祖母とは別に学校の敷地内の家に住んでいましたが、私はしょっちゅう校舎内に住む祖母の部屋に出入りし、泊まったりして大変かわいがられたものです。そして、夏になると、必ず海水浴に連れて行ってくれました。

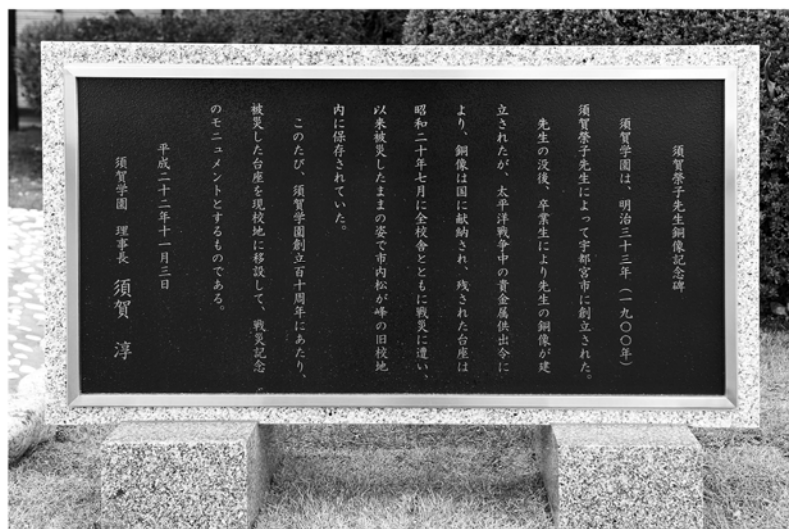
生涯独身のまま、全精魂をこめて、三十五年間ひたすら女子教育ひとすじに情熱を注いだ先生の努力が実を結び、学園も大きく発展していった昭和九年に、教育に対する先生の立派な功労が国から認められ、天皇陛下から単独拝謁を賜るという名誉ある知らせをいただいたのです。先生はじめ、全学園をあげてその榮譽に感激し、先生はその日に備えて身も心も清めておられたのですが、お目にかかる日の直前の十月十四日、突然脳出血で倒れ、数時間にしてこの世を去られたのです。まことに惜しんでも惜しみきれない悲しいことでした。ときに先生は数えで六十二歳でした。先生の献身的な教育を受けた卒業生たちは、その功績をたたえて「須賀榮子先生銅像」を学校内に建立しました。その碑文には次の通り刻まれていました。

先生ハ明治六年四月十八日、群馬縣館林町ニ御誕生。明治二十一年栃木縣尋常中学校ヲ御卒業、更ニ東京神田大成學館ニ遊學セラル。明治三十三年十一月三日、先生多年ノ念願タル女子教育ノ改善ニ志サレ、宇都宮市西塙田町ニ共和裁縫教習所ヲ創設セラル。次イテ明治三十七年、日野町ニ移リ、共和裁縫女學校ト改ム。明治四十三年、現在ノ地ニ校舎ヲ建設シ、且ツ内容ノ充實ヲ計リ、大正十三年、甲種程度ノ女子實業學校トシテ文部大臣ノ許可ヲ得。同時ニ宇都宮須賀女學校ト稱セシモ、後ニ宇都宮女子高等職業學校ト改稱シタリ。先生ハ本校創立以來三十有五年、校長トシテ私學ノ經營ニ教育ノ家庭化ニ、精魂ヲ傾ケテ腐心セラレ、而シテ教育功勞者トシテ表彰セラレタルコト數回ニ及ヘリ。更ニ為ス所アラントセシニ、遽ニ病ヲ發シ、昭和九年十月十四日逝去セラル。今ヤ四千六百餘名ノ卒業生ハ先生ノ急逝ニ遭ヒテ追慕ノ念止ミ難ク、同志相謀リテ銅像ヲ建設シ、以テ御洪恩ヲ深謝スルト共ニ、御高風ヲ永遠ニ記念セントス。

昭和十一年十月十四日

宇都宮女子高等職業學校卒業生同窓會

この銅像は、昭和十九年、戦争のため供出され、その台座だけが、旧校地である宇都宮の校長自宅の庭内に残されていましたが、現在は、睦町の学園本部に戦災の記念碑として移されています。



## 校風高く評価

校舎も明治四十三年には河原町（現町名は松が峰二丁目）に移り、名声も大いにあがって入学生は明治三十三年から大正九年まで二千四百四十四人にのぼり、当時は十六名の教員、二百五十名の生徒、うち寄宿生は百名をこえ、校舎も第一校舎（二階建、一階六室、二階八十一畳）、第二校舎（二階建）にさらに第三校舎（平屋五十坪）を増築し、校旗も制定されました。一人ひとりの適性や能力に応じて実力をつけさせ、健全な家庭婦人を育成するという良妻賢母主義にもとづく校風が全校に浸透し、これが世の識者にも認められ、さらに発展しました。大正十二年には第四、第五校舎も建ち、大正十三年には文部省から甲種実業学校として認可され、校名も宇都宮須賀女学校と改称し、本科甲部は修業年限三年を四年とするなど充実がはかられました。

ここまできたのは、「一人は一校を代表する」という言葉こそまだありませんでしたが、各々の生徒の個性に注目して、「啓発陶冶」に力を入れ、学校運営も家族的で、授業も「実物教授」として実技に重点を置いたその校風が大きく貢献したものと思います。質素勤勉かつ純朴という着実な校内の雰囲気も評価され、栄子先生の伝統は行き続けたのでした。

このように発展を続けましたが昭和初年の世界大恐慌や日本の大凶作のため、農村が疲弊し、東北地方では若い娘さんを身売りするという暗い時代になると、教育どころではなくなり、女学校に進学する生徒が激減しました。学校の経営がとても苦しくなった時代でした。

それが昭和六年の満州事変の勃発で景気が回復すると、生徒数もふえてゆき学校も盛り返しました。生涯独身のまま全精魂と情熱を傾けてひたすら女子教育の普及、向上に尽力してきた栄子先生の姿勢が、時代の荒波の中で改めて高く評価された結果でした。

昭和五年の学校要覧をみると、本科甲部（四年）、同乙部（二年）、研究科（一年）で四百二十九名が学んでいます。授業料は月三円五十銭とあり、年間経費二万三千四百二十五円の学校に成長しています。千四百五坪の校庭に一般教室十、特別教室二、寄宿舎四とあり、他に食堂、病室、標本室などが完備しています。すべて順調に運営されているように見えますが、昭和初年の不況による生徒減の影響は大きく、先生たちの給与が支払えず、栄子先生の生命保険の満期金を充当したりしている実情もありました。

このように「全人教育」の礎を築いた栄子先生を下野新聞は、「とちぎ二十一世紀」（平成 11 年 11 月 25 日付）で次のように取り上げています。

## 受け継がれる伝統

「立派な母親になって、いい家庭をつくりなさい」

一九三四（昭和九）年春、卒業式を間近に控えた宇都宮市河原町（現松が峰二丁目）の宇都宮女子高等職業学校（当時）。二年間の『花嫁修業』を終えようとする生徒たちの教室に、張り詰めた緊張感が漂う。教壇には、校長の須賀栄子がいた。

「あれは作法の授業だったのか…。校長先生が卒業後の心構えを説いたのね」。卒業訓話ともいえる授業を受けた大岡テイさん（八一）＝同市中央三丁目。その訓話を思い出し始めると、大岡さんの居住まいが自然と正された。

当時は男尊女卑の時代。「女子は結婚して家庭に入る」という意識が根強かった。それでも昭和に入ると、職業婦人が増え、大岡さんの学年でも就職する同級生が数人いた。

そんな社会の流れを懸念したのだろうか。栄子の熱のこもった訓話は約一時間にも及んだ。

「これから世の中はどんどん変わり、職業に就く人もいるでしょう。しかし、自分の職業よりも母親であることを大切にしてください。このことを決して忘れないように」

訓話で強調されたのは、良妻賢母の必要性、母性や家庭の大切さ。栄子の教育理念が明快に表れていた。

須賀学園の前身、共和裁縫教習所が設立されたのは一九〇〇（明治三十三年）年。ちょうど一世紀前のことだった。

三〇（昭和五）年の学校要覧に、次のような記述が残る。

『優秀なる女子国民の養成は結局良妻賢母の外に出でざるものと信じ、本校訓育の第一義とせり』

「祖母の考えは徹底していた。裁縫という技能の習得を通し、女としてのしつけ、家を守ることを学ばせたのです」。栄子の孫で須賀学園理事長を務める淳さん（七四）は、創立者の教育方針をこう説明した。

「女徳の向上」を目指すため、裁縫を中心に、修身、家政、算術、歴史、理科、英語などが必須科目として並んだ。栄子自らが教えたのは作法と修身。この二科目は栄子の理念を生徒にじかに伝える場でもあった。

「駄目。やり直し」

作法を学ぶ教室では、しばしば栄子の凜（りん）とした声が飛んだ。

「畳のへりを踏んだだけで叱られる。自分の順番なのに、緊張してひざが震えて立てないときもあった」。二六（大正十五）年に入学した保田絹子さん（八七）＝同市一条三丁目

=には、だれよりも厳しかった栄子の授業が印象深い。

お茶出し、障子の開け閉め、座り方、はしの持ち方、床の間の花の飾り方…。和室の専用教室で、日常生活の基本マナーが徹底的にたたき込まれる。誤った仕方をすれば、即座に注意された。

作法が実践なら、修身は精神論だった。

「女の本分を尽くしなさい。良き妻、良き母として、賢い子供を育てなさい」

「お国のために親孝行し、嫁ぎ先の姑（しゅうと）にも実の親のように接し、主人を大事に。子供には愛情を持ちながらも厳しく育てなさい」

「人のことをうらやまず、さげすまず、疑わず。おおらかな気持ちを持ちなさい」

保田さんは卒業から七十年たった今でも、栄子の教訓を簡単にそらんじられる。「先生は独身だったけど、それはもう懇々と家庭の大切さを教えてくださったから」

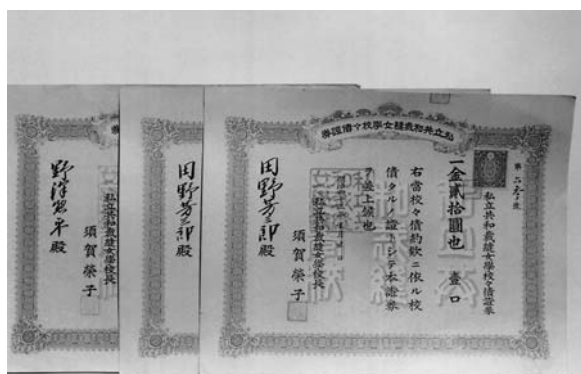
栄子は、生涯で一度も結婚せず、子供を生み育てることはなかった。

学校を設立したときは二十七歳。当時の女性なら十代で結婚するのが主流だった中、栄子はとうに婚期を過ぎていた。「最初から教育一筋。『家庭がなくて寂しい』なんて考えは超越していたはず」と淳さん。

校長として、経営にも携わった。しかし、全国的にも珍しい女性校長。加えて、“官尊民卑”の風潮。この「二重の壁」は厚く、経営は決して順風ではなかった。

好景気に沸いた日露戦争後、銀行ではなく大商人からの起債で校舎増築を重ねた。ところが間もなく、世界恐慌、大凶作のあおりで、生徒数は激減。三〇年ごろには借金返済に収入減が加わり、経営難に陥る。職員給与支払いに困った栄子が、満期になった自らの生命保険を充てたほどだった。

当時の学校理事は地元の大商人が中心。理事会が開かれると、風格漂う、羽織はかま姿の大旦那（だんな）たちが連なった。女性は栄子ただ一人。起債を要請しながらも、明治男と対等に接した。



校債も発行される

「資金集めは大変苦勞したらしい。女子教育にかける熱意を信用してくれたのか、大商人が後援してくれた。今のわたしにはできませんね」 初代校長としての栄子に敬意を表す一方、淳さんは優しく祖母の思い出を次々と披露してくれた。

遊びに行けば毎晩のように泊めてくれたこと、当時としてはハイカラな自転車を買ってもらったこと、校舎を駆けずり回っても叱られなかったこと…。「皆さん厳しい人だったというが、孫の私には甘かった」

夏休みには、栄子は必ず淳さんだけを伴って避暑に出掛けた。茨城県の河原子海岸で、のんびりと過ごした二週間。波打ち際で遊ぶ淳さんを、栄子は砂浜で温かく見守っていたという。そこに、学校経営を一身に背負った女性校長の姿はなかった。

「家庭生活のなかった祖母は、孫と遊ぶのがせめてもの息抜きだったのかな」。淳さんとの触れ合いの中で日々の苦勞がいやされていたのだろうか。

栄子が亡くなってから六十五年。

女性は結婚しても仕事を辞めず、共稼ぎ夫婦が増えた。

そして、晩婚化と少子化が同時進行している。「男は仕事」「女は家庭」といった伝統的な性による役割分担意識は変容し、女性の生き方の選択肢は拡大。良妻賢母が理想像だった時代は過去に追いやられつつある。

「今は女子教育はないでしょう。女も男も一緒。人間教育の時代です」。淳さんの妻で宇都宮短大附属高校副校長の万里子さん（七一）は強調する。

須賀学園も共学に衣替え。時代の趨勢から、教育理念も良妻賢母育成から全人教育に変わった。私学ならではの特色を出し、「次代の人間形成」という栄子の精神は形を変えながらも脈々と受け継がれている。

男女を問わず、自由な時代になった。

「ただ、秩序や規律といったモラルが薄れている。押しつけるわけではないけれど、服装や言葉遣いとか…」。万里子さんは問題提起を続ける。「権利と機会に恵まれた幸せな時代。

もっと自分の人生を生かすやり方もあるのでは。人生を大切に。これは栄子の教えにつながっている」

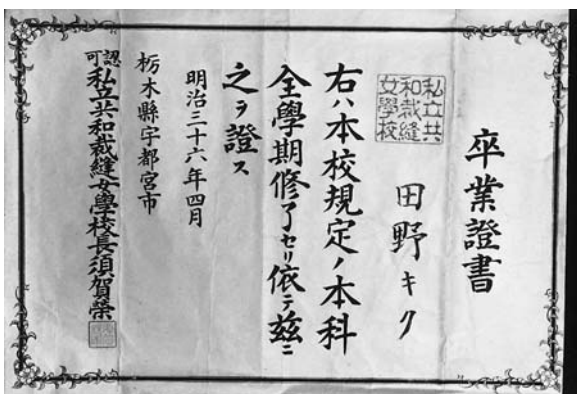
栄子は現代の女性の生きざまをどう見るだろうか。「素晴らしい」と拍手を送るのか。「嘆かわしい」とため息をつくのか。案外、「まだまだ」と叱咤（しった）激励するのかもしれない。

（下野新聞 平成 11 年 11 月 25 日付より）

## つねに新しい足跡を

いま、私の手元に大正十一年三月二十八日の卒業式で行われた栄子先生の告辞があります。

女性の地位向上がようやくはかれるようになり、時代はいよいよ私たちのものになるが、それに対しては責任と義務を負っていかねばならない。これからの人生には多くの苦勞が待ち構えているかも知れないが、一步一步を踏み固めつつ、先人の足跡をただ追うのではなく、自分の力で新しい足跡を残そうではないかと呼びかけています。



共和裁縫女学校時代の卒業証書

それが、文化生活実行に貢献するだけでなく、世界永遠の平和を建設する道に通じると強調しつつ、欧米に負けない智力と体力を向上させよう。小成に甘んじ外形の美のみに溺れることのないようにと、今日でも胸の奥底に響く言葉を残しています。

これを読み返すたびに、栄子先生の教育に寄せる並々ならぬ決意が伝わってきます。遠い昔、卒業式の式場に朗々と伝わる栄子先生の声こそが私にとってもひとつの励みになっています。即ち、初心忘るべからず、「全人教育」の歴史と伝統を守るために、私もすべてをつくしたという先生の気持ちに他なりません。栄子先生の告辞全文を紹介しましょう。

本日は貴賓の御來校を辱ふして爰に本校第三十八回の卒業證書授與式を舉行致しますことは、啻に本校の光榮たるのみならず又以て卒業生諸子の光榮とする處であります。

卒業生の方々の中には今後専攻科に入られて層一層勉強せらるゝ方或は都の學校へと心ざす方も在らるゝならんが、大部分の方々には家庭の人として社會の實際生活にふれらるゝ事と思ふのであります。従來學校の性質から個人的に接近する機會が多いために時より折にふれまして種々訓誨も與へましたし、諸先生からも御教授をお受けになつた事ですから、今更呶々する要もありませんが、今日が最後と思ひますれば饒として一言致し度く考へるのであります。

皆様も既に御承知の通り、夫の世界的動亂の吾々に與へました教訓は實に偉大なるものであります。時代は急激なる變化を致し、而して社會一般が有形無形共に一大革新せられました事は争はれません。就中我々婦人として最も喜ぶべき現象は婦人尊重の聲でありまして、今や婦人に關する種々有益なる問題が研究されつゝあります。凡そ社會に於ける男女の責務は夫の車の兩輪の轉々する如きものであつて、即ち兩々相俟て完全に遂行せらるゝにも拘らず、過去に於ける我々婦人は社會から遠く葬られて何んとなき壓迫的制裁の下に立たなければならぬやうな痒ゆい境遇でありましたが、今日は眞に其の實力と其の使命とを發見されたやうに思はれます。従て我々婦人の地位は漸次向上の機運にあるのであります。皆様は幸にして其の天分を認められ、其の實力を發揮し得る權威を與へられたる今日世に立たるゝ運命に遭遇せられた事は實に幸運であると思ひますが、翻て考へますと、斯く從來曾て類例のない幸福の位置に置かれた皆様は、其の知遇に對し又其の期待に對する當然の義務として其れに應酬する覺悟が無ければなりません。即ち其の使命と其の責任とを全ふするだけの準備をなさねばなりません。

而して今後皆様の進むべき道は何でありませうか。申すまでもなく社會と言ふ廣漠たる旅に向て出發するのであります。所謂人生至難の行路を一步一步と踏み行くのであります。噫々前途は遼遠です。殊に皆様は畜に先人の踏みあらしした足跡のみを追ふに止らず、進んでより新らしき足跡を印付けねばならないのであります。

言ひ換へれば、從來の固陋なる日常生活の向上改善を計り眞に充實しました文化生活を實行すべく貢獻せねばならないのであります。殊に今世界を通じて唱導せらるゝ世界永遠の平和を建設し保護する事は、我々婦人の任務であらねばなりません。而して一方に於いて賢明なる母として次代の後繼者たる子女を教養せねばなりません。

以上は即ち皆様方の行路の目標でありまして、我々婦人の天分であるのであります。皆様が今日まで習得せられました教科は之を諸子今後の責務と社會實際生活の複雑との上より見れば、餘りに簡単に又餘りに幼稚に思はるゝのであります。殊に來るべき平和の時代に於ては智力と體力との向上の必要あるは言をまたざる處。我國婦人は前二者に於て遠く歐米婦人に及ばずと聞きますから、皆様今後の御修養の標準も亦之れに由らねばなりません。兎角年若き婦人の常として小成に安んじ、只管外貌の美のみを衒ひ、淺薄なる歡樂虚榮に憧憬するものがあります。或は自己の天分を没却して放縱なる生活を夢み勤勞を厭ふの傾向なきにあらず、否正に現代青年子女の間に此の風浸潤しつゝある事は誠に慨嘆に堪へないのであります。



皆様は幸に純朴なる地方に成長し温良なる空気の中に人となられました。今後も須らく其の純朴を汚す事なく、宜しく自己と自己の環境とを了解し、質實勤勉の人として眞摯に其の使命を全ふせられん事を願ふて止まざる次第であります。

あの日 あの時

「厳しい中に温かさ」

ひめまつ 6号から

戦前の本校の寄宿舎はどのようなものだったのでしょうか。卒業生でもある戸室文子先生は、「しつけがきびしく、日常生活の基本はもとより、服装容儀についても徹底した指導を受けました」として、栄子校長先生の薫陶を受けた舎監の渡辺キノエ先生が、いつも銘仙を美しく着こなし、アイロンをかけた真白い足袋をはいて寄宿生の指導にあたっていた日々を書いています。

ある日、机の上に本をひろげたまま外出すると、帰ってから舎監室に呼び出され、「後始末をきちんとしてから外出しなさい」と注意され、以後この言葉を実践するよう努めたそうです。しかし厳しいばかりでなく、渡辺キノエ先生は日曜日には寄宿生を連れて、栃木市郊外の太平山にみんなで楽しいハイキングに行き、いっしょに歌をうたったり、神社に参拝したりと、あたたかな家庭的雰囲気づくりをいつもしてくださったことが忘れられないそうです。

(昭和 27 年 3 日発行)

### 第三章 実務教育に全力、友正校長

#### 父が後を継ぐ

栄子先生が、昭和九年十月十四日に六十二歳で急逝したあとは、栄子の甥で養子となっていた私の父・友正が校長を継ぐことになりました。

友正校長は、須賀学園が誕生した翌年の明治三十四年の十月三日生まれで、東京の蔵前高等工業（現在の東京工大）を大正十二年に卒業後、当時の日本のトップ商社であった高田商会に就職して、ドイツのハンブルグに行くことになっていました。しかし、関東大震災で一変、宇都宮に引揚げ、開校したばかりの県立宇都宮工業学校の安美賀校長（蔵前の先輩）に招かれて同校の教員となり、数学、物理を教えていました。父は宇工の教員をつとめながら、大正十四年から本校で数学と英語の授業も担当していました。父は音楽好きでピアノを弾き、音楽教員のいなかった当時の宇工で式典の折りには君が代を弾き、宇工創立五周年記念の校歌の作曲までやっています。後年甲子園に宇工高が出場し、勝つと、テレビの画面に「作曲 須賀友正」と校歌の字幕が出るので大喜びでした。

本校の校長を引き受けたときの様子を生前次のように語っています。

宇都宮工業を三十三歳で退職し、須賀学園の校長になったとき、生徒数は三百名でした。十年間、県立の工業高校の教員をやっていて、本校の経営にはあまりたずさわっていませんでしたので最初苦労は多かったものです。その後校運はますます盛んになり、学校も大きくなっていったのですが、昭和二十年の宇都宮大空襲で、学校全部が焼け、何もない学校になってしまった。私としては一番苦しく、学校をやめようか、あるいはまた学校を再興しようかと、こういう苦労があったのですが、その当時のPTAの方々および卒業生の方々が、是非とも学校を復興してくれと、いろいろ後援をしてくれ、県のお世話、その他私学の皆さん方のご援助により、学校をもう一遍やろうと、旧軍隊の兵舎を借りて、再発足をしました。

友正校長は、須賀家の跡継ぎとしてごく自然な形で栄子先生の後の校長を引き継ぎましたが、宇都宮工業での活躍という実績も手伝って、須賀学園はりっぱに継承された、しっかりした体制ができていると多くの方々に安心感を与え、学校関係者や教職員はむろんのこと、生徒やその父兄も栄子先生急逝に動揺せずに学校が発展することができたのです。私は当時小学校四年生でしたが、栄子先生がお亡くなりになって数日後、校庭に大テントを張って全校生徒が参列して行われた盛大な学校葬の様子をよく記憶しています。まだ三十三歳の若かった友正校長が苦労の多い私学を背負って立つという思いは大変なことであつたらうと想像されます。

## 母華子も教壇に立つ

私の母須賀華子は、明治三十九年に矢板市の北にある宇津野というところで生まれました。名前は渡辺ハナといい、ハナの母は本学園の第二期生（十四ページ所載）の渡辺甲（キノエ）です。渡辺甲は塩谷郡の宇津野（現塩原町）で医者の子一人娘として育ち、遠く本校に学び、卒業後医師と結婚し、黒磯市で医院を開業しました。

しかし、若くして夫に先立たれたので、幼い子供たちとともに、母校に戻って裁縫の教員になりました。そして、娘のハナたちと一緒に、宇都宮の学校内の寄宿舎で、舎監として栄子先生を助けて生涯を過ごしました。そのような縁で、ハナは大正十二年に十九歳の時に、在学していた和洋女子専門学校（現和洋女子大）を中退して、父・友正と結婚しました。友正校長就任に合わせて、母も和裁や礼法の授業に出るようになりました。

華子は栄子先生に小さなころからとても可愛がられ、気に入られて、父と結婚し、栄子先生が亡くなったあと夫婦そろってこの学園を守っていくことになったのです。

母は友正校長の影に隠れてはいましたが、二人でいつもどのようにして学校を盛り立てていくかを真剣に話し合っていました。父はそれを黙って聞きながら十分に検討したうえでものごとを進めていったようです。これが大きな力を発揮したのが、戦後の戦災復興期ではなかったかと思います。教職員を励ましながら、校舎を建て、生徒を集め、学校をいかに経営していくか、友正校長との二人三脚で、その内助の功は大きなものがあったと思います。

私は、こうした父母のもとで大正十三年の九月二十日に生まれました。男ばかりの三人兄弟で、私が長男です。父も母も子どもには厳しい人でした。私たち兄弟は男の子ですから、始終けんかをして、父母からよくげんこつをもらいました。



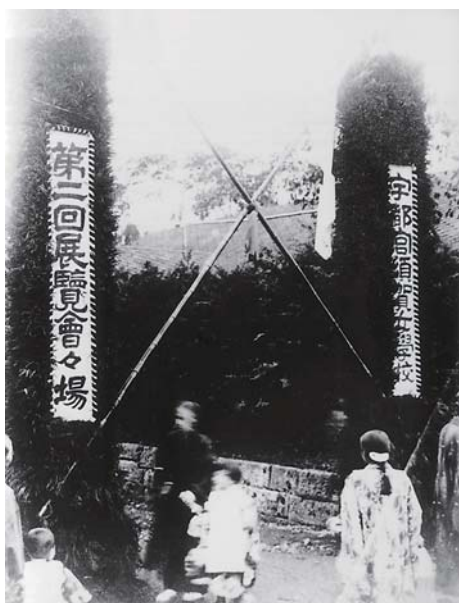
当時の礼法指導のようす

## 名物バザーはじまる

友正校長は、校長就任を決めたものの、宇工からすぐに辞められては困るといわれたため、とりあえず本校には教頭を校長事務取扱いとして置いて、いわば二足のわらじをはいて務めました。

栄子先生がたった一人で創立し、りっぱに発展させた学校をいかに守っていくか、それは想像をはるかに越えた大変な仕事だったようです。年々生徒も増えるので、これに合わせて教室や備品も用意しなければならず、教職員みんなで力を合わせ、地域の応援を得て乗り切ってゆきました。その象徴がバザーではないかと思います。今日でも、学校祭、音楽会などさまざまな行事に、その伝統は息づいています。栄子先生によってはじめられたバザーの評判は大変なものでした。

開催日は、宇都宮二荒山神社の秋の大祭である菊水祭に合わせて、十月末の三日間となっていました。一学期から各科の先生方は製作品の選定、即売品の材料購入、指導にあたり、生徒達も努力を惜しみませんでした。その結果、バザー当日には、生徒の作品とは思えない立派な作品や即売品が展示即売されました。開門と同時に大変な人で、下足の用意も忙しく、そのうえ即売品は予想に反して早くも二日目で売切れ、三日目の来客には品切れのお詫びをする始末でした。



宇都宮名物となった学校祭バザー

これほどの盛況は誰も考えず、皆の努力が報いられたことを教職員も生徒もいっしょになって喜び合いました。各商店もこぞって協力し、果物は及川果実店、瀬戸物はゆみや陶器店、金物はタカラ屋金物店などと決め、以後バザーの際には、必ず協力してもらいました。

## 栄子先生の銅像

昭和十一年四月、友正校長が宇工から戻り、正式に校長に就任して、学校の全般を見ることになりました。この年から校地、校舎の整備に着手しました。年々増加する生徒を収容するための校舎建築と運動場用地の買収、そして将来建設予定の講堂用地のために、校長宅を取り払い、校地を広くしました。同時に設備器具も沢山購入し、学校は内外ともに整備されました。当時として珍しかった放送設備も整い、全校体操なども出来るようになりました。友正校長としては、良家の子女を預って教育するにはそれにふさわしい施設設備を用意しなければならない。公立のようにはいかになくても、実務教育を看板にしているからには、生徒に不自由をかけてはという気持ちが働いたのでしょう。就任と同時に取り組んだ施設設備の整備は、生涯頭を離れることなく、つねに最優先で進められました。

当時学校では、修学旅行が盛んに行われるようになりました。春は矢板の長峰公園、あるいは大谷へ、秋には上級生は関西旅行など、友正校長はみずから引率して行っていました。

こうした中で、写真のように昭和十一年十月に栄子先生の銅像が建設されました。正門を入ったすぐ左手のみかげ石の高い台座の上に銅像が置かれました。先生の像は芸術性高い立派なもので、袴を着けられて、椅子にきちんと腰かけ、いかにも先生の礼儀正しい性格がそのまま現われていました。卒業生たちは女性である先生が、男性に劣らぬ立派な教育者であることをなつかしく偲んだものです。この銅像は、太平洋戦争末期に、金属類供出の国家命令で供出されてしまったことは生徒たちに大きな衝撃を与え、いつまでも語り伝えられていましたが、昭和四十五年に現在の高校本館が建設されたときに胸像として再建され、現在は須賀栄子記念講堂のロビーに安置されています。旧銅像の台座は学園のシンボルとしてよみがえっているのは前述した通りです。(十七ページ参照)

## 第四章 激動の戦時中の学校生活

### 戦争で変わる学校

私が昭和十二年三月、宇都宮の西小学校を卒業し、宇都宮中学（現宇都宮高校）に入学したころから、学校も戦争の渦の中に巻き込まれていきました。宇都宮中学は県内の名門校で、村からは一人でも入れば良いほうでしたが、西小からは、大勢が入学しました。とって今のような受験勉強はあまり必要ありませんでした。

この年の七月七日に日中戦争が始まりました。国全体に軍国主義の風潮が高まり、戦争という一種の緊張感の中で勉強しました。とくに宇中は、質実剛健の気風が徹底していました。

須賀学園は八月には、中国に出征する部隊の臨時兵舎となり、大勢の兵士が宿泊し、職員と生徒たちは洗濯などの奉仕をして、戦地に送り出しました。戦争の波は、女学校といっても例外ではありませんでした。もともと、温和、貞淑、良き家庭人となるよう教育が行われていましたが、戦時下にあっては、質実剛健、そして、銃後をよく守る家庭人の育成に重点がおかれ、授業の内容はほとんど戦争遂行への協力となりました。国語の時間に戦地への慰問文を書き、和裁洋裁の時間には、陸軍病院から依頼された白衣の製作、体育の時間には薙刀の練習が組まれました。出征兵士の歓送迎には日の丸の旗をもって、昼夜の別なく出かけては、勇ましい軍歌を皆で歌い出征兵士を励ました。

この頃学校前の旧城跡の百間堀の埋め立てが終り、埋立てたあとを学校の運動場として購入し、冬はスケート場になりました。

出征する兵士を見送る回数が増えて、戦争が徐々に拡大する重大さを感じながらも、生徒たちは楽しい学芸会を開くなど平和な学校生活を送っていました。

しかし、私の通っていた宇都宮中学校からも先生方が出征して、戦死された方もあり、学校で校葬などがありました。宇中の授業も、銃を担いでの軍事教練が多くなり、武道、教練の時間が増えて、体の弱い私にはとてもつらくて、野外行軍はこたえました。太平洋戦争に突入する前からだんだん物資が不足し、生活物資にも不自由を感じる時代になりました。

この時代、男子の学校では、成績の良い生徒は、軍人のコースを歩んで出世することを目標に、陸軍士官学校、海軍兵学校へ進み、エリート士官となりましたが、私のように軍人に向かない生徒も多く、旧制高校などに進んだものです。

私は将来、父のあとを継いで学校経営をやらなければ、と考えていました。生前祖母の須賀栄子先生は孫の私をしょっちゅう側において、「お前は、須賀家の跡取りです。須賀家の孫として恥ずかしくないような振る舞いをするように」と厳しく育てられていたので、

知らず知らずのうちに、そうした自覚ができたと思います。

## 勤労奉仕が勉強

戦争が本格化すると、学校も勉強どころではなくなります。当時の学校の様子は、学校の先生の記録によると次のようなものでした。

昭和十三年六月には文部省令で各中等学校は集団勤労奉仕をするようになり、女学校でも学校勤労団を結成して援農作業に出ました。農家の生徒は勿論休暇が許可され、残った生徒は、白沢、宝木、城山村など、各方面に出かけましたが、農業の体験がない生徒は大変辛い思いをしました。だんだん慣れてくると、不馴れだった者も大変上手に田植え、稲刈りができるようになり、また国の体力検定が始まり、駄足、幅跳び、マラソン、砂袋運搬と、今考えると、全くナンセンスとしか考えられないことが行われました。

戦争は中国全土に広がり、国民精神總動員で、授業は戦争遂行のためと変わって行きました。慰問袋用の人形を手芸の時間に作ったり、白衣、蒲団類は和洋裁で作りました。

昭和十四年四月に入ると、新設される護国神社の敷地用の砂、石の採取運搬等の勤労奉仕作業が始まりました。鬼怒川まで行軍して、砂や石を採取して学校に運びました。この作業を通して生徒に敬神崇祖の念を養おうというのです。

護国神社はそれまで、招魂社といい、宇都宮市のバンバの中心街の丘の上にありましたが、護国神社と名を改め、現在の場所に移され、各学校が勤労奉仕をしたわけです。

国民精神總動員は日華事変と共に各自の心の中に深く刻み込まれていき、軍旗祭、陸軍記念日、海軍記念日などの行事を通して国民は戦争遂行へと向いました。

昭和十四年五月には、「青少年学徒ニ賜リタル勅語」が下賜され、各学校が集って「勅語奉戴記念栃木県青少年学徒報徳勤労団」が結成されました。本校も校名入りの団旗の奉戴式を行い、以後は報徳勤労作業と呼んで、援農だけでなく、軍需工場の作業に奉仕しました。

全国の学生、生徒の御親閲が宮城前で行われるに合せて、市内でも分列行進が二荒山神社から、桜通りまで行われました。

毎月一日は興亜奉公日となり、記念式を行い、朝礼で宮城遙拝をして戦没者の英霊に黙禱を行うようになりました。

当時の歩兵第五十九連隊や陸軍病院の見学もありました。初めて見る訓練や宿舍内の行き届いた整理整頓の状況、食堂、炊事室の器具類にびっくりし、陸軍病院の応急手当法、

担架の扱い方等の講習も受けました。

授業は、軍関係や婦人会からの依頼品の作成を優先し、また、実習用材料の不足が目立ち、廃物利用が盛んになりました。保育所の手不足で、県から命令されて、数名ずつ交代で実習生として出ました。

昭和十五年は神武天皇即位紀元二千六百年で、全国で記念祝賀行事が行われ、盡忠報国を最高に盛り上げた年でした。

新入生は一組六十五名と多人数となり、和裁授業は、机間巡視も出来ないほどでした。

学校も新しい講堂を紀元二千六百年記念事業として建築することになりました。

集団訓練が増すに従って、体育の時間には、女子にも軍事教練の指導が始まり、号令、分進行進という勇ましい時代となり、服装もモンペ着用が普通となってきたのです。

遠足も身心の鍛錬であり、勤労作業で鬼怒川で砂利採取、歩け歩けと歩く運動を奨励、国旗掲揚塔が前庭に建てられました。

朝礼では、「君が代」の放送と共に国旗が掲揚される時、ひしひしと何かを胸に感じ、戦場の兵士に式運長久を祈り、涙ぐむ時さえありました。出征兵士の見送りが頻繁になり、戦死した英霊の出迎えが目立って増えたのは悲しいことでした。農家の人手不足が深刻となり、要請があると、すぐ奉仕に出る体制で、田植え、芋掘り、稲刈り、脱穀と、何でも手伝えるようになりましたが、何しろ遠い道を耐えて歩く生徒の姿はかわいそうでした。燃料その他日用品に至るまで配給制度で切符購入。調味料類、マッチにも適用されました。

一方、運動競技大会はますます盛んで、この年も県大会で卓球部が優勝、秋には、運動会を市営球場で開催、市内中等学校以上の合同体操大会にも参加して、「見よ東海の空あけて…」の愛国行進曲の音楽により国旗を力いっぱいふってマスゲームに参加し、「君が代」の大合唱では萬感胸に迫り、忠君愛国の念を一層強くしたものです。

修学旅行も食事を心配し、各自一週間位のすぐ食べられる食糧（焼きおにぎり等）を物参して出発、旅館では、食事はコッペパンが出て驚きました。

## 援農に出る

このように、学校が戦争に巻き込まれていく様子を紹介したのは、今日、誰もが平和を当たり前ととらえ、自由に安心して勉強できる環境に何の疑問も感じなくなっているからです。世界の国々の様子を見ても明らかなように、勉強する、学べるというのは、その国が安定して、皆が安心して暮らせるようになって初めて確保されるものです。毎日の授業が、戦争というただ一点に向って進められれば、それぞれが好き勝手に学ぶわけにはいかない様子が良くわかってもらえると思います。国語、家事、数学、体育などいくら科目



がならんでいようとも、すべてが銃後の守りに注がれてしまいます。

現在の学生生徒の皆さんにはお祖父さん、お祖母さんの時代のできごとにすぎないと感じられるかも知れませんが、学校はつねにその時代と社会とともに生きている、それらと無縁ではあり得ないのだ、という事実を理解してもらいたいと思います。

そのために、つづけてもう少し戦争中の様子を見てみましょう。

護国神社の例祭が盛んになる半面、遺族の方々が増えるので、誰もが内心は一日も早く戦争が終るよう祈願しました。

授業は、戦争関係の縫物、割烹（今の調理実習）も代用食の調理法に変わりましたが、まだ材料は手に入り、実習は出来ました。「栃木県学校報国団」が結成され、校名入りの報国団旗が与えられ、援農の生徒は各中隊、各班という名称で呼ぶようになりました。

昭和十六年九月三十日には「日独伊三国同盟締結に関する詔書」の奉読式、訓話、二荒山神社、護国神社に参拝必勝祈願。独軍はソ連に破竹の進撃で、強国であると国民は信じました。

稲刈りが始まると、自轉車の生徒は田原村方面の遠方まで、徒歩隊は姿川村、瑞穂野村、平石村方面まででかけました。農家男子の召集による人手不足は益々深刻になって来ました。

突然十二月八日早朝ラジオで「大日本帝国陸海軍は、本日八日未明、西太平洋において米英両国と戦争状態に入れり…」と放送があった時、全身から血の気を失いました。登校した職員生徒は、これから先どうなるのかとひそひそ話、重苦しい一日でした。しかし、その後次々と報道される華々しい戦果で、協力一致、必勝の覚悟を決めました。

朝礼で友正校長は、緊張した面持で「各自奮勵努力、必勝の決意を…」との訓話がありましたが、みんな元気なく、戦争がどうなるのかと考えるだけで戦果の素晴らしさを喜びつゝも不安を感じました。

たまたまかねて本校創立四十周年記念事業として計画されていた講堂の建築が十二月から始まることになっていました。戦争のため資材不足も心配されましたが、予定通り着工することとし、翌年完成しました。この講堂も昭和二十年七月の空襲で全焼し、わずか三年半の寿命となったことは悲しいことでした。修学旅行は許可され、お米持参で行きましたが、旅館での食事は大変悪く、焼おにぎり等を持参してしのいだものです。そんな中でも学芸会は開催され、卒業生は楽しい一日を過しました。

社会情勢を反映してか、昭和十七年の本校受験生は、例年になく多く、一クラス六十五名となりました。二月の麦踏み動員が終ると五月の田植え、田の草取りの作業で雀宮村へ、宿泊動員との通達があり、交代制で雀宮中央小学校に百余名、同じく東谷分校に五十名が出かけました。炊事場での作業は大変で、朝食が終るとすぐ昼のおにぎり、夕食は、疲れて帰る生徒を元気づけるための献立、材料集めでした。最後の夜の演藝大会は楽しい思い

出でした。農家で出されたおやつのお芋を少しでも残して、炊事班に差し出す優しい心遣いは真にうれしいことでした。

戦況がきびしくなると防護団の結成指示があり、非常の際の召集通信網や学校警備隊の編成をして訓練が始まりました。重要書類の運搬、消火班の活動、救護班は担架を持ち出しての訓練を在郷軍人会の指導で行いました。

十月には県の体操大会が開かれました。秋晴れの下で勇ましい行進曲で踊ると、頭上では昨年と違って飛行機が盛んに練習していますので、何か落着けず、余り楽しさの味わえなかった一日でした。強歩の行事として、清原飛行場までグライダーの見学をするよう通達があり、リュックを背負って出かけました。

学校前の百間堀が完全に埋立られ、運動場とし整備され、早速小運動会が開かれました。

待望の講堂も落成しました。仕切用の衝立で二つに分かれて、ひとつは畳敷きとして、専攻科室と礼法室となり、全体に椅子を入れると音楽ホールとなり、大変便利に使われました。糖袋で床を磨き上げ、いつもきれいに掃除する専攻科生の努力には頭が下がりました。

この頃から警戒警報の発令が始まりました。国民の知らぬ間に、戦況は不利となっていたようですが、こんな状況下で修学旅行当日となりました。突然の警報発令で生徒は学校に集合したものの、なかなか解除にならず、各校の判断で出発と定まり、出かけたものの、冒険でした。リュックにはズボンやモンペを食糧と共に持参しましたが、思った程でない関西方面の生活状況に安心しました。お土産物もまだ豊富にあり、沢山買って、楽しい旅でした。

## **戦争拡大で授業中止に**

昭和十八年、この年で日本の敗戦国となる兆しは出たといっても過言ではありません。

寒風を突いての麦踏み援農は、城山村、姿川村へ。卒業する三月の楽しい行事は次々と廃止となり、ただ言葉で元気づけて卒業生を送り出しました。

四月の新入生の服装もモンペ姿と変わりました。いよいよ戦局急を告げる時となりそうな予感でしたが、案の状連合艦隊司令長官山本五十六大將が南太平洋上空において壮烈なる戦死と発表され国民は色を失いました。

五月、戦闘用の物資である弾丸の不足が始まり、その資材となる金属の供出のため全国に貴金属や銅像その他銅製品の供出を命令されました。卒業生が力を合わせてつくった須賀栄子先生の銅像もその後供出されることになり、悲しいお別れの式で友正校長以下全員

で「国を助けて下さい」と祈って送り出しました。

空襲に備えて、勤労作業として防空退避壕を作り始めました。高台の運動場に通じる坂道の左側竹藪の下に横穴を作り、学校の重要書類を藏い、また西校舎の西側高台運動場の下に八米位の横穴二つを作りみんなで度々退避しました。職員は防護団に関する講習を受けるようになり、女子の先生は東京の伝染病予防研究所内で救護訓練の実地訓練を受けました。研修の最中に空襲となり、暗闇の中を前の増上寺の境内に逃げ込んだこともありました。

九月には、とうとうイタリアが無条件降伏し、何も分からない国民には大きなショックでした。三国同盟の中の一国が崩れたのですから。

上級生はほとんど全員が工場動員となりました。宇都宮市江曾島にある中島飛行機宇都宮工場には約二百名、作業は、飛行機内の床板張り、座席作り、機胴体の鋸打ち、溶接等で、時には退避壕掘りをしました。雀宮村にある関東工業株式会社には約五十名、一日三交代で、大砲の玉磨き、溶接等でした。藁人形を竹槍で突く訓練も受け、空襲で防空壕へ飛び込んだこともありました。

下級生は作業が終ると学校へ帰り、ある程度の授業はありましたが、警戒警報発令となると帰宅させるので、落着いて勉強することはできなくなりました。

昭和十九年、工場動員はそのまま続き、仕事に追われ卒業式の当日は午前中作業、午後卒業式でした。工場へ上は制服、下はモンペ姿で集まりました。工員さん達は、久し振りで女学生らしい服装なので喜んでくれたようです。

戦局不安の時、またいつ会えるかわからず悲しい別れでした。卒業生の中には徴用されるのならと、そのまま、工場に女子挺身隊員となって残った人が多数ありました。

召集兵士の出征が多く、見送りは最夜中でも勇んで駆けつけ、寒い沿道で日の丸の小旗を振って、声をはり上げて、万歳万歳と叫び続けました。

空襲警報が出るたびに職員は学校へ駆けつけ警備に当り、生徒も夜半に駆けつけてくれる者もいました。

四月新入生を迎えましたが、やはり動員下で、上級生は引き続き工場へ、下級生の残留生は援農作業で、学校へは一部の警備隊員と作業の終わった生徒がポツポツと登校する状態でした。

学校では、体力増強のために朝礼の後、校門から国道に出て、松が峰教会を廻って帰る駆け足鍛錬が始まりました。少々の雨でも挙行という苦しい鍛錬でした。

工場では、一般工員さんに負けじとよく働きました。作業衣姿で、頭には「神風」と染め抜かれた鉢巻を凜々しく結び、班長さんに、軍隊式の号令をかけられて、飛行機の足作り、鋸打ち、時々工員さんに叱られる時は、思わず胸の中が熱くなるのでした。女学生が

作った飛行機が果して飛べるのか…と生徒も大変心配して口にするほどでした。空襲が始まると、二軒もある西方の退避壕まで何千人が一緒になって走る光景は大変なものでした。心臓の弱い者にはついて行けず、押し込まれるようにして林の中の壕に飛び込みました。

七月サイパン島陥落の報道とともに、急に空襲の回数が増え、東京にB29の大編隊が来襲しました。学校に集まった職員は一様に南方の夜空が赤く映るのを見る事が出来たほどでした。

昭和二十年三月、新入生は相変わらず多数入学しましたが、授業どころではありません。女子供も老若を問わず竹槍の訓練と焼夷弾に備えての防火訓練が厳しくなりました。

援農作業、工場作業は相変わらずで、専攻科生は清原の宇都宮陸軍航空廠へ動員となりました。

毎朝七時半に松が峰幼稚園に集合、軍隊のトラックに乗り航空廠に行き、隊列を組んで衛門を「歩調取れ、頭ら一右」の号令のもとに入り、作業は洗濯、ミシン繕いということでしたが、馴れてくると、壊れた飛行機の分解作業を命ぜられ、大きなハンマーを振り上げたり、部品の山を運び出すやら、もう勝てないと感じた毎日でした。

東京は連日の空襲で、いよいよ今度は北関東に空襲があると予告されました。五月独軍も降伏という報が入り、本土決戦と覚悟をしました。

二月十日にはじめて宇都宮の上空をB29の爆撃機約五十機が飛んで行く姿に驚き、高射砲は、遙か下で炸裂、ただ一機追跡して行く日本の黄色の練習機がありました。練習機で追うほど、戦闘機の不足を考えると、いよいよ敗戦を強く意識しました。

この時群馬県太田市が大空襲を受け、中島飛行機の軍需工場は全滅となりました。

友正校長はこの爆撃機が飛んでいる最中、工場の生徒を大変心配し、空襲警報発令で人の姿もない中を、急ぎ工場まで、国道を矢のように自転車で走り、退避して誰もいない工場に飛び込み、守衛から、「空襲だ隠れる隠れる」と怒鳴られたそうです。それには耳を貸さず江曾島の林の中へ…生徒の元気な姿を見て、安心したのです。生徒を預っている以上、一人一人の安否こそ大切だと生徒を身をもって守ろうとする様子に生徒たちは感動しました。

七月十二日夜十一時三十分、B29の来襲で、雨の中多数の焼夷弾の投下、カラカラと金属音を立てて落下して来るや否や、筒の中から物凄い炎が一米余も上がります。宇都宮市内の下町のほとんどは焼失し、本校も被災し、全焼しました。昼には艦載機が襲来、機銃掃射をして市上空を旋回するので、慌てて壕に飛び込みました。焼け跡にただ茫然と立ちすくみ涙々でした。校長宅も焼失しましたが、心配して集って来た生徒達にてきぱきと応待する姿を見て生徒たちはまた職場に戻りました。生徒の中には被災して、暫くは住所不明の人もありました。

八月にはとりあえず友正校長のかって勤務した県立宇都宮工業学校の南側校舎を借り、学校を再開しました。休み中なので生徒は登校せず幸いでした。

八月十五日正午ついに無条件降伏ということを知られました。工場に動員された生徒も行員さんも全部作業を中止して、ぞろぞろと沈んで家路につきました。一人として、語り、笑う人もいません。黙々と歩いていました。明日からどうなるのかという心配が無条件降伏で一層不安となりました。次の日学校へ登校できる者はほとんど集合、友正校長から訓辞があり、当分休校となりました。

九月の新学期が始まって、食糧増産のため鶴田町の羽黒山の開墾を命ぜられました。残留生も学校の焼跡の後片づけで勉強らしい勉強はしませんでした。十月一日から県立宇都宮第一高女（現宇女高）の南側校舎一棟と市立実践女学校（現在桜小）の西側校舎一棟を借りて授業を再開することになりました。

## 学徒出陣で入隊

本校の生徒たちが戦争中いかに活躍したかがよくわかったと思います。友正校長以下すべての教職員が生徒といっしょになって、銃後とはいえ国のためによく頑張っていて戦っていました。女子生徒も動員され、しかも飛行機づくりという不慣れな仕事に取り組んでいたのです。

ちょうど、その頃昭和十七年に、私は県立宇都宮中学を卒業し、旧制成城高校に進学しました。すでに太平洋戦争に入っていましたが、成城学園は私学ですから、戦時中でも非常に自由で、そこで学ぶ同級生は、良家の子弟が多く、みんなのんびりしていました。私は成城学園ではじめて全人教育の真髄にふれることができました。個性を尊重し、各人が自主的に行動する雰囲気、それまでの質実剛健の県立中学とのちがいにびっくりしました。音楽も盛んで当時有名な指揮者であったローゼン・シュトックが合唱団の指揮をしていました。私たちは休み時間には全員で合唱などしていましたので、今でも当時の歌をドイツ語で歌うことができます。戦後小沢征爾を生んだのも成城学園の個性尊重の全人教育の成果だと思っています。

私たちのクラスは四十人に満たない少人数でした。戦局がだんだん厳しくなると、私たちは、勤労働員で厚木の海軍航空基地の建設工事に行かされたり、川崎の軍需工場で飛行機の部品などを作りました。

昭和十八年には、学徒出陣が始まり、私たちは学業途中でみな陸海軍に入りました。出征すれば、ほとんど戦死するという時代でした。私も入隊することとなり、日の丸を肩にかけて、家族と最後の記念撮影をしました。本校に残っていた数少ない生徒と先生方の見送りを受けて宇都宮を後にしました。もちろん生きて帰れるとは思っていませんでした。戦争で死んでいった出陣学徒が残していった日記や遺書をまとめ、ベストセラーになった「聞けわだつみの声」は、私の先輩、同輩です。

私は、特別甲種幹部候補生として東京の陸軍輜重兵学校に入校しました。輜重兵とは、兵器、食糧、被服などの運搬、監視に当たることを任務としますが、当時は馬から自動車の時代に入っていましたので、そこでトラックの運転の訓練を受けました。運転といっても、今のように自動車教習所で行うようなものではありませんでした。「ガソリンの一滴は血の一滴」といわれるほどに貴重でしたので、車を手で押して練習しました。今にしてみれば、こっけいなことですが、みんな真剣そのものでした。

少し車の運転ができるようになったときには、戦局がますますひどくなり、軍需工場の疎開を手伝わされたり、昭和二十年三月十日の東京大空襲のときは、焼跡の整理を命ぜられました。このようなときは、ガソリンが配給になり、運転の練習も兼ねて東京の街に出かけていきました。

私は、軍隊に入って厳しい訓練にさらされたので、もともと体が弱かったうえに栄養状態が悪かったので、体をこわして、東京の第二陸軍病院に入院しました。その後、自宅療養が認められ、宇都宮に戻りました。丁度そのとき本校が七月十二日の宇都宮空襲で全焼したのです。私は友正校長とともに本校校舎の最期を看取ったのです。戦局が悪化し、のんびり療養生活が続けるわけにもいかず、七月中旬軍隊に戻りました。

それから一ヶ月も経過しないうちに終戦を迎え、さすがにホッとしました。「これで戦争が終わった。やっと家に帰れる。」という思いでいっぱいでしたが、私たちの区隊長（学校でいえば担任の先生）が自決したのにはびっくりしました。

私の苦勞に比べると、友正校長を中心にした学校の方が、十倍も二十倍も大変だったと想像します。とりわけ、女学校にとっては勤労働員がどんなにつらかったか、といまから考えると涙を禁じえません。食料も十分でない中、不慣れな飛行機づくりの手伝い、空襲で逃げまどう姿は、とても想像が付きません。当時体育の授業を担当していた新井キク先生は次のように書いています。

戦争が次第に大きくなり、上級生は軍需工場へ動員されることになった。専攻科生は清原飛行場へ、本科の上級生は中島工場へ。工場門の出入は隊伍を組んで「歩調とれ、頭ら一右」の号令のもと、これが上手に出来るかどうかは学校の名譽にかゝるのでうんと踏張って通過した。

工場内に蟬しぐれ、というと、風情ある表現かもしれないが、蟬が百万匹も鳴き続けるような機械の騒音、その中で馴れない手つきで、ハンマー使用の飛行機部品の打鋸、下手に出来れば職工さんに怒られて、泣き泣き作業をしている生徒を見ると、なだめたり励ますのが、仕事の一つであった。

ソレ警戒警報とあらば、受持工場内の生徒を所定の避難所へ逃げさせ、隅々まで巡視、全員退避を確認の上、自分も逃げ出す。避難所は遠い林の中、やっと生徒の所へ駆けつくころは、敵機上空飛来、不気味な空襲警報が胸を刺す心地、これが雪解け道の時もあ

り、今当時に思いをいたす時、一人の生徒の怪我もなくよく生き抜いたと驚いている。

鹿沼街道の長坂の北の丘陵、林の根っこ抜き、十人もかゝって一株抜ければ鬼の首でも取った喜び、増産の国の方針により、さつま芋を植付けたが、肥料なしでは指ぐらいにしか育たなかった。それでも食料不足の折柄喜んで分けていただいた。

この短い文章の中に、戦争の中でいかに生徒たちが苦勞していたかがうかがえます。戦争の真最中で、学校で勉強したくともできない時代でした。

当時の私たちは「死と対決した青春時代」といってもよいでしょう。男子生徒は祖国を守るためにペンを捨てて銃をとったのです。全国の文科系学生が戦場に赴いた学徒出陣です。敗色濃い昭和十八年十月、東京の明治神宮外苑競技場（現在の国立競技場）で、激しい雨の中、銃をかついで行進する出陣学徒壮行会の様子は、たびたびテレビや雑誌などで紹介されているので、見たことがあると思います。旧制高校在学中に学徒出陣した私は、東大の合格通知を軍隊で受け取りました。もちろん晴れの入学式に出席することはありませんでしたし、大学で勉強できる日はこないであろうとあきらめていました。

幸いにして戦争は終わりましたが、私は本校の戦災復興に当たっていたので、やっと昭和二十一年四月に大学に復学しました。私の同級生の何人かは、生きてふたたび大学に戻ることはありませんでした。同じ年に、東大にもはじめて女子学生の入学が許可されて、戦後の平和な日本と男女平等を実感したものです。

私はいまでも軍隊での厳しく辛い訓練が思い出され、行軍で肩にずしりと食い込んだ銃の重さを忘れることはできません。先年宇都宮西ロータリークラブの家族親睦旅行で南会津に行ったとき、会津街道の大内宿の道端で新鮮な大根を売っていたので、さっそく大きいのを一本買いました。傍にいた俳人でもある宇都宮ヤクルト販売社長の柴田哲さんが、珍しい光景だとスナップ写真を一枚とってくれました。あとで大きく引き伸ばし、額に入れてくださったのですが、それには次の一句が添えられていました。

大根を男が買うて日曜日

たいへん平和な光景ですが、私は大根を肩にかついだ自分の姿を見て、思わず次のような思いが胸にこみ上げてきたのです。

銃担う悲しき習性五十年

この平和をいつまでも保ち、次の世代に引き継ぐことは私たちの責任です。戦時中の生徒たちがどんなに苦勞したかに思いをはせつつ、この恵まれた時代に感謝して一生懸命勉

強に励んでもらいたいと私はつねに生徒たちに言っています。

あの日 あの時

「小さな身体で働く」

ひめまつ 15号から

戦争中の勤労働員で、農家へお手伝いに行った援農は、生徒ひとりひとりにとってかなりつらいものだったようです。渡辺ユキエ先生は、雀宮小学校に泊り、合宿旅行にでも行くような気持ちで出かけたものの、生徒たちは一週間でヘトヘトになったと次のように書いています。

「なれない手つきで、陸稲の除草。雑草との見分けもつかず稲をむしり取ってしまって、農家の主人に怒られ」、「水田の除草も難作業で、ピチャピチャと稲の株の間を水を濁して進むだけ。雑草など一本も抜けるどころではない。」

「指先が凍えるような霜柱の畑に麦の移植。すっかり感覚を失った指先をハァーと息であたためての仕事。でも誰一人文句をいう者もなく黙々と働き続け、おやつにいただく白米の握り飯が唯一の喜び」

「小春日和の丘、絵のような詩のようなところ……………、あの頃はそんな生易しい丘でなかった。山林開墾で木を切り倒し、抜根。警戒警報で雑木林の中に退避した」

女生徒たちが小さな身体で力いっぱい働く姿が浮びます。 (昭和 36 年 3 月発行)



## 第五章 戦災から見事に復興

### 校舎全焼、学籍簿を守る

昭和二十年七月の宇都宮大空襲で、校舎はすべて灰になってしまいました。友正校長は、校庭につくった防空壕に学籍簿を入れ、その入口に畳でフタをして、焼夷弾から守ったものです。家を失い、家財を失い、すべてが焼きつくされてしまった中で、創立以来の生徒たちひとりひとりの記録を守れたのが唯一の救いですが、問題はそれからです。

私は、終戦から二週間くらいした九月のはじめ、無事に軍隊から宇都宮に帰ってきました。学校も、自宅も、空襲で全焼していましたが、清原飛行場にあった陸軍航空廠や中島飛行機工場に勤労働員されていた生徒たちが、学校に戻ってきました。友正校長は、校舎のない焼け野原の校庭に小さな小屋を建てて、母と弟の宏（宇大農学部）と住んでいましたが、学校の再建のことについては、夜も眠れないほど悩んでいました。そこへ私の復員とあって、私が頼りにされました。



旧陸軍の兵舎を校舎に——今はなくなった旧 2 号館

生徒たちは九月中は校舎の焼跡の片付け、そして十月一日には、現在の県立宇都宮女子高校の一棟と市立桜小学校の一棟を借りることができて、授業を再開しました。生徒は五、六百人いました。私は学校の教員として国語と英語の授業を担当しました。両方の校舎のかけ持ち授業はなかなか忙しかったのですが、学校再開で生徒たちも元気になりました。教科書は占領軍の指令で一部に墨を塗って使用しました。間借り授業は大変なものでしたが、幸いにして県のあっせんで、旧陸軍野砲連隊の兵舎を払い下げてもらい、二十一年の春に現在の宇都宮市桜通りの校地に引っ越すことができました。

私は四月から、東大経済学部で復学しました。学徒出陣していた私は、今でいう指定校推薦入学のような形で、軍隊にいるときに東大に入学していたのです。

戦後東大の授業再開は、昭和二十年十月でしたが、友正校長を手伝って私も学校を再興することで頭がいっぱいでした。とても東大に通学するような気持にはなれず、新校舎への移転と整備に、生徒たちと一緒に働きました。ですから東大入学は戦争中の昭和二十年

四月ですが、実際に「赤門」をくぐったのは、その一年後というわけです。といっても、引越したばかりの学校の仕事に追われ、私は「金帰月来」で、引き続いて本稿の教壇に立ちました。

## 大学と教壇かけ持つ

東大では戦争中追放されていた高名な大内兵衛、有沢広巳、山田盛太郎、矢内原忠雄先生らそうそうたるメンバーが大学に戻り、左翼思想が台頭した時代です。学生ストもありましたが、私は友正校長を助けて自分の学校のこともあり、学業半分、学校経営半分のような存在でした。生徒たちもなかなか落ち着いて勉強するどころではなかったのですが、皆が力を合わせて自分たちの学校を再興するのだという気迫は、校内隅々にみなぎっていました。

兵舎で授業再開といっても、そう簡単ではありません。まず、兵舎を教室に改造しました。また校庭に生徒たちを一行横隊にならべて石ころ拾いをし、運動場を整備しました。力を合わせれば何でもやれるものです。伝統というものはありがたいものです。自然と身についた習慣でたちまちのうちに清潔で明るい学校になりました。物資不足の折り、粗末ながら新しい木製の机と椅子が運び込まれたときの生徒たち喜びようは筆舌につくしがたいものでした。

生徒たちにとっては食糧確保も大きな仕事でした。下荒町の長坂（現在の長坂キャンパス校地の北側）にサツマイモを収穫に行きましたが、土が悪くて小指のような芋という悲しい思いもしました。しかし、新聞紙のような教科書が配給されるに従って学校全体が落着きを取り戻し、昭和二十二年三月には、学芸会を開いて、卒業生を送り出すことができるようになりました。

## 学校に花を

友正校長の喜びは大変なものでした。この年に、生徒会誌「ひめまつ」が発刊されました。その第一号で「一輪の花を飾ろう」と呼びかけています。ホッとして一段落する中で、求めるべきものは何かを真剣に考えていたのでしょう。学校再興にかけるなみなみならぬ想いが込められているように感じられますので、その全文を紹介します。

珍しく家族がみんな外出して、静かな日曜の午後、新聞に読みつかれて、ふと床の間に眼をやると、誰れが買ってきて飾ったのか、一鉢の福寿草がいくつかの黄色い花を咲かせていた。「ほう、福寿草か……」と思わず声を出して、そう感嘆した私は、花の一つ一つに

見入りながら、今さらのようにあわただしい毎日の生活を思うのだった。

仕事に追われている毎日は「花を忘れている」毎日である。戦争中はもちろん、現在もまた私達日本人の大半の生活は、ほとんどこの「花を忘れている生活」といっていいのではなかろうか。余裕のないところに文化は興らない。物質的にめぐまれない敗戦の生活の中にも、私たちは文化の糧を培う精神的余裕は持ちたいものである。

戦災バラックの部屋にも、教壇にも、一輪の花を飾ろう。ぼろぼろの壁にも、一枚の風景画をはろう。額ぶちは粗末でも、あるいは額ぶちはなくても、ゆかしい人の心は、美しく、明るく匂うだろう。(昭和二十二年記)

当時、職員室の先生方の机の上には必ず一輪挿しの花瓶があり、生徒たちによって花が飾られていました。それはずっと昭和五十年代まで続いていたのですが、現在の職員室には全く姿を消してしまいました。世の中がせわしくなり、それとこころではなくなってしまうからでしょうか。それとも先生方の机上は書類が山積みで花瓶など置くスペースもなくなってしまうからでしょうか。友正校長先生の一言一言が胸に響きます。

### 六三制の学制改革

花を飾りたいと友正校長が願った当時学校の様子はどうだったのでしょうか。教頭を長い間務めた斎藤太嘉男先生は、そのころ着任し、四十有余年にわたって教壇に立たれました。その記録を紹介しましょう。戦争ですべてを失った学校が、どのようにして再興されていたか。友正校長を筆頭に、先生も生徒も心をひとつに取り組んだ様子がわかります。斎藤先生はそんななか新任教員として赴任してきました。ゼロからの出発の中でどうとらえ、いかに考え工夫してきたかありのままがうかがえます。

昭和二十二年八月三十一日、私は、須賀学園に赴任し、以後四十有余年の教員生活の出発となった。昭和二十二年といえば、まだ各所に戦争の傷跡が生々しく残っていた。本校も河原町の校舎を戦火で失い、現在の睦町に移転してまもない頃であった。旧野砲連隊の兵舎の払い下げを受けての校舎、もともと使用目的が違うのだから当然のことだが、教室のように出来ていない。廊下をはさんで部屋が二列に並んでいる。廊下側には窓もない。銃を架ける棚がずらりと並び、室内も暗い。



自前の校舎を持つ喜びは大きい —— 壁は銃架のあとをふさいで

二階には天井板はなかった。屋根裏が直接見える。焼夷弾（こんな言葉も忘れられているが、火災を起こさせる目的でつくられた爆弾の一種）が屋根を抜けて天井で止まると消火が出来なくなるから取り外していた。窓ガラスもこわれ、代用ガラスが入っている。ガラスも手に入らない。使っていない部屋には窓ワクだけというまことに“お寒い”状態もあった。

こんな校舎でも戦災直後の間借り教室、間借り学習の不便さから見れば、待望の我が家を手に入れたのであるから、その喜びは大きいものがあつた。友正校長は「時間毎に自転車で、借教室から借教室へと走り回っていたのに比べれば今はいいよ、自分の学校なんだから」と、励ましてくれた。間借り授業の惨めさを身をもって体験した友正校長の切実な気持であつたに違いない。

こんな風に校舎は少しずつ整備されていった。学用品も潤沢ではない。教科書もノートも粗末な紙を使っていた。勿論そんな状態では教材、教具にも事欠く、仕方がないから自分で作る他はない。今のようになんでも手に入る時代に育った人達には想像もつかないことだろう。もったいない、まだ使えるのにと、なんでもとっておく私のクセはこの頃から身についたものらしい。

生徒達は嬉々として学校に通ってきた。戦いに明け暮れ、空襲や勤労働員で落ち着いた授業が受けられなかった戦中を思えば、ものはなくとも平和な毎日は楽しかったに違いない。沖縄で散ったひめゆり部隊の映画を見たことがあつた。いやおうなしに戦火に巻きこまれた女学生が、戦火のあい間、休み時間にキャベツをボールに見たててバレーボールに興じているのを見て、同じ年頃の生徒達をあずかる教師としてやり切れない切なさを感じて涙したことを覚えている。現在は戦争の恐しさはもちろん、何物をも奪う苛酷さを知る者も少なくなって来た。平和であるべき学園が再び戦火に巻きこまれないことを祈る一人である。

昭和二十二年の本校は須賀高等女学校といい、白い襟カバーの清楚なセーラー服の時代であつた。就任式の朝礼台で「若さと情熱で頑張ります」と勢込んで就任のあいさつをし

たような気がする。まさに青年教師であった。生まれて初めて何百人もの女学生の前でいさつをしたのだから大いにあがっていたらしく、本当を言うと何を言ったか覚えていない。ただ、友正校長が学校復興に燃えるような気持ちで先頭に立っていたのに「よしやるぞ！」と奮い立った。

生徒は当時一部と二部に分かれ、一部は小学六年から、二部は高等小学校二年修了で、卒業後は同じ高等女学校卒の資格が与えられた。

昭和二十三年には学制改革で校名も宇都宮須賀高等学校となり、修業年限も三年で、現在の六・三制となった。昭和二十三年の卒業生は、このまま旧制高等女学校(五年制)を卒業するか、それともあと一年残って新制高等学校の卒業生となるか、自由に選択するように任せられていた。同期の者が、ある者は最後の高等女学校の卒業生となり、ある者はもう一年残って初の高等学校の卒業生になるという別々の途をとった。第一回の高等学校卒業生は十一名であった。

昭和二十五年、創立五十周年の式典を迎えた。当時はまだ講堂がなかった。友正校長が昭和十六年心血をそそいで新築したばかりの講堂は、戦災で失ってしまった。生徒の集会は教室三つ分をぶち抜いて使った。普通教室であり、それも二階を使用していたので多人数が入って床が落ちないかと、そればかり心配していたが、幸い軍隊の建物は頑丈に出来ていたので大丈夫だったが、全校生が入りきれないので何回にも分けて行事を行った。学芸会の背景セットが大きすぎて入らなかつたり、天井板をつき破つたり、色々とハプニングが起り、つくづく講堂を失ったことを悔んだが、それを一番感じていたのは友正校長だったに違いない。もともと階下は調理室になっていたが、もともと将校クラブとして使用していたもので満更無関係ではなく、使い勝手は悪くなかったようだ。

待望の講堂が出来上ったのは昭和二十九年のことであった。スタイルは焼失した旧講堂そっくり、友正先生の執念によって、全校生徒の夢が実現したわけである。その講堂も平成の年となり役目を終えて須賀栄子記念講堂と姿を変えた。栄子先生、友正校長の悲願を淳校長が完成させたことになる。昔を知る者も段々少なくなってきたが、記念講堂は昔を語り、生き続ける学校のシンボルなので大切に使いたいものである。

今は学校祭と名称を変えたが、バザーは昔から有名であった。私が一番びっくりしたのがこのバザーの盛大なことであった。全教室すべてをバザー会場として、金、土、日の三日間一般公開した。全会場をくまなく見られるように廊下を仕切り、否応なく全ての会場を通りぬける順路を設定した。今そんなことをしたらさぞ大目玉を頂戴するところだが、当時のお客様は文句一つ言わずきちんと見てくださっていた。モノのない当時の状況もあるが、「須賀さん」と親しまれていたことが、一般の方々と学校を結びつけてくれた良き時代であった。もともと、三日間のバザーは長すぎたようで、終了すると生徒も先生もみんなガックリと来たことも思い出される。イナゴを売ったことも珍しく、タンパク源として最高のものなので、飛ぶように売れたことも忘れられない。生徒たちが目を輝かせて、

その様子を報告してくれたのを鮮明に覚えている。

戦争で中断した修学旅行も復活したが、四泊五日などの長旅は許されず、せいぜい二泊三日、それも車中一泊という旅行である。はじめて修学旅行に出掛けたのは、昭和二十三年の五月、仙台松島方面であった。海も島の松も美しかったが、何よりも忘れられないのは、夜行列車で火事に出会ったことだ。まだ、電化されず、蒸気機関車が走っていた時代である。



戦後間もなく新校地に再建された2代目講堂

生徒の乗る特別客車は機関車のすぐ後ろについていたらしく、火の粉が私達の乗った客車の屋根に飛び燃え出したのである。発見してさわぎ出した生徒達を鎮め、バケツリレーならぬ水筒リレーでチョロチョロと見えかくれする火に水をかけ、延焼を防ぎながら次の停車駅まで行ったのは、今では到底考えられない。もう一つは、当時仲々手に入らなかった柏餅を持参して、それも自家製の立派なものを生徒から出され、だれのをいただいたらよいものか迷ったあげく、全部いただいて持て余したことも忘れえぬ思い出だ。当時は五月のお節句のときは生徒たちのお弁当は柏餅であり、職員室は生徒たちが持って来てくれた自家製のおいしい柏餅であふれたものである。

あれからもう半世紀、あの子達も良いおばあさんになっているだろう。自分の孫が大きくなって入学して来るような年頃になっているはずだ。歳月の流れは、人も物も大きく変えようとしている。しかし私達が忘れてはならないことは、長い歴史の中には人が生きていたという事実である。

先輩が居て、在校生が居た。先輩の残したものは後輩が引きついで大きく育てて次の世代へ、それは引継がれて行くものなのである。それはまた、今この百年の歴史の中にある私たちのやらなければならぬことでもある。

## 「ひめまつ」創刊

戦争の被害を受けたひとりひとりが力を合わせて、創立五十年という伝統を持った学校をいかに再興しようと取り組んだが、昭和二十年代この時期、いかにして生徒と職員が心をひとつに目標をたてて進もうとしていたかは、生徒会誌「ひめまつ」が、昭和二十二年三月に早々と発刊された事実でわかります。わずか三十ページ、決してきれいとはいえない紙ですが、そこには、新しい学校づくりに、否、日本という国を盛り返すためには、人間の心が潤いとゆとりを持ち、毎日の生活をじっくりと見つめ、モノ以外がもっている貴さを感じさせようという意気込みがあふれています。

それは、ちょうど須賀栄子先生が学校を創立した時に抱いていた志と同じといってもよいのではないのでしょうか。

敗戦の春や淋しき松飾り  
疎開してせまきわが家にかやひろし  
秋空へ学徒もふるふ鍬の音  
停電に焚火囲んで夕げかな  
遠山の雪を背負いて麦を踏む

専攻科 伊藤 照子  
四年 岩松 和子  
四年 高木安喜子  
二年 平井 セツ  
専攻科 加藤 美貴

掲載されている生徒たちの文芸作品には、ようやく軌道に乗りつつある学園生活の中でも、やはり戦争の与えた影が色濃く残っているようです。

私も東大で宮澤俊義教授から聴いてきたばかりの日本国憲法について「新憲法の基本原理」と題して「主権」「基本的人権」「文化国家」を特色として上げ、明治憲法と比較して論じています。いま読み返してみると、新しい体制に寄せる期待の大きさを感じさせますが、「自由放任では弱肉強食となるから、弱者を救わんがためにある程度個人の自由を制限し、そして個人の自由を実質的にするというのがこの意味の文化国家である」といささか力んで書いているのがなつかしい。生徒とともに、新しい日本を文化国家としてつくっていきたいという思いを込めたが、生徒たちにどこまで通じたか。

「ひめまつ」発刊という喜びにあふれている学内では、クラブ活動も活発で、後に全国制覇の金字塔を打ち立てたソフトボール部をはじめ、卓球、庭球、排球、文芸、英語、歴史の七部が早々と旗上げし、他の学校と早くも交流試合や発表会を開いています。兵舎を改造した教室とそれに続く校庭一球一打にわく歓声や歌声など「ひめまつ」を手にとると、目の前に大きく浮んできます。

「ひめまつ」という誌名は校歌の一節にあり、「風雪にもめげずに毅然として千古変らぬ緑色をたたえる姿は、これからの進路に何らかの示唆を与えてくれるのではないか」と名付けた理由をわざわざつけ加えています。現在はカラー化され、分厚くなって毎年発行さ

れている「ひめまつ」を手にとる時には、この言葉を思い起すのも意義があるのではないのでしょうか。半世紀以上も前に先輩たちが心をひとつにして研鑽に励んだ証として「ひめまつ」を大切にしていきたいものです。小さな苗木のような力しかなかった学校が見事に復興した様子を見守り、そして今日をやさしく包んでくれています。「ひめまつ」こそ、みなさんのような未来豊かな若者そのものを象徴しています。

## 特別講座とバザーの復活

こうした時代の中で「一人は一校を代表する」は着々と蘇っていきました。何よりも友正校長の「いつも花を」という心が校内の隅々までに行き渡り、職員も生徒も、物不足の時代にかかわらず理想を高々と掲げ、それに



復活した学校祭とバザー

向って力を合わせて実践していったからでしょう。

「ひめまつ」には、この雰囲気があふれています。私の母・華子先生はその先頭に立ち、栄子先生仕込みの伝統の作法を教えていましたが、「ひめまつ」第二号に「健全な教養」と題して次のように書いています。

私は、よく言われている文化の問題が文芸の狭い範囲だけのものでなく、文化を広く生活文化と解し、私達の生活を豊かにし楽しくし、美しくするものと考えてゆきたいと思っています。文学芸術などの情操面と並行的に、実生活としての芸術の面の修得をも考えねばならないと思います。情操と同時に技芸面が修得されてはじめて婦人としての健全な教養が得られるのではないのでしょうか。かくして、はじめて健全な文化生活が営まれえるでしょう。

情操豊かな、そして被服（和洋裁）、家事、手芸、作法などの技能をよく修得した婦人のつくる家庭生活は想像しただけでも明るく楽しいではありませんか。厳しい時代の混乱の中にも、私は、私たち女性の進むべき道をはっきりと見極め、その中心となる太い線だけは忘れたくないと思っています。

この華子先生の考えを生かすべく毎週一回の特別講師による講義がこの時期に学校で行われたことは特筆すべき試みでしょう。新しい憲法、教育制度も次々とアメリカ式になっていく中で、学校としても、それに積極的に取り組もうと工夫しながら、伝統を生かしていこうと意欲あふれる内容となっています。時事問題からバレエ、英語、古典など広範にわたる講義はその熱い意気込みがひしひしと伝わってきます。

一覧表を見ると次のページのようになっています。



時事問題	慶應大學講師	石川 輝
經濟	東大教授	今野源八郎
農村經濟	宇農專教授	井上 龍夫
食糧問題	農林技官	藪 光雄
醫學	前橋醫大教授	立石 武
營養科學	縣衛生部長	加藤 光雄
豫防醫學	宇都宮保健所長	藤井 和雄
婦人科優生學	厚生技官	渡邊 敏夫
文學	歌人	石川 暮人
文學・社會	社會教育委員	手塚 武
美術	日本畫家	島田 訥郎
工藝		加藤 英二
婦人問題	辯護士	川上 キヨ
邦樂		杵屋彌三恒
洋樂		喜田川時夫
日本舞踊		若柳吉之丞
バレエ	由利壽 舞踊 研究所長	由利壽美供
英語文化	通譯官	加藤 直衛
美容	老松 美容院 院長	中山 ひろ
スポーツ	元讀賣新聞 學藝部長	矢澤 高佳
映畫・演劇	縣社會教育課	岡田 國夫
日本古典	縣 囀 託	横島 武郎
編輯技術	「自治通信」編輯長	茅根 巴

こうした新しい試みについて友正校長は生徒たちに対して「新しい歩み」と題して次のように書いています。

時代の実相はあらゆる面に混乱をきたし、過渡的な形態は今後も数年は続くものと思わなければならない。新憲法の実施とともに婦人にも新しい地位が与えられ、婦人の社会的、家庭的地位は著しく重要性を加えてきた。それだけに婦人の責任もまた高められ名実共に「与えられた新しい婦人」の名にふさわしい教養を備えなければならないのである。婦人の文化度が高まらなければ、真の意味の民主主義の達成は不可能であるとも言える。

文化国家日本の学徒としての皆さんは新教育制度の精神にそって、正しい自己を錬磨し、相携えて、新世界の創造に寄与しなければならないと思う。

女性の社会的地位向上に合わせて幅広く基礎教養を身につけさせようという配慮でしょ

う。週一回ずつではあっても生徒たちに大きな刺激となったのは間違いありません。学校が主催し、宇都宮市内で評判となっていた名物のバザーも復活し、新しい学制の中で大きな第一歩を踏み出した様子がうかがえます。栄子先生の「全人教育」の成果を、学外に具体的な形で示すにはどうするか、先生亡きあと職員も生徒も真剣に考える中から生まれ、宇都宮の市民に幅広く支持されるところまで成長していただけたら、バザーを一日も早く復活させたいと願っていたのです。といっても物のない時代のこと、教職員、生徒全員があの手この手で工夫し、準備に準備を重ねて開催にこぎつけたといえましょう。日ごろの授業の成果をまとめて研究発表する学課室、華道室、洋裁室、造花室に売店と食堂。一家総出の家族にまじって大高下駄の男子学生がやって来たり、会社員が買い物に来たりと大変なにぎわい。その様子は今も昔も変わらないようです。「ひめまつ」に記された報告を読むと当時の様子がよくわかります。

#### 〈学課室〉

目の前を黒いものがすうーと通り過ぎる。「どきっ」として目を開いて見る。と、なんとそれは学生の大きな高下駄である。雨のため、はねがたくさんついていた。鼻緒の太さは直径四センチもありそんな太いもので、お相撲さんでも顔まけしてしまいそうである。これも自分で作ったもののようなのである。つまりこの学生にも儘ならぬ人生の無情が物語られているのか……またピカピカ光った皮靴を好まず、古くからの学生の一つの誇りになって、大路を大股でカランカランと音も高らかに歩く姿に憧れてか、今時珍しい大高下駄である。学課室一杯に展覧されたお習字や絵画、一般社会研究等を一つ一つ意味深長に凝視していた。一見して哲学者めいたこの学生は、絵画の前を無事通過し書道の前まで来ると、この部屋に流れる軽快なメロディにも似合わぬ面持で、両足を広げ腕組みして脇目をふらず眺めていた。

「どうもこの書体がおかしい、誰も同じではないか……それに書体は生きているように見えて真に精神がこもっておらん」と独り言。どうもいけない、長いお説教でも聞いてるような気持、こう云われて見れば思いあたるふしもないでもない。そばに立っていた私は思わず「どきっ」と、首は亀のように肩にめりこんでしまいそう、おそろおそろお習字を見なおして見る……少し晴々しく新聞記者にでもなったような気持で「御感想を」と思っていた私の鼻も、かの学生にへしおられた形、ここからまた問えば首がお腹の方までめりこんでも間に合わないだろう、形勢不利である。でもこう云う熱心な批評も大変役に立ち、本校発展のため大いに必要なことがらであると私は思います。

(安達千恵記)

〈洋裁室〉

マフラー、靴下…等いろいろの品が出ている。二、三人の会社員らしい人がしきりにマフラーを見ている。

生徒「どうぞ一枚お求めください」

A「おいB君、これなんか似合うかい」

B「うーん僕にはよくわかんないけど生徒に見てもらえよ」

A「ではすみませんが見てください」

生徒「ええとてもよく似合いますわ」

A「そうですか、ではこれを下さい」

生徒「はい有難う御座居ました」

買物が終わるとさっさと室を出て行ってしまった。ゆっくり見て下さればよいのに、も一つの大切な用事「喫茶室」に入ることを忘れては大変と思ったのかもしれない。

(大出千代子記)

〈売店〉

赤、青、緑、白、色とりどりのテープがはりめぐらされ、ふだんは広くて殺風景な教室も、この日ばかりは美しく飾られて臨時売店に早変わり。

「ドーナツ何処?」「おいしいお煎餅」「甘い甘いパイパイ飴」色鮮やかな美しいポスター、綺麗な籠に包まれた飴は通るお客様の眼を引きつける。

小さいお孫さんの手をひかれたおばあさんが腰を曲げ曲げお菓子を買いにいらっしやる。そして選び始める。「おばあさん、これどう?」とお孫さんは五家宝(ゴカボウ)を見て指さす。「これは柔らかそうですね、じゃあこれにしようかね」と十円札を三枚しわくちゃな手で取りだす。「ハイハイ柔らかそうなものを見て上げましょうね」お菓子を売る新米の女店員、親切そうに柔らかいものを見てあげる。そうすると「ハイハイ有りがとう有りがとう」とニコニコして満足そうに帰って行かれる。

こんな可愛い場面も見られた。小学二、三年生の男の子が六つぐらいの弟を連れてお菓子屋さんの前を通る。弟は三角頭のパイパイ飴に不思議な魅惑を感じたらしい。突然「買うんだ買うんだ」と愚図り出した。兄さんは少々慌てて、いくらなだめてもすかしても弟は「買うんだ、買うんだ」と兄さんを責めたてる。とうとう兄さんは負けてしまった。おずおず手を開いて五円札を取り出し三角飴を弟に渡した。小さい子は嬉しそうにまた不思議そうにそれをぶらさげて兄さんと共に出ていった。少年の手に残されていたのは五円札一枚らしい。でも可愛い弟のためにはその少年にとっては大金であったのであろう。その五円を惜しまず出して弟を喜ばせたこの美しいほほえましい有様はとても嬉しかった。そのうちに様々な人がひっきりなしに見える。

(野崎田鶴子記)

〈食堂〉

食堂へどうぞ。どうぞこちらへ。

食堂室の入口には、白いエプロンにお盆を手にした喫茶係が忙しそうに立ち働いている。こんなに人が入っては床が抜けやしないかなんて余計な心配をする。

室内には電気に明るく照らされ、花やテープで色どり、天井からは星がキラキラと下っている。

孫を連れてたおばあさん。

おしゃべり連隊の雀グループ。

取りすました女学生。

意味深長にミルクを飲んでいる先生方。

仲良くテーブルを囲んでいる女の子達。

お母さんと一緒のニコニコ坊や。

キョロキョロしている男子生徒。

食堂は人気がある。

「どうです、おしるこの味は」

「少々ぬるいですね、さっきよりは味がいいですけど」

「これはお気の毒様。何が美味しいですか」

「おでんか生菓子ですね」

「随分きれいな飾りつけがしてあるのに上をみるとがっかりするね」

「授業中に鼠クソなんか落ちて来ないかな」

振り返ると一人が頭を押えている、これはどうもといささか面喰った。旧兵舎だった校舎は天井板を空襲に備えてとりはずしてしまったとかで一枚も張っていない。従って空気の流通はすこぶる宜しい。……………。

「ガチャン」あっ、すべった。こぼれた。が何度となく繰り返される。

「皆様通路が混雑致しますから対面交通を実施して下さいませ」とマイクでは盛んに放送している。

「中々いいレコードあるわねエ」「おいダンス曲ばかりじゃないか」「タンゴだ、いいなあ」

感心している人。文句を云っている人。喜んでいる人。じっと聞き入っている人。種々様々な光景だ。

(大塚智子記)

わずか三日間のバザーですが、盛況ぶりが生々と伝わってきます。生徒の生活状況の調査報告や働く女性の睡眠時間調べ、日本服装史など、学校らしい研究発表も行われ、バザーが単なる物品販売ではなく、日ごろの教育の成果を発表するという文化的性格の強かった

ことがにじみ出ています。先生たちは、多くのお客さんが来校したのにもかかわらず、生徒たちが細かな注意力で清掃につとめているのをほめてやりたいと記録しています。「全人教育」という伝統が戦争という思わぬ事態にめげることなく脈々と息づき、自然なままに次の世代に引き継がれているのを知るのはとてもうれしい事実ではないでしょうか。「よくやった」と拍手している友正校長の姿が目に浮かびます。

## 第六章 栄えある伝統のうえに

### 美は微笑のうちに

学校も次第に落ち着いて、昭和二十五年には創立五十周年を迎えました。

友正校長は学校再興の最中やっとひと息入れることができ、これを万感の想いで受け止めて、自らの幸せを書いています。何もかも忘れてすべてを傾注して頑張っていただけに胸に迫るものがあります。

世界が大きく動き、日本の内外にも、いろいろむずかしい問題が山積している。私達の学園の出来事などは、むずかしい世界の動きから見たら、いずれ学園にとってプラスになることばかりであり、生徒の皆さんにとっても、プラスになることばかりだったと言って良い。私達は、敗戦というきびしい現実の中で、こんなに静かに、こんなに楽しく勉強ができるということに対し、ほんとに幸福を悟り、感謝しなければならないと思う。

この、あたえられた私達の生活の中で、幸福を感じ、感謝のころをもつということ、これは私達の人間生成の上で非常に大切なことなのだ。幸福は欲望の限界の中にある。無限の欲望を追っている限り、幸福は容易にとらえ得ないだろう。

今年は本校創立五十周年にあたる。五十年と一口にいうけれど、五十年は人の一生に相当する長い年月である。国の歩みからみても、この五十年の間に、日本が歩んだ道は、実に今日の結果につながる長いジグザグの道だったといえる。そしてそれは、たまたま、一九五〇年と符節を合せていることにも何かの、意義を感じる。

卒業生も八千有余という数に上っている。初代校長須賀榮子刀自の功績について、この機会に私たちは、同窓生とともに改めて考えて見たいと思う。

五十周年を機会として、本学園も、さらに立派な飛躍をとげたいものだ。心を合せ、力を協せ、学園の和を基として進みたい。

幸福とは何か——友正校長が真正面から問いかけているのは、学校が軌道に乗り、生徒も教員も順調に学べる環境ができ、さあこれからどうするか考える余裕が与えられたからに他ならないのです。生徒ひとりひとりが毎日の勉学の中で悩んだり、迷ったりという様子を見ているだけに、自らに置き換えながら書き、自らが心の中にわきあがってくるものこそが幸福そのものではないかという信念が感じられます。敗戦といういままでに経験したことのない混乱の中から学校が再建できたのも「全人教育」という基本方針を貫いてきたから、と誇りを持って断言しています。

時代はどんどん変わり、喜びも悲しみもその流れの中の流転の証ではないのか。ひとり

ひとりの人間は、一本の草木。一本の花と何ら異なるものではないからには、幸福というものも自らが悟ることによってのみ掴めると考えているのです。

友正校長は、このころ卒業生に対してトルストイの言葉を毎年贈っています。

「美は微笑のうちにある。笑った顔に愛嬌がうかんだら、世の中にこんな美しいものがあるまい。微笑は人の心の精神にあり、最も高い美しさだ。」

「すべての人にはそれぞれの重荷があるし欠点がある。誰も他人の助けなしでやっつけられるものではない。故に私達は互いに慰めや忠告や相談によって助け合わねばならないのである」

生徒たちに「若くあれ、美しくあれ」とつねに問いかけている姿勢は、この幸福論にあり、今日そのまま通用すると思われまふ。今日すべてが十分に満され、何でも手に入れるのが容易になってしまっていますが、心の中はどうかののだろうか。若ければ若いほど自らを鏡に映してみたくなるものです。改めて、この友正校長の幸福論をじっくりと読み考える意味は深いと思います。

創立五十周年式典は昭和二十五年十一月三日に行われました。文部省に勤務したばかりの私は、この五十周年式典に天野貞祐文部大臣の祝辞をいただき、大臣代理の内藤誉三郎課長（後の参議院議員、文相）といっしょに参列しました。粗末な兵舎改造の式場には、小平重吉栃木県知事、佐藤和二郎宇都宮市長らが祝辞を寄せ、栄子校長の業績を讃えるところに「全人教育」の伝統にのって学校再建を果し、文化国家建設に尽力を、と温かい励ましがありました。その感謝ぶりは、華子先生が記しています。

喜びはわが学園の年古りて いしずえかたく築かれしこと  
式場に集い溢るる卒業生の 泣けるを見ればわれも泣きたり



創立 50 周年を記念しての学校祭にご来賓をお招きして

五十年という歴史の重みがずっしりと伝わってきます。よくここまでという喜び、栄子先生がすべてを献げてつくった基礎があってこそという参集者すべての思いがここにあるのではないのでしょうか。そして友正校長を支え見事な学校復興を成し遂げた感慨があふれています。

## ソフトボール全国制覇

戦後復興も成り、落ち着いて勉強ができるようになると、クラブ活動も本格化してきました。卓球、庭球、バレーボール、ソフトボール、文芸、英語、厚生各部は早々と旗上げしてゆきました。英語クラブは、敗戦に加えてアメリカによるさまざまな施策が進められている最中だけに大変活発でした。アメリカのすばらしい姿を見ている生徒たちは、文化や習慣までも学ぼうと懸命になっています。「ひめまつ」に記された活動ぶりはその気持ちを直接表しています。

英語は世界に普及している。だから万国共通語とも言われ各国間の商取引、即ち貿易上の必要語として使用されていると聞いております。英語は万国に共通なだけにまた各国を知るためにも、新日本の建設躍進にも必要語なることは疑う余地もありません。その英語を私達は長年軍閥の偏見の見解から無謀にも廃止されてきました。その結果英語を通して外国の民族性を知ることが出来なくなったと言うことよりも、英語そのものが、如何なる価値を持つものであるかと言う、そんな簡単な常識程度のことまで私達は知ることが出来なくなっていました。

敵を知る意味において、戦中日本語を盛んに学ばせた米国に比較して、封建的小心な日本人の幼稚な考えに、今更私達は驚き、そして反省しなければなりません。ここに敗戦後間もなく私達の学校に英語研究部を設けたことは、何よりも嬉しく、何よりも誇らなければなりません。それは文学を愛する私達の意慾を満足させると言うよりも、大きく見て新日本建設の一助ともみられるからです。進歩した国々から学ぶところの多々ある私達日本人は、その基礎となる英語を第一に学び研究して行かなければなりません。その意味においてわが校の英語研究部を有意義に活用していこうではありませんか。

(専原田記)

アメリカの影響を受けたという点ではソフトボール部も同じようです。「男女七歳にして席を同じうすべからず」と言う言葉通り、女性のスポーツ活動も制限されていたのが、女性の地位向上の流れに乗って一気に花を咲かせました。

昭和二十一年に野球に似たソフトボールというアメリカの新しいスポーツを学校に採り入れるということになり、その講習会が開かれるので、何とか参加させたいと思った私は、



生徒たちにまずテニスボールでキャッチボールをさせてみて、投げ方がまあまあという生徒を十名ほど選んで出しました。ところが、ソフトボールの球は、軟式ボールよりも大きく、当時はグローブを使用しない素手の時代でしたから、私自身たちまち突き指をしてしまい、今でも私の小指は外に大きく曲がっています。本校のソフトボール部の創始者はかくいう私でした。

昭和二十一年十一月十六日に、県大会が開かれると聞いて、二十有余名によるチームを編成して一か月間の猛練習で参加しました。当時は十人制で、ショートが二人となっていました。安岡タケを主将に奮闘しましたが、第一高女（現宇女高）に八対七で惜敗してしまいました。これを出発点に、たまたま体育の教員として採用した土岐栄先生が野球の経験があるのでソフトボール部の監督にし、その指導のもとに昭和三十三年には全日本、国体、全関東という三つの大会を制覇してしまふことになりました。これからはじまる十余年にわたるソフトボール部の黄金時代は、学校も生徒も職員も、それだけでなく、卒業生も父兄も宇都宮市民全員もみんながひとつにまとまって燃え上がった時代であったと思います。物もなく、道具もグラウンドも、ユニフォームもすべて十分でなかったあのころ、みんながかたずをのみ、胸を熱くして試合を見守った日を思い出します。

友正校長はソフトボールの試合といえば本校チームとともに全国各地に行き、ある時はボールを拾い、宿舎の手配をし、食事や健康の心配をして、全力をあげて世話をしていました。昭和二十五年の創立五十周年式典に、感想として「永遠に若くありたい」と学校発展のために身命を献げると生徒たちについていたので、その献身ぶりには目を見張るものがありました。二十六年国体で準優勝すると、「本校開校以来の名誉を獲得した。校長として永久に忘れることのできない感謝の数々。よくぞ、やってくれた！」と一段と力を入れるようになり、それが、三大会制覇という快挙につながる原動力になったのは間違いありません。

昭和三十三年は作新学院が甲子園に初出場し、準決勝に進出した年でしたが、「ソフトボールの須賀高」といえばその活躍ぶりは全国的に注目を集めたものでした。優勝して宇都宮駅に戻ってくると、優勝旗を先頭にプラスバンドつきで市内行進し、市民から大拍手を浴びました。PTAも卒業生もいっしょになって大きな喜びを分かち合ったのです。国民体育大会の時は、私は灘尾弘吉文部大臣の秘書官として開会式に随行しましたが、大臣の地元の広島安田学園（ソフトボールの名門校）を本校が敗ってしまふ二人で苦笑したものです。野球以外にサッカー、テニス、ツーリング、モトクロスなどスポーツ花ざかりの今日では想像できないような大きな大会として国体が位置づけられ、あらゆる競技に一喜一憂しながら観戦したものです。

土岐監督が二十六年国体出場の様子を次のように記録しています。初出場の決意、選手はむろんのこと、全校の大きな喜びが伝わってきます。

関東大会に優勝！長年の宿望であった全国大会への制覇ついに握る！けれども思い出せば関東大会は苦戦に苦戦を重ね、手に汗を握るような試合の連続であった。一日目も、二日目も逆転また逆転、あらん限りの実力と日頃の闘志にものを云わせてついに優勝の栄冠を獲得した。この汗の結晶であった優勝カップと賞状は校長室にさんざんと輝いて収まっている。

いよいよ国体の日も迫って来て、最後の総練習も終ろうとしている。毎日の各新聞には写真入りで予想やら大会の様様やらが掲載されている。それでなくとも全校は国体の噂で持ちきりなのに、各新聞は生徒の心理を刺激し、国体出場選手は俄然学校の羨望の的となってしまった。幸福なるかな、ソフト・ボール部。

全校生集合のベル、一同整列、白いユニフォームにブルーのアンダーシャツ、エンジの SUKA というマークも胸高々に選手一同整列、出発に先立っての壮行会である。友正校長先生の力のこもった出発の挨拶、つづいて小生が謝辞、キャプテンの挨拶。生徒会からの花束贈呈、ただあるのは感激と感謝。胸一杯に熱いものが広がり、最高の榮譽こそみんなにプレゼントとひとり決意す。

白いペンキで塗られた玄関から、赤い煉瓦の校門までセーラー、セーラー、制服の人の波で埋まった。頃はよし、いよいよ出発だ。生徒よ校舎よまた会う日まで。小生が先頭に、つづいて喜び勇む選手一堂、校長先生は責任を痛感してか最後端。拍手！拍手！万雷の拍手、こんなに嬉しかったことはない。こんなに盛大に送られたこともない。なんだか目頭がうるみそうであった。よし全校生よ、待っていてくれ、必ずやるぞ。優勝せずしてどうして帰れようか。



全国優勝帰校 —— 全校生徒に拍手で迎えられる

この時は広島県尾道市での大会で二位の栄冠を勝ちとったのですが、行間に全校が一丸

となって弾み、ソフトボール部に大きな期待を寄せている様子がわかります。これが三冠制覇につながっていったものです。スポーツは、戦争の被害を乗り越えて学校再興に燃える教職員、生徒をひとつにしました。全国にその名を知らしめただけでなく、この学校で勉強できてよかったなあという気持を高めます。校歌を高らかに斉唱し、選手も応援団も最後まで戦う姿こそ学校再興を確実にしたのだと思います。

## 音楽も全国入賞

ソフトボール部は七年連続で国体に出場しましたが、これに刺激されて他のクラブ活動も盛んになっていきました。スポーツに限らず、弁論部や英語クラブなどめざましい成果をあげました。中でもコーラス部とオーケストラ部の活躍は、その後の高校音楽科、宇短大設置へと発展していきましたので、特筆されることです。

コーラス部は昭和三十三年に、オーケストラ部は三十四年にスタートしました。戦後の混乱もやっと落ち着き、いよいよ新日本建設が軌道に乗り、高度経済成長政策がとられようとしていた中で、ラジオやテレビ放送も本格化し、やっと音楽を楽しもうという空気が広がって、音楽好きな生徒たちを中心に始まったわけです。これには友正校長の存在が大きかったと思います。もともと大の音楽好き、宇都宮工業の校歌を作曲して今日まで歌い継がれているという事実が示すように、音楽文化向上の動きを受けて立ったわけです。しかも昭和三十五年が創立六十周年にあたるので、日ごろの成果を発表する記念音楽会を開こうというのですから、熱の入れ方も相当なものでした。

十二月二十日、当時千五百人が入る県内最大の栃木会館大ホールで開かれる音楽会に向けて、五月ごろからハレルヤコーラスを正規の授業にとり入れて練習を繰り返し、二、三年生六百人の大合唱を披露したのですからみんな驚きました。田淵進先生（現宇短大副学長）の情熱あふれる献身的な指導で、練習につぐ練習が続けられ、教職員も生徒も想像しなかったような大成果をあげ、各方面から賞賛されました。生徒たちが得た収穫は、素晴らしい成果と創立六十周年に対する感謝です。「六百人の大コーラス」と題してコーラス部員はこう書いています。

「ただ声を出して歌う、ということが練習のすべてではない。神経をすり減らすことによって、はじめて進歩していくのだ」と今日もまた田淵先生の注意を受ける。私達コーラス部には、この一言が何よりも大切だと、部員誰しもが思っている。

須賀高コーラス部が生れてからはや三年目。「三度目の正直」という言葉を信じ、今年のコンクールには……………とファイトを燃やし、夏には合宿までして、練習に励んだ私達でした。

練習、練習、そしてまた練習と、一日一日が過ぎて行く。時には、ノイローゼ気味に

なってしまう、自分の出している声が正しいのか、ピアノの伴奏がありながらも、さっぱりわからなくなってしまう。こうして練習したかいもなく、コンクールには思いもよらぬ失敗をしてしまい、その日は悲しい淋しい思いに部員全員が浸らなければなりませんでした。

それからでした。私達が須賀高の音楽会を、絶対に成功させようと思ったのは。

大きな夢をもって毎日の練習が始まる。若い私達にとっては映画でも見たいと、文句が出てきますが、結局はコーラスをしている時が一番楽しいと次第に納得できるようになりました。

この一年間のクラブ生活には、喜びや悲しみが山ほどありました。その喜びや悲しみは、私達には非常に尊いものに思われます。それは皆、同じ気持で苦しみを分かち合ってきたからです。

こうして、一年計画で須賀高六十周年記念大音楽会ができたのです。十二月二十日、場所は栃木会館大ホール、そして一流の早稲田大学グリークラブや、かわいらしいジュニアオーケストラの共演で、華々しく行われました。

夜の部も、千五百人も入れるホールが、いっぱいでした。この全部の人達が、私達の前途を祝ってくれた、と私は信じます。私達と姉妹ともいうべきオーケストラ部の演奏も輝きに満ちていました。須賀高であればこそ、たくさん楽器をそろえていただき、良き指揮者がいるからだと思うのです。六百人で合唱したハレルヤコース。これも他の学校ではみられないものでした。

私は音楽界が終って感じたのは「やれば何でもできる」ということです。須賀高はすばらしいといわれてほしい。

須賀高といえばソフトボールと言われていますが、私達音楽部もソフトボール部のように、日本一をめざして進まなくてはならないと思う。それでこそ須賀高も発展して行くのでしょうか。それには皆で力を合せて努力することが大切です。私も学校でそしてクラブ活動で学んだことが、第二の人生に出発してから役に立つことでしょう。

(三年伊藤睦子)

この創立六十周年記念音楽会は、ただ単に学校行事として生徒たちを奮い立たせただけではありませんでした。ハレルヤコーラスという選曲が生徒たちの胸に日ごろでは得がたい何かを与えましたが、全校がひとつになって、学校の歴史と伝統を感じとり、それを育てていこう——まさに、友正校長が孤軍奮闘で取り組んできた「全人教育」が根づいている姿を具現化することになったと思います。「心に深く」と次のように生徒が書いているのは、全校に共通する溢れんばかりの気持ちだったといえるのではないのでしょうか。この音楽界から学校はどんどん変わっていきました。ひとりひとりの生徒が持っている力を育て、しっかりと伸ばしていこうという「全人教育」に自信を持ち、それが花を開いた時です。

あまねく世は神のしろしめし給う  
国となりぬとこしえに続べ給う  
永久の栄御神主の神続べたもう  
ハレルヤ……。ハレルヤ……。

私の心の中では涙がとめどなくあふれ、流れ出る。本校創立六十周年を記念した音楽会の最後を飾るこのコーラスが会場いっぱいひびき渡った。

数十年もの永い間、風雪に湛えて来た老樹は、今日の風潮に若々しく精気を発散しながら、大地をふんでいる。その大木の影には枯れ草が地に埋もれている。しかし、大木は巨大な幹を押し上げ強靱な枝で天をささえ、空を突きさしている。この大木は創立六十周年記念音楽会で、その強靱な枝に見事に花を咲かせたのだ。美しく輝やくその花をわれわれは実に頼もしく、心から敬意を持って仰いだ。

明治三十三年十一月三日、須賀栄子先生という一女性が霜の地面に汗を流し、無心に掘っていた。掘り上げられた土はまたくずれ落ち、それでもなお掘り下げていった。しばらくして一本の苗木を胸にいだき、祈るようにまぶたをとじた。苦心に苦心を重ねて掘り下げた穴へ丁寧に植えつけた。晩秋だというのにその木には、若葉が芽をふき、遠慮がちな太陽のひざしを浴びて、生への活動を開始した。枝はしだいに広がり、友を呼び数を増した。幹は天を目指し伸びつつあった。

途中戦災にて成木は倒れた。しかし、焼け野ヶ原から芽を出し、第二の成長を期して苦難に立ち向い、やがて今の地に移し植えられ、前にも増してすくすくと育って行った。

文字に表わせば短かいことではあるが、その歳月は苦勞の連続であったであろう。

このたびの音楽会の開催に当って覚えた感銘と誇りを心の奥底に秘めて、われ等千三百余名の生徒が一丸となって、須賀栄子先生のお教えを守り、諸先生の指導を仰いで、本校発展に努力したい。

(二年宇賀見和子)

## 音楽科誕生

友正校長は、こうした生徒たちの活躍ぶりに「二十世紀後半は、女性の時代である」と書いています。これからの時代は、女性が社会の中核に位置するのだと確信を持ってその推進のために陣頭に立ったのです。音楽会はその後定期的に開かれるようになり、田淵進先生の情熱と指導によるオーケストラ部は昭和三十七年十一月のNHK全国高校器楽コン

クール関東甲信越大会で優勝し、十二月全国大会に出場して、第二位となった。三十八年は第四位（女子として第一位）だった。長年の練習がやっと実を結び、全国的なレベルに到達したことが認められただけに喜びも大きかったのです。これが土台となって高校に音楽科をつくろうと友正校長は決断したのです。

友正校長は、「女性の時代」にふさわしく、「異色ある女子高校」を目指し、何よりも精神面を重視して、生徒ひとりひとりが悔いのない学園生活を送るにはどうしたらよいか、人間の生涯の中で、高校時代という一番大切な時期を有意義にできるかどうかは生徒自身にある。学習でも、クラブ活動でも真剣に努力してこそ悔いのない学校生活が完成する。そのためには自分自身を十分に知り、自分自身を大切しながら、努力していこうではないかと考えたのです。これにはもちろん、ひとりひとりの生徒に対応できる教育が必要になります。音楽会が重なるにつれて、生徒も先生も専門的に学びたい、より深くしっかりと技術を身につけたい、という要望が高まるのは自然の流れでした。そして、音楽科という栃木県内ではじめて、全国的にみても十指を数えるにすぎない高校音楽科を昭和三十九年四月に男女共学で発足させることになったのです。



一流の教授陣による音楽家レッスン

この時期、友正校長の胸中にあったのは、やはり「全人教育」——「一人は一校を代表する」にほかならなかった。「強く、美しく、朗らかに」と次のように書いています。

学校は厳しいとは言うが、結局は温床である。温室咲きの花は弱いとも言われている。どんな風雪にも耐えて行ける花を、私達は果して育てることができるだろうか。四季咲きの薔薇のように、自主性と適応性を備えた花を育て上げることができるであろうか。努力はしているが、顧みるとまことに心の寒くなる思いがする。

学習活動はもとより、スポーツ面、文化面へと、私の思いはつらなっていく。音楽科が新たに設けられた。学習方面では、今年は進学指導に特別な配慮が払われた。スポー

ツ面では、ソフトボール部が国体に出場、新人戦では県下大会に優勝を遂げた。バスケット部も関東大会に出場、ベスト4に入り、陸上競技部も新人戦では好成績を収めた。恒例の第五回定期演奏会は、音楽科・オーケストラ部・コーラス部の三位一体で多大の成果を収めることができた。幸い健康に恵まれているので、今年も着実に、希望と信念に立って、一步一步前進して行きたい。

「一人は一校を代表する」皆さん、今年もこの自覚に立って、強く、美しく、朗らかに励んで行きましょう。

音楽科を高校に設置するというのは、全国的にも数えるほどしかなかったが、友正校長は、学校のイメージを少しでも向上させるに役立つのではないかと考えていただけでなく、どうせつくるなら超一流の先生を招こうと、東京芸大をはじめ、武蔵野、国立、桐朋などの音楽大学に協力を求めました。一般家庭にもピアノが入りはじめ、テレビの影響もあって音楽ブームでしたが、専門に勉強させようとするには、それなりの準備と心構えの必要な時代でした。先生方は県内の中学校を回ってぜひ一人でもいいから入学させてほしいと頼んで歩きました。もともとコーラスやオーケストラのクラブ活動などで校名が高く評価されていましたから、音楽の道に進もう、超一流の先生について早くから学ぼうという方々に支持されました。そしてこの音楽科の誕生によって学校全体に弾みがついたのです。

あの日 あの時

「猛練習で成果得る」

ひめまつ 14号から

本校に音楽科ができる基礎となったコーラス部とオーケストラ部は、栄光のかげに猛練習ありで、両部とも素晴らしい成果をあげていきました。まず発声練習のための腹式呼吸です。富沢元子さんは毎日、寝る前に二十回ずつやったそうです。腹の筋肉が痛くて笑うこともできなかつたのに、一ヶ月もすると全員がマスターして正しい発声ができるようになり、大進歩したと誇らし気に書いています。しかし厳しい練習に退部する仲間もあったので、「私たちの生活には何か自分の特徴を見い出して、その研究にどこまでもファイトを燃やす精神を」と呼びかけています。オーケストラの練習もまず楽器の説明から入ったと床井京子さんは書いています。夏休みには一日も欠かさず基礎練習に励み、九月には簡単なハ長調の曲を弾くことがやっと可能になり、十月に最初の合奏ができるようになって、その感激をばねに発表会に挑んだと喜びをかくしません。練習時間をきめ、時間になると同時に練習終了。オーケストラ部の各係を分担し、各人が責任をもつという方法が効果をあげたと報告しています。(昭和35年3月発行)

## 第七章 多様化で特色を出す

### 特色ある学校に

当時、音楽科を設けるといのは大きな冒険でした。ようやくピアノやエレクトーンなどが生活の向上とともに各家庭に普及し、楽しむ子どもがふえてきたといっても、音楽を専門に学ぶというのはなかなか踏み切れる選択ではありませんでした。周囲も大丈夫かなあと心配していましたが、案ずるより生むが易しの言葉通り、優秀な生徒が入学して来ました。田淵進先生はじめ先生方の熱心な指導があり、かつ定期演奏会が評判になっていたことが幸いしたと思います。

友正校長が思いつきや自分の音楽好きで音楽科をはじめたわけではないことが、生徒たちの生々とした勉強ぶりで一般の方々にもわかってもらえるようになりました。「全人教育」という栄子先生の学園創立の基本理念を時代に即応させて実践するにはどうしたらよいかと、真剣に考えて「女性の時代」に向けての基本を実践しようとしたのです。「特色ある高校」——即ち、生徒ひとりひとりの個性を伸ばすにはどうするかという課題に真正面から取り組んでいった結果です。私学は何よりもしっかりした教育理念を持ち、かつ時代を正確につかんで、いつも工夫しながら、その理念をどう生かすかを考えなければなりません。教育という目に見えない価値をいかわかってもらえるか、真剣にならざるを得ないのです。

私は文部省に勤務しながら、学校のことを考え、この気持ちが日増しに高まっていくのを強く感じました。その解決策を与えてくれたのが、昭和四十年九月から十月にかけて約五十日間にわたり文部省海外教育事情視察団に団長として参加したことです。当時、私は文部省初等教育課長という職にあり、国の行政という立場から、次代を担う日本国民の育成に心をくだいていましたが、同時に日頃の仕事を通して、須賀学園の生徒の幸福と発展を一日も忘れることなく考え続けていたのです。全国の小・中・高等学校の校長先生方と一緒に、アメリカ、ヨーロッパの各国を回りましたが、その際、高等学校を視察するときには、須賀学園の将来の発展の方向を見出そうという気持ちが働いて、おのずから熱意がこもり、疲れを忘れるほどでした。

私が一番注目したのはアメリカの高等学校において、生徒の個人の能力を十分に発揮させようと、生徒の能力と適性に応じた多様な教育が施されていることでした。当時ちょうど高等学校への進学率が高まり、高校の性格や内容も変り、高等学校が多様化の時代に入ってゆくと直感しました。本校もその方向で、学科の拡充と各科の特色を発揮できるよう、施設、設備、教授陣容の整備充実をはからなければならない。生徒のひとりひとりの個性に応じ、地道に毎日の勉強に励んで、民主的な国家社会の発展に貢献できる立派な人間と



なるよう努力してもらうにはどうすべきか、全国的にも数少ない充実した音楽科をまずスタートさせ、伝統の家政科を生かしつつどう進めていくべきかを海外旅行中一心に考えました。

## 「多様化」を推進

そして、ほどなく文部省を辞して須賀学園に戻ったのです。ちょうどそのころ、栃木新聞から求められて「高校教育の多様化」と題して次のように書いています。文部省という政策立案、指導の立場から、高校の副校長として就任したばかりで肩に力が入っていますが、高校進学率が高まる中で、高校教育をどう充実するかについての私の決意がそのまま伝わってくると思うので再録します。この決意はいまでも基本的には少しも変わっていません。それどころか二十一世紀に向けて、同じことが問われているのではないかと自負すら感じています。

文部省の中央教育審議会答申で、高等学校教育の多様化が打ち出されたが、その趣旨は、高等学校への進学率が全国平均で八十%近くにも上昇している今日、高校の生徒の適性や能力は多様であり、高校卒業者に対する社会の要請も多様であるから、高等学校は、生徒の適性、能力、進路に対応できるよう教育内容の多様化を図る必要があるということにつける。

問題は多様化をどう考えるか、現場の先生方の間には意見の相違がある。職業技術教育の能率をあげるために、学制も根本的に改正してその徹底を図るべきであるという、いわば多様化万能論であり、一方には、アメリカやイギリスのようなコンプリヘンシブ・スクール（総合制高校）が全国にくまなく同じ規格でつくるのが一番よいという考え方、あるいは、高校では、職業技術に必要なものを身につけさせる必要は比較的薄く、基礎的な教養や一般的な人間教育に重点をおくことが必要という、いわば一種の多様化反対論である。

このコンプリヘンシブ・スクールという制度は、総合制高校と訳されているが、これを日本の総合制高校と同じと考えると、その実態はかなり異なっている。先年文部省派遣の校長欧米教育事情視察団の団長としてアメリカの高校を訪れたとき、先方の校長に、学校の各学科別の生徒数をきくと、分からないという答えがかえってきたのには、一同あぜんとしたが、コンプリヘンシブ・スクールという制度の内容を知ってはじめて納得した。日本の総合制高校は、普通科、商業科、工業科などという各学科が固定しており、それが一つの学校の中に併存しているのに対し、アメリカのコンプリヘンシブ・スクールは、生徒が自由に選択できる多種、多様な教科目が準備され生徒は将来の進路に応じ、

どういう科目をどのように履修したらよいかを、カウンセラーの先生に相談しながら、自分自身の学習プログラム（時間割り）を作り、学習する制度なのである。従って、日本のように、工業科の生徒、商業科の生徒というとはえ方はなく、科別生徒数など出てこない。

この考え方の根底には、民主主義の原理に基づき、個人の成長を目標として、個人の能力を十分に発揮させるよう能力、適性に応ずる教育を、というアメリカの教育理念がある。

この教育理念に基づいたコンプリヘンシブ・スクールにも問題は多いようだ。学校は、生徒の希望や能力に応じた教科目をできるだけ多く準備し、生徒は自分の能力、適性、進路に応じて履習科目を選ぼうとしても、一つの学校ですべての生徒の要求や能力にうまく適合したカリキュラムを組めるかどうか、それを整えるのは至難なようだ。職業教育関係の施設、設備も、日本の職業高校と比べると格段に見劣りがしたので、日本よりすばらしいものが見られるものと期待していた同行の校長先生方ががっかりする始末であった。

アメリカの高校のこのような状態は、高校における職業教育についての考え方の相違がある。日本は、卒業してただちに社会の専門分野で役立つ中堅技術者養成を目的としているのに対し、アメリカでは、高等学校は、義務教育（多くの州は十六歳まで）であり、一般教育なので、その目標は、職業の専門的分野についての一般的、基礎的な内容を、将来たずさわるべき職業の準備のために履修させ、いわば「職業準備教育」という考え方である。従って、完成教育としての職業教育は、①企業内の訓練②徒弟制度的な方法③成人教育④ジュニア・カレッジで行う——ことになる。

日本とアメリカの職業教育についての考え方の相違を述べてきたが、日本の高校における職学教育多様化は現在でも一般の考えている以上に進んでおり、農・工・商などの科の種類は二百三十種類にもものぼっている。多様化の趣旨は既存の学科を細分化するのではなく、従来のような広い分野の教育を行なう学科のほかに、一定の分野をさらに深く学習させる学科も設置、あるいは選択科目や類型、コースの種類をふやすことである。要は、生徒がそれぞれの能力、適性、進路、興味などに即した教育を受けることができるようにするという観点から考えることがたいせつである。

この文章は今から三十余年前に書かれたものですが、ここに述べられているコンプリヘンシブ・スクールが文部省によって日本に導入されたのはやっと数年前のことで、「総合学科」と名付けられて、栃木県にも現在数校が設置されています。

## 能力・特性を伸ばす

右の一文を書いた当時、本校は家政科、普通科、商業科、音楽科の四科があり、それぞれの特色が次のように述べられていました。そしてその直後の昭和四十五年四月から、時代のニーズに先がけて、全国にも数少ない男女共学の調理科が新設されたのです。

家政科は創立以来の伝統と近代化を誇る学科で、時代に即応した堅実な家庭婦人や職業人の育成をめざします。このため家政に関する専門的な知識と技能を習得させ、直ちに実社会や実生活に役立つよう適性に応じた教育を行っており、進学、就職の途も広いのです。栄子先生直伝の家政科教育の成果は他の高校を大きく引きはなしていました。そのことを如実に証明しているのが被服（和裁、洋裁）、食物の実技検定です。全国高等学校長協会家庭部主催、文部省後援のこの検定に参加し、合格率も他の高校に比べて抜群に高く、県下一と評価され、その輝かしい伝統は今日に至るまで続いています。



被服制作は自分の手で



実務に強い商業実践

高校教育の多様化の社会的要請に応じて、家政に関する専門的な知識と技術も次々と新しいものになってきました。実社会に役立ち、生徒の適性に合った専攻コースを増設して一段と飛躍、発展させたのです。その専攻コースは家政専攻（専攻科目として被服Ⅰ 被服Ⅱ 食物Ⅰ 食物Ⅱ 保育 家庭経営 手芸など）、被服専攻（専攻科目として和服製作 洋服製作 被服材料 被服経理 意匠 着装 手芸など）、食物専攻（専攻科目として献立調理 栄養 食品 食品衛生 食物経理 大量炊事など）といった内容です。

各人の特色を生かした技術、技能をのばすことができ、食物専攻コースの実績のうえに立って、さらに調理師の資格を得ることができるようにするため、昭和四十五年に調理科を設置しました。

普通科は、学力を高め、情操を豊かにし、知性と良識に富んだ広い視野をもつ人間を育成することを目指しました。一般教養を高めるために、毎月各自二冊以上の本を読破することを全生徒が約束し、全校テストの国語はもちろん、数学も上位を占めるという成果をあげることができました。

英語検定試験やペン習字検定、珠算検定試験に多数の合格者を出し、華道も免許取得者や弁論大会入賞者が次々と生まれてきました。普通科生徒は持っている力をフルに発揮して、大学進学、就職にと、着実に成績をあげていきました。

商業科は、本校の伝統に培われた品位礼儀を重んずる態度や豊かな教養にもとづく美しい言語、動作を身につけ、社会人として、職場における人間関係をよりあたたかく、明るくする職業人たるにふさわしい基礎的知識、技能を修得させることを目標としました。

卒業生は、各企業で大歓迎され、温和、自主、誠実、明朗そして豊かな人間性にみちた堅実な職業人として信頼されました。

商業科の指導内容については、一、二年では、会計技能と庶務能力を徹底して習得させ、各自の適性を見出し、三年では模擬商業実践等を通じ、商業活動の有機的関連を学ばせたのです。

当時他の高校ではなかなか実施できなかった次のような商業教育を行いました。

(一)、施設、設備は、総合高校として各科別に十分に整備されているので、たとえば家政科の設備、器具類も利用でき、幅広い実習ができる。

(二)、商業経営および就業に必要な知識、技能、態度を総合的に身につけ、実際に活用する能力を養うことを目標とし、教室内に商業社会を構成し、業務を分担し、経営の主体となって、取引関係を結び、これにともなう事務を処理するという他校に見られない実践的な授業をする。

(三)、総合的な商業一般コースのほかに、希望に応ずる専攻コースとして商業一般専攻（簿記、計算実務、和文タイプ、商事、商業法規、文書実務、商業実践など）、経理事務専攻（簿記、財務管理、税務会計、機械簿記、商業法規、経営、経理実践など）、事務機械専攻（事務、事務機械、事務管理、タイプ、計算機、事務実践など）を設けている。

商業科が重視したのは、珠算、簿記、タイプの資格取得で在学中に一～三級を全員がとることでした。

音楽科は創設以来、男女共学の音楽専門の学科として専門的な知識と技能を取得させ、将来プロとして大成することをめざしてきました。

各専攻ごとに大学教授を主とした優秀な教授陣が、鉄筋三階建ての最高の施設設備を持つ専用校舎を使用して教育を行いました。レッスン室八教室、個人練習室二十教室、特別練習室、合奏室、録音室、学生ホール等を備え、大学や他の高校には見られない徹底した少人数教育がピアノ、弦楽器、声楽、管楽器、打楽器、教育音楽の各専攻に分れて行なわれたのです。音楽実技のほかに聴音、ソルフェージュ、楽典、和声学、楽式、音楽史が生きた音楽と一体となって教えられました。これが大きな特色となって早くから音楽を学ぶ素地を完成させ、実技の実力向上にも、役立ったのです。音楽科ならではの行事も多く、誰もが一度は出演しなければならない学内演奏会は、毎月校内ホールで行われ、合宿練習、

演奏旅行そして定期演奏会へと続きました。音楽科卒業生のほとんどが宇都宮短大音楽科、桐朋学園大学音楽学部、国立音楽大学、武蔵野音楽大学、東京芸術大学音楽学部などに100%進学しています。

調理科は、調理師養成を目指していますが、食物を扱うプロとして衛生学、栄養学、食品学という基礎をしっかり学んだうえに、和・洋・中華の調理法をじっくり習得することに重点を置いています。もちろん、食物というものの持っている重要性から、礼儀正しく、間違いのない料理を責任を持って提供できるようにと「全人教育」が一層重視されているのはいうまでもありません。



和・洋・中華の教師陣は一流のプロ

調理実習は、一流ホテルのシェフなどその道のプロにより行われます。ここでは「理論に走りがちなので技術を叩き込む」という第一線の包丁さばきがみっちり教え込まれます。プロとしての芸と根性——お陰で卒業生はホテルオークラなど一流ホテル、レストラン、料亭、給食施設などからひっぱりだこです。フランスなど外国で修行する人も多く、また在外公館の専任シェフとして活躍している人も現在二人います。生徒は子供のころから料理好き、技術で生きようと目的意識がはっきりしており、入学も高競争倍率を誇っています。

### クラスは通し番号で

多様化はメニューを揃えるだけでは達成されません。各科の教員が、それこそ生徒ひとりひとりの顔を思い浮かべながら、教育内容を練り上げていきました。高校のクラスは一組から二十組と番号をつけました。これはクラス名を学科ごとの番号としないで、同じ学校

の生徒として仲良くできるようにとも工夫し一体化をねらったからです。全校でやる行事はいつもいっしょ、特別扱いはありません。

生徒たちも学校の意図を汲み、期待に応えてくれたのは大きな喜びです。各科の違いや争いもなく、ひとつにまとまっていたのも、それぞれが各科の生徒が自信と誇りをもって学んでいるからにほかなりません。今日では、家政科が生活教養科、商業科が情報商業科と、時代の要請に応じて発展し、普通科は全員大学進学を目指す国公立特進、進学、英進（現応用文理）の三コースに発展し、平成十三年度に新設した医歯薬特進コースの四コースとなります。さらに専門学科としての調理科、音楽科と、本校の伝統は少しも変わりません。それどころか、お互いに自分たちの良さを示し合って、足りないところを補いつつ、それぞれの目標に向かって胸を張って前進しています。その気持ちを生徒たちは、次のように実にさわやかに率直に語ってくれているのが、とても嬉しく思います。私が描いた多様化が着実に根をおろし、大樹となって成長し、りっぱな花をつけてくれたと自負しています。いま、当時の生徒たちの報告を読み返し、改めて、これからの時代に向けて多様化を軸とした教育のあり方をより深く考えたいと日夜研究しています。

〈家政科〉みなさんは、家政科というものはやさしいと思っている方もいるのではと思います。そんなあまいものではありませんが、私は、家政科にはいいなと思いました。家政科にいるとたくさんの技術が覚えられると思います。たとえば洋裁・手芸・食物・家庭などです。ほかの科にはこのようなものではありません。

（奈良部幸子）

〈普通科〉普通科にあこがれて入学しました。他の科は自分の専攻しているものを、いっしょうけんめい勉強することになっているけれど、私は、こういう選択の方法を、なにか不安に感じました。というより私には、その勇気がなかったのです。自分には、まだまだ基礎知識が足りない、二度と来ない高校生時代にできるだけ広範囲のことを勉強する、これは意義のあることだと思ったのです。

普通科は、一般教養を身につけ、豊かな人間性、美しい心をもつ女性を育てていく役割を担っています。大学進学にも関連していきます。普通科には、このように雄大な未来が開かれています。

普通科に、に入ってよかったと思います。多方面にわたっていろいろの知識を供給してくれるからです。そのためにやる気が起るという利点です。クラスの友達は、まとまりがあつてほがらかなクラスだと思います。

〈商業科〉私は中学校の頃から商業科に憧れというか興味を持っていました。今でも商業科に入ってほんとうによかったと思っています。

商業科は検定、検定で追い回されて大変だから別の科に入ればよかったなどと言う声も聞きますが、私はそうは思いません。確かに、商業科は、他の科に比べて科目も一番多いし、難しい面もあります。でも自分の特技が身につく、やればやるほど勉強のしがいがある科だと思います。

商業科は少しでも多くの上の級に合格したいと勉強意欲に燃えています。休み時間も休まず、授業中も分からない所は先生に質問をし、皆で教え合ったり教わったりして、とてもなごやかな科です。

(松本喜美子)

〈調理科〉さる十月七日、父兄試食会がありました。私たち二年八組の生徒は横山先生の教えのもとに、とりのきみ焼きと、お吸い物(よしのどり)を作りました。みな調理をやる前のいきごみはすさまじく、ことばでは表わしきれないものがありました。まえの日から、ノートを見て、作り方を覚えたり、仕事ははかどるように分担を決めたり、二年八組のチームワークのよさを示しました。横山先生がおいでにならないうちに調理を始める班もありました。なにか普通の授業をうけるときの態度とはちがう異様な感を受けました。人間は、何かに打ち込んでいるときは神秘的に満ちているともいうのか、ひとりひとりの動作が生きて見えるのが不思議なくらいでした。私はいくらかふだと勝手がちがったので、あせってしまったところもありました。みなが分担を決めて仕事をやるので遊んでいる人はひとりもみうけられませんでした。父兄の方たちも、私たちの作るのを熱心に見学していました。何ができあがるのか不思議そうに見いつている人もあり、生徒たちに質問している父兄もあり、和やかな調理風景でした。

もっとたくさん父兄の人たちに私たちの調理実習を見てもらいたいと思います。調理をする私たちは、父兄の人たちの熱心な見学があったからこそ、試食会ができたものと思います。

(荒井尚子)

〈音楽科〉私たちは、音楽を学んでいる。入学と同時に、音楽芸術の人生に於ける偉大性に驚かざるを得なかった。この偉大性をどう考えるかによって、方向というものが決定される。それを意識的に、あるいは無意識的に発展させ、あたかも粘土で像を創造するが如く形づくって来た。かと言ってその像が出来上がったわけではない。

微妙な心の動きで、ある所まで創り上げた像を、無残にも、ただの粘土にもどさねばならなかったり、技術のために、それ以上進まなくなったり、一生これが続くのかと思うと一見、華やかに見える音楽も、苦勞の固まりみたいに見えることもある。しかしやめることはできない。私たちは、皆、その固まりが、好きなのだから。

長い人生の道中、何があってもいいじゃないか。川があつたら自分で橋をかけれ

ばいいんだ。山が険しければ、ロープで登ればいいんだ。とにかく、欲しい物がその向こうにあるのだから。それを手に入れるまでは、何としても、頑張るんだ。

どうして、そんなにしてまでも……？

好きだから！！

(安生)

## 短大音楽科の誕生

昭和四十二年四月に宇都宮短期大学が音楽科の高等教育機関として発足しました。

友正校長の音楽好き、ソフトボール部の輝やかな全国制覇、それに伴う応援のための音楽活動の育成、熱心な音楽指導教員の存在、創業六十周年記念の全校あげての大音楽会、それが定期演奏会に発展、さらに高校教育の多様化という時代の要請…それらが、宇都宮短期大学音楽科誕生という見事な花を咲せることになったのですから、教育というものの持っている力は侮りがたいものがあると思います。昭和三十九年高校に音楽科を設けましたが、三年みっちり学んだあとどうするか、音楽大学を目指すとしても、当時はまだ限られた大学しかありません。高校音楽科は全国的にも数少なく、ちょうどピアノが各家庭に普及し始めた時期だけに、高校で音楽専門教育を受け、才能を伸ばすことができると人気を集めたのです。したがって学校としては音楽科卒業生の大学進学について考えました。東京芸大、武蔵野、国立、桐朋など音楽大学は多くなく、また、東京の大学にゆくのも容易でないという事情もありましたので、熱心な徹底した個人指導がキメ細かに行われると評判を呼んだ高校音楽科の上に短大音楽科をつくることにしたのです。



宇都宮短大音楽科が発足



中丸三千繪さんの母校訪問

短大をつくるといってもそう簡単なことではありませんでしたが、幸い、高校運動場として現在のキャンパスを確保していたのと、現に高校音楽科に日本で一流の先生がいるという実績があったので、昭和四十一年六月に文部省に申請をして、その年の十二月には短



大の設置認可をえることができました。高校音楽科三年間の実績もあって、音楽を勉強したいという優秀な学生が宇短大の音楽科を選んで入学したのです。中学校の音楽教員の養成というねらいもあっての開学でした。

安ずるより産むが易しという言葉通り、評判がよかったこともあって、いい学生が北海道から沖縄まで全国から入学してきました。短大はコミュニティ・スクール（地域の学校）といわれますが、宇短大は全国規模で学生が集まったのです。これは現在も変わりありません。

高校、短大の音楽科卒業生には、マリア・カラス賞を日本人で初めて獲得した世界一のソプラノ歌手中丸三千繪さんをはじめ、大阪フィルの飯島豊、N響の菅原恵子、芸大の直井研二、世界エレクトーン大会優勝の倉澤大樹さんら一流演奏家がめじろ押しです。また、栃木県内では中学校音楽教諭の多くを占め、そのほか音楽教室講師、個人教授など、全体の八割が何らかの形で音楽に従事しているのはうれしい限りです。しかも、県内にとどまらず、全国的に卒業生がいるのは心強いことです。この素晴らしい実績と伝統を発展させようと、カリキュラムも工夫して、ピアノ、声楽、弦管打楽器、電子オルガン、作曲専攻等に分れて、各々の専攻実技を学びつつ、合奏を通して全学がひとつになって音楽表現を学ぶようにしています。これによって演奏力を身につけるだけでなく、実際に音楽活動に合った実力をできるだけ早くから身につけることができます。宇短大ではヨーロッパ音楽研修旅行を通じてウィーンでのレッスンなど好評を博しています。

音楽はいまでは、私たちが予想した以上に身近なものになっています。CD、MDやインターネットなどデジタル技術の発展は、すでに音楽が私たちの生活の一部になっている事実を示し、これまでのように愛好家やファンだけの音楽ではなくなっていることを証明しているのです。「生活に音楽を」と本校が多様化の中で求めていた目標が完成されつつあるわけですが、高校音楽科、短大音楽科の役割は、今後ますます大きくなっていくと思います。多くの人たちが音楽に親しめば親しむほど専門的に学ぶ関心が高まってくるはずで、デジタル化によって分散しつつあるように見えてもその裾野は大きく広がっているだけに、音楽教育はやりがいのある分野であり続けるに違いありません。

## 第八章 校名、宇短大附属高校に

### 「全人教育」で活気

こうした昭和三十年代から四十年代にかけての高校音楽科の設置、短大音楽科の創設、高校調理科の新設など教育の多様化は、時代のニーズに応じて進められましたが、いずれも須賀栄子先生が建学の精神とした「全人教育」の理想に基づいているのはいうをまちません。単に学科をふやしていこうというのではなく、次代を担っていきべき子どもたちひとりひとりが社会にあって与えられた役割を果たして、人間として心豊かに暮らしていくにはどうするかを基盤にしています。本学園が発展を続け、声価が高まっていく中で、さらに今後いかにすべきかについて職員が集まるたびに活発な論議が重ねられたのです。このことに関して、当時、高校の教務部長であった大島威二先生が「多様化の中での人間教育を」と題して、どのような気持ちで多様化と取り組んだかを書いているので紹介します。「全人教育」についてその具体的なよびかけ、あるいは目標としての「一人は一校を代表する」をバックボーンとして、いかに熱心に栄子先生の初心を実践することに心をくだいたかがうかがえます。

須賀栄子先生は、新しい国家社会の発展の礎は健全な家庭の建設にあると考えられ、真にその使命を自覚し、その任を果し得る女性の育成をめざして本校を創立された。

当時、男尊女卑の封建的遺風が根強く残り女性は家庭的にも社会的にも低い地位にあったが、その女性の真価を発現させることこそ日本が真に近代国家としての地歩を固めるための急務と考えられたのである。

本校の教育については、栄子先生のこの建学精神と「全人教育」という教育理念に言及せずに論ずることはできない。つまり、広く社会の現実と将来、そして、生徒一人一人の将来を見通して、それぞれの学習指導に当たることを基本的な姿勢としている。同時に、生徒諸君は、ただ目先の進学とか就職という目標に向かって頑張ることだけでなく、各人が、将来果すべき使命をしっかり自覚した上で、現在の学業に取り組むことが大切なのである。君たちは、一人一人、今後進んで行こうとしている社会の各分野で、たとえそれが目立たぬものであるにしろ、本当に尊い役割を果たすことになる。

現代は、人間が機械文明と情報文明に翻弄され、個人が組織社会に埋没してしまう危機に立たされていると言われるが、このような時代にこそ、個人の尊さと、各自の社会的使命に、先ず自分が目覚め、さらに、その尊さと使命を十分に発揮し得る力を備えることが必要とされる。従って諸君の学業は、単に修得した結果だけにより評価されてはならず、目標を見出し、学ぶ意味を悟り、そして学ぶ姿勢を正すことが根本的な問題なのである。そして、高校生である君たちは、すでに誰もがこの根本的な課題に立ち向かう力を持ち合わせている。この自覚ある人間づくりの教育方針を高校生活全般にわたって示すのが、「一

人は一校を代表する」という生活目標であり、これは、「一人は一家、一会社、一県、一国……を代表する」と遠心的に発展されていくべきものだ。

本校は、時代の変遷と社会の発展に応じ、家政、普通、商業、音楽、調理の各科を擁する一大総合高校にまで発展してきた。現在、生徒のみなさんは各科にあって、さらにいくつかの専攻に分かれて、より専門化された知識、技能の習得、あるいはより個性と将来の進路に合った学業に励んでいる。この多様化は、今日の高校教育の一般的趨勢に沿うものである。が、本校における教育の専門化は決して、専門教育の徹底のみを目指すものではない。ややもすると画一的な教育に陥りがちな今日、この多様化の中において生徒一人一人の個性を十分に伸ばしていくことを目指している。人間が、学業面であれ、個人生活の面（たとえば趣味とかスポーツ）であれ、あるいは職業の分野であれ、自分の特性と実力を発揮するのは、誰にとっても大きな喜びであり、生き甲斐である。また、それが、自分への誇り、生きてゆく自信につながる。本校の先生方が学習指導あるいはクラブ活動等の指導に当たり、得意学科を、特技を、趣味を存分に伸ばすことに力を注いでいるゆえんがここにある。専門教科の実力を十分につけ、同時に家庭人、社会人として広い教養と健全な常識を涵養することに精一杯の努力を促しているのも、諸君の将来の生活に備えてのことだ。これは、国語の授業ばかりでなく、全教科、H・Rの読書指導、さらに、外部の作文募集への応募等幅広い指導の場で実践し、その成果も上りつつある。次に、豊かな情操と創造力の涵養。現代の社会に真の人間の潤いをもって生きるには、これは、極めて貴重なものである。最後は、物への愛、人への愛、自分とかかわりのあるすべてに対する愛情を育てることである。これは博愛といった高遠な理想を抱かせようというのではなく、むしろ、身近で、日常的な場における、実践を通じた指導を目指している。物を大切に、生命を尊び、先人に感謝し、そして、すべての良い芽を育てる。良い芽を育てるには、時には大きな勇気を、時にはねばり強い実行力を必要とする。これは生活指導における「やさしい心づかひの運動」の指導と相呼応している。

「全人教育」の中からこそ多様化教育が具体的に結実してきたわけですが、昭和四十年六月に、「一人は一校を代表する」という本校生徒の生活目標を、栃木県を代表する書道の大家であり、本校教諭でもあった石川木魚先生の麗筆で大書し、特別製の額縁に入れて全教室に掲げるようにしたことでもうかがえます。伝統を守ろう、先輩たちに続けという意気込みが自然な形で全校に溢れはじめ、単なる生活目標から精神運動にまで高まっていったのは特筆されます。生徒ひとりひとりがそれを実践で示そうと立ちあがっているのも見逃せません。

当時の生徒会長もその決意を次のように書いています。

「生活目標」は「一人は一校を代表する」という自覚の上に立って、各々が生徒として、人間として努力し実行し、かつ前進することになる。その効果の程を推量することはむず

かしく、ややもすると生徒会の形式的な活動のみになりがちだが、一人一人の心掛けによって「言葉づかい」「服装容儀」「礼儀」等の点から目的に近づいてほしい。「一人は一校を代表する」は、規則とは考えたくない。あくまでも私たちの生活の指針、生活の目標であって、規則ではない。心の糧、魂の声である。（須藤久美子）

このように生徒ひとりひとりが、実践目標として実行するという決意は気迫にあふれ、どこまでも前向きに決して後退するところがありません。これによって校風が培われ、愛校心が高揚し、学校の真価を広く天下に高めることにつながってゆきます。こうした自覚が自由な発想に基づいて身近な問題をひとつひとつ克服させ、「一人は一校を代表する」ことで存在価値を持ち、自信と希望がわいてくるのです。

この延長線から「優しい心づかいの運動」が澎湃として起こり、社会福祉に少しでも寄与しようと立ち上がっていったのは素晴らしいことです。演劇部、コーラス部は受刑囚を慰問し、全クラスが手分けして福祉施設を訪ね、歳末助け合い、愛の募金活動などで街頭に立つ。若さに満ち、感受性に富んだ青春を、勉強や生活にとどまらず、地域社会全体にまで発展させ、花を咲かせる。毎朝、授業前に黙想の時間を設けて「各自自分の責任を果そう」「今日あることを感謝しよう」と唱え、終業時には「身も心も美しく生きよう」と問いかける。ここに「一人は一校を代表する」姿があるのです。

友正校長は、その喜びを「夢を持ち、理想の実現へ」と次のように高らかに宣言しました。

私にとっていちばん嬉しいことは、在校生、卒業生を問わず、本校同窓生の皆さんが、よくやってくださることである。私は毎日、各方面で、いろいろな方々とお会いする。その際必ずといってもいい程、卒業生のだれ彼の話、また在校生の態度の良し悪し等の話がでるが、「御校の卒業生のHさんは、もう何年働いてもらっているがよくやっています」とか「御校の生徒さんは皆品がよくやさしい。町を歩いていても、乗車態度なども申し分ない」とほめられたり、生徒の隠れた善行に対して見知らぬ人達から感謝の手紙などをいただく時ほど嬉しいことはない。

今年度は学園を挙げて「優しい心づかいの運動」が展開され、社会福祉に寄与しようとする実践活動が活発に行なわれ、地道な、根強い動きとして、本校の新しい伝統を形作ろうとしつつあることはまことに喜ばしい。このような実践を通して社会の底辺をみつめ、この世の中に「不幸な人を一人もいなくする」という考えに、皆さんが到達してくれたらどんなに嬉しいことか。

在るがままの現実を深く認識しながら、みんなも夢を持ってほしい。今日ほど夢の少ない時代はない。夢は理想にもつながる。その理想の実現に打ち込んでいくような情熱をこそ、現代の青少年に望みたいものである。

## 「須賀さん」から「宇短附」へ

このように学校が名実ともに充実し、発展してくると、私も文部省に勤務しながらというわけにもいかなくなります。父友正校長と母華子先生が力を合せて一生懸命やっていますが、私は本学園に戻る決心をしました。

そうして、当時、私の心にあったのは、官尊民卑の栃木県の風土の中にあって、何とかして私学の地位を高めたいと願ったことです。学校といえば、公立学校が優先され、私学はその補完とされている。これでは知恵をしぼり、全学あげて努力しても自ずと限界がある。教育が進めば進むほど私学の役割が大きくなり、新しい工夫や対応をせざるをえないのに、一般の人にそのような私学に対する理解はうすい。本学園の発展と私学の地位向上の使命感をもって、昭和四十三年七月に文部省を退職しました。

十数年の文部省生活でしたが、これは須賀学園を発展させたいと念願している私にとっては大切なものを与えてくれることになりました。何といても文部省は教育の総本山です。いろいろな勉強をすることができました。また、栃木県内の多くの方々とも、知らず知らずのうちに大きな輪を形成してゆきました。ですから、私が文部省を辞めて学校に戻ると、県内の方々には歓迎してくれました。



学園に戻り、教壇に立つ

私が本学園に戻ってわずか一か月余で実行したのが、須賀高等学校を宇都宮短期大学附属高等学校に校名を変更したことです。まもなく創立七十周年を迎えるのですから、宇短大ができたことを契機に、総合高等学校として思い切って脱皮をはかろう、そして誕生したばかりの宇都宮短期大学の名前も大いに広めたいという狙いからです。「須賀さん」と明治以来親しまれてきた校名ですから心配がなかったわけではありません。栄子先生が心血を注いで一代でつくり上げ、多くの同窓生に支えられてきた実績と伝統は軽視できません。

幸い、短大音楽科が、宇都宮短期大学という新しい名前で前年スタートしたばかりでした。夏休みに職員会議にはかってみるとみんな大賛成、しかも「附属高校」で、と積極的

な声をあげてくれました。しかし、半世紀を超える伝統から、卒業生や関係者の気持ちはどうかと思わないわけではありませんでした。ところが、案ずるより生むが易しの言葉通り、校名変更は「画期的な英断。高校から大学への一貫教育の理想実現に向って大きく踏み出したもの」(同窓会会長 福田アキノさん)とあっさり受け入れられた。この背景には、何と言っても学校自体が大きく発展し、在校生の「一人は一校を代表する」という気概が校内の隅々まで行き渡り、卒業生も進学や就職でめざましい実績をあげていたのが強く作用していたのはいうまでもありません。同窓会も自信と誇りをもって見守ってくれたのだろうと思います。在校生も何のとまどいもなく「附属高校生」に成長し、発展していきました。そして世間の方は「宇短附」という略称までつけてくれて、今では県内ではどこでも「宇短附」で通ります。生徒自身もこの名称に誇りと自信を持っています。「ひめまつ」からいくつか当時の生徒の声を拾ってみました。

伝統ある須賀高校が宇都宮短大附属高校として内外共に飛躍をめざし変化していくことは、卒業生などには、一種のノスタルジヤを呼び起こすものにもなっているようですが、近代的な校名は若い私達には「かっこいい」響きであり、特に私達二千余名の在校生の意気込みをあらわしている校名だと思います。昔の須賀校はソフトボールが強かったと世間の方からいわれますが、時代の波に合わせて華々しい入賞を飾っている多くの文化活動に注目してもらいたいと思う。音楽、弁論、書道、演劇、放送と、どれをとってもすべて県立私立の他校に優る成績をおさめている現在、附属高校の校名はますます光を放ち、誇りを持って呼ばれるのにふさわしいと思うのは私だけではないでしょう。

元来、地味な校風であり、誇張したり、宣伝するのが少いので、外部にはその良さが理解されず、消極的な感じでうけとめられているのは残念です。やはり現代は主張すべき点は遠慮せず表面に出すべきではないでしょうか。七十年の歴史と伝統をうけつぐ私達は、「一人は一校を代表する」を生活目標に置き、明日への歩みを力強く踏み固めております。

(大島喜代子)

校名変更は一大革命であった。この革命は私達に多くの希望と可能性を抱かせたに相違いない。私はこの校名変更により、人々がこの高校を以前よりさらに前進、発展した高校として見てくれることを望む。バスの中で、婦人に「貴女はどこの生徒さんですか」と聞かれた。私は胸をはり、「附属高です」と応えた。婦人は少し驚いた顔で「どこの生徒さん」とまた聞く。私はしかたなく小声で「須賀高です」と答えると、「須賀さん」と言う。これは私にとってはショックであった。

でもこんなこともあって私の気持ちは救われた。それは学校帰り、買物かごを手にさげた婦人が、「すみません、今年は須賀高は文化祭やらないのですか」とていねいに聞いてきた。婦人はその後に「ああこんど附属高でしたね」と言ったのである。私は気持ちよくその質問に答えた。私はこの時ほどこの高校がりっばに見えたことはなかった。そしてうれ

しかった。私の方が婦人に礼を言いたかったくらいだ。たとえ校名は変わっても、「一人は  
一校を代表する」この一言はかわらないのだから。

(阿部恒子)

私としては、栄子先生が生涯のすべてをかけた本校家政科の伝統を校名変更はしてもい  
かに守っていくかが一番心をくだいた点でした。多様化という大波が広がり、世間の支持  
を得てくればくるほど、学校発祥の家政科の影が薄くなる。同窓生たちの胸の奥底にある  
気持ちも忘れてはならない。時代とともに一般的には家庭学科の志望者は減少気味でした。  
この時いちばん感じたのは、本校の家政科を校名変更で埋もれさせてはならないという点  
でした。「家政科がんばれ！」と文部省発行の「産業教育」に考え方をあえて発表して、全  
力をあげて伝統を守り育てていく決意を公表しました。

家政科は一般的にいわれるように魅力のない科なのであろうか。少なくとも高校側の努  
力によってその振興を図ることができるのではないかと考えている。人間の能力には思考  
型能力と技能型能力とがある。高校進学率が九〇%を超えている現在、多くの生徒が普通  
科志向の風潮に流されて漫然と普通科を志望し、家政科を回避する傾向がある。技能型  
の生徒も本当に生きがいをもって意欲的に勉強ができるように家政科の教育内容を考慮し、  
とくに実技を中心とした教育を徹底することが必要であろう。

高校の校長および一般教員の家政科に対する理解を深めることが必要である。現在の家  
政科設置の実態をみると、その多くが普通科等に一～二学級ずつ併設されている場合が多  
く、これらの学校では学科間の融和に欠けているようである。しかも一般教員や校長の理  
解不足が加わっている。家政科の専任教員はほとんどが女性であり、数も少ないので、と  
もすれば学校内における発言力が弱く、家政科の意気が上がり、校長もまたお荷物をか  
かえているという感を持ち、家政科生徒の進学・就職についての感心もうすい。

私の学校の家政科は、三学年千七百人余が学んでいるが、普通教科・科目は学習指導要  
領の最低単位にとどめ、残りのすべてを専門教科・科目によって編成し、三十余名の家庭  
科教員が徹底した実技を中心とした教育を施している。生徒数、教員数においても他の学  
科より優勢なので、他の学科の生徒に劣等感などをもつこともなく、校内活動においても  
他科の生徒をリードしていきいきと活躍している。

このような気持で家政科を守り育てることができたのは、学校としての大きな誇りにな  
っているのは間違いない。

その後、家政科を生活教養科と名称変更し、内容の充実をはかっていったのですが、そ  
の根底にあるのは、生徒ひとりひとりの持っている能力をいかに着実に伸ばしていくか、  
栄子先生が描いた女性の持っている特性をどのようにうまく育てていくかにつきま  
す。地味な教育ですけれども本校の生活教養科が元気いっぱい活動しているのはとて  
もうれしいです。

## 念願の記念講堂を建設

宇都宮短期大学附属高校としての発展にはめざましいものがありましたが、友正校長が心血を注いだのは施設設備の充実です。科をふやし、多様化に対応していくにはそれをこなしていけるだけの施設設備がなくてはなりません。宇都宮大空襲で何もかも失い、旧軍隊の兵舎を譲り受けて再出発しただけに、友正校長のすさまじい努力は涙なくしては語れません。生徒たちに少しでも安心してのびのびと勉強してもらいたい、不自由な思いをさせたくない、私学としてどこにも負けないりっぱな校舎が欲しい。そして、栄子先生が作り上げた学校を「全人教育」の場としてふさわしいものにしていかなければならないという使命感を、限られた収入の中でどう取り組み果していくか悩んでいました。中でも戦後の昭和二八年真先に取り組んだのが、戦災で失った講堂の再建でした。

戦前は、講堂や体育館がある学校は珍しく、どの学校も入学式や卒業式などの学校行事のときのために、普通教室の間仕切りをとり払うことが出来るような構造になっていました。しかし、本校ではなんとか立派な講堂をもちたいというのが友正校長の念願で、昭和十六年にやっと資金の工面もついて、はじめての講堂を建てることになったのです。いよいよ起工式というときに、十二月八日、思いもかけず太平洋戦争がはじまりました。当時すでに建築資材や人手が不足し、戦争が始まって、講堂の建築もどうなることかと心配されましたが、友正校長は万難を排してでも予定どおり建築することを決意し、着工しました。苦難の末に無事完成しました。しかし昭和二十年七月十二日夜の宇都宮大空襲で、学校の校舎もろともこの新しい講堂も焼け落ちてしまいました。友正校長はこの講堂の玄関正面に掲げられてあった金銅製の大きな校章を焼け跡から拾い出し、よく磨いて台板をつけ、大切に保存するほど愛着を感じていました。現在学校祭のときに校史室に飾られている校章です。

校舎が全焼したため、軍の兵舎の跡を国から譲り受け、現在の睦町の校舎に移ったのが昭和二十一年の三月。兵舎を改造して普通教室や特別教室をつくりましたが、もちろん講堂はありません。ただ大きな集会室がありましたので、それを講堂の代りに使っていました。しかし、なんとか前の講堂のような立派な講堂がほしいというのが友正校長や生徒たちの願いでした。当時は戦後とあってすべての物資が不足していた時代ですから、なかなかむずかしく、また全焼した校舎の復旧に多くの費用がかかりますので、講堂まで手が回らないのが実情でした。PTAの方々の御協力もあり、昭和二十九年になんとか新しい講堂を建てることができました。当時としてはたいへんモダンな設計で、入学式、卒業式はむろん音楽会や合唱、弁論大会を開いて人の目をひいたものです。

この旧講堂には、芸術院会員児玉希望書の「肅警」と難尾文相の「力行不息」の額が掲げられていました。この講堂も年を経るに従って手狭になったため、それを取りこわし、そのあとに昭和六十三年、創立九十周年記念事業として鉄筋四階建の立派な新しい講堂を



建設しました。旧講堂の機能を引き継いだコンベンションホールと、劇場のような固定座席をもつ大ホールと二つを重ねた形のめずらしい建物です。音響設計をNHK技術研究所に依頼して、NHKホールに劣らない音響のよいホールとして高く評価されています。友正校長の講堂に寄せる執念と学校再興にかけた熱い想いを伝えるべく須賀学園創立者の名を後世に残す意味を含めて須賀栄子記念講堂と名付けました。そして戦争中に供出した須賀栄子先生の銅像を復活するために、新たに先生の胸像をつくり、講堂のロビーに安置しました。

須賀栄子記念講堂建設に前後して施設設備を一新するには十年かかりました。昭和四十五年の本館について第一期工事（第二体育館、東部の部室）第二期工事（図書館、第二職員室、第二応接室、印刷室、物理室、進学指導室）第三期工事（5号館、ワープロ室、コンピューター室）そして、総合体育館、本館の西棟、北棟、東棟、新2号館です。これですべて内外観ともに面目を一新し、名実ともに私学の雄としての体制を整えることができました。

それらのうち、主なものについて記してみましよう。

第二体育館の新設（昭和五十九年）は、栃木県で初の屋上プールが併設され、学校施設としては画期的と話題を呼びました。図書館（昭和六十年）、第二職員室（昭和六十一年）、一般教室の5号館（平成二年）のほか、創立九十周年記念事業の須賀栄子記念講堂（昭和六十三年）と新総合体育館（平成五年）と続きましたが、いずれも、最新かつ機能的な数々の設備は、いままでの学校にはない内容を持ち、多様化時代にふさわしい教育が十分に行なわれるよう工夫されています。

本館北棟の一般教室（平成八年）や新2号館（平成九年）、アートルーム棟（平成元年）も同じです。とくに新2号館には茶室、和室を設けて「一人は一校を代表する」にふさわしい教養とマナーを身につけるようにしてあります。さらに1号館から4号館までの校舎は、内装外装ともに改装されて、新しく生れ変わりました。校庭も拡張されて、第三グラウンドが建設（平成四年）され、クラブハウスとともに、テニス、バスケットボール、バレーボールなどが思う存分できるようになっています。

昭和二十八年の旧講堂の建築以来、現在の中学・高校・短大の諸校舎の建築は、すべて丸石工業株式会社の照沼社長はじめ歴代社長および社員の誠意ある施工によるものです。

中庭に残っていた古い木造教室（旧2号館）も撤去され、美しい石畳が敷かれて、いまではあの戦後の厳しい学校生活をうかがわせる建物は消えてしまいました。昔の兵舎であった記念樹は、グラウンドの隅にたった一本残されている桜の老木だけになりました。かつては満開の桜が咲きほころび、入学、卒業の時期には記念撮影の場ともなって歓声に囲まれていた旧講堂脇にあった巨大な桜の木は、記念講堂を新築する際に切らざるをえなくなり、大幹だけを記念に残して伐採しました。この古木には防腐剤を注入したり玉砂利を敷

いたりして校長室のワキに残されていますが、花をつけない老桜であっても多くの同窓生にとっては母校の心の寄り拠です。いつまでも残したいと願っているのは、私ひとりではないと思います。きっと、百年に及ぶ学校を片隅から黙って見守っていてくれるのではないのでしょうか。栄子先生、友正校長、そして私と三代にわたって須賀学園が発展し、二十一世紀に向けて明るい展望に包まれているのも、この老桜のお陰と感謝するばかりです。あの鮮やかな花をつけなくとも、いつも満開です。ありがとうと毎日頭を下げて感謝しています。

あの日 あの時

「校名変更大反響」

ひめまつ 23号から

創立七十周年を機としての宇都宮短大附属高校への校名変更は、生徒たちだけでなく各方面に大きな反響を呼びました。北条静男・宇都宮市立陽北中校長からは、「現在の須賀学園の真の姿を一般社会の人たちに正しく認識してもらおう上に大きなプラスになった」として、「時代の先端を行く音楽科をも有する総合高校」の宇都宮短大附属高校を高く評価してくださいました。大塚虎之助PTA会長は、「校名変更には双手を上げて賛成」、「学園が一丸となって前進しよう」と呼びかけ、高山源吉副会長も、「カッコイイ現代的な名称に変わったという表面的なことだけでなく、高校から大学までの一貫教育体制の確立という、高く大きな目標に須賀学園が早くも到達したと、その旗幟を鮮明にしたものである」と学園に対する生徒、父母、卒業生らの期待の大きさを強調しています。誰もが心をひとつにして自分たちの学校を育てていこう、ひとりひとりが人間性豊かな日々を送ろうという願いが、この校名変更に込められているのは間違いありません。

(昭和44年3月発行)

## 第九章 県内私学初の東大合格を実現

### 陣頭指揮に立つ

私が友正校長から高校の校長を引き継ぐことになったのは昭和四十九年五月です。文部省を辞し、いわば家業たる教育の第一線に加わって、私なりに一日一日全力を傾けて取り組んできました。

友正校長が身を退いたのは「五十年」という区切りが強く働いたようで学内に対して次のように語っています。

私の栃木県における教員生活は丁度五十年になる。当時は宇都宮工業高校の創業に参加し、そのまま奉職すること十年。のち栄子先生の死去のあとを承けて本校々長として四十年。文字通り半世紀の五十年を教職に捧げてきた。

もうひとつ、妻華子との結婚生活も五十年で金婚式。思えば遥けくも来つるものかなの感無きにしもあらず、お互い健康で、形影相伴って今日に至ったことは、まことに有難いことと感謝いたしている次第。

それに、時あたかも昭和は五十年になろうとしている。本校も創立以来数えて七十五年と、すべてにわたって区切りがよい。

そこで、五月を期して、三代目淳校長にバトンを渡したというわけ。

したがって、四十九年度卒業生が、私の引退の年の卒業生、五十年年度一年生として入ってくる生徒を新校長が引受けて、はじめから教育に当たる生徒たち、とこうなるわけです。

喜びも悲しみも幾歳月ということばがあるが、その言やよし。喜びを、と先ず顧みれば、本校創立七十周年の記念式典を自分の手で挙げる事ができたということである。しかも、私の代になってからそれぞれ十周年記念の区切りごとに飛躍的發展を遂げ、卒業生は二万名を超え、在校生も史上最高の数に達し、いずれも高い社会的価値を勝ち得ている。では、悲しみは、といえ、初代栄子校長との永別、つづいて第二次世界大戦による校舎の全焼をあげねばならない。しかしその悲しみを踏み越えて今日の繁栄を得ることができたのは、偏えに関係各位のご協力の賜に外ならないと感銘いたしております。

さわやかな引退ということになります。校長室を私に譲ってからは、学校に関して一切指図がましい注文や注意などただの一度もありませんでした。そして昭和五十七年九月一日に亡くなるまで、この基本姿勢は少しも変わりませんでした。須賀学園理事長、宇都宮短期大学学長はそのままでしたが、理事長も学長も実質的にはすべて私に委ねてくれました。「老人は過去を語り、青年は未来を語る、ということばがある。私はまだこの老人と呼ばれる人の仲間入りはしたくないと思っている。私が過去を語るのは、よりよい未来をきずくために必要な知恵としての経験を語るのであり、新しい世界の創造のために、いささ

かなりとも寄付したいという願いにもとづくものに外ならない」といいつつも、静かな余世を過ごしていました。



いつも笑顔で挨拶する友正校長

友正校長は五十年間、本当の教育者としてすべてを献げていたと思います。日曜日も休日も一日として休まず学校に出て、校内の隅々を歩く。教職員ひとりひとりに声をかける。教室ごとに生徒たちの様子を見る。その姿は父・友正校長というよりも聖職者の姿でした。私は文部省という教育行政にもかかわりましたが、実際の教育現場で父とともにいっしょに取り組んだ日々こそが今日の私の血となり肉となっています。友正校長の人となり、本校の教諭であり、卒業生でもある戸室文子先生が記しています。多くを語るよりも、この一文がすべてを描いています。

戦災で焼けた校舎、寄宿舎と友正校長先生宅は廊下づたいにつながっていたので、私たち寄宿生はたえず神経をつかった。先生は特徴のある威勢のよい歩き方なのですぐわかり、畳に足をのばしていても、誰かの合図で足をいち早く引っ込ませたものである。学期の始めと終わりは、友正先生御夫妻を交えて寄宿生が親睦会を開き、各自のかくし芸があり、先生はお得意の「埴生の宿」を英語で歌われました。先生の低音で音量のある歌唱、目をとじ口をへの字にして真剣に、ていねいに歌われた姿が心にやきついている。先生のピアノと華子先生の三味線で仲よく合唱したことも思い出される。温かい人間関係の基礎を、また生きていく上の常識を、一つ一つ見本を示して下さったように思う。

戦災の復興に友正先生は大変苦勞されたようだ。校舎を借りての授業、自転車で二つの借校舎を飛び回ったとか、卒業証書は紙もなく、校長印はさつまいもで作ったとか、いつもこの話をされるときは声がつまった先生。胸中を察するに余りあるものがあつた。

家庭科の実技検定テストの日程が第二期の終業式と打ち合っ、その許可を得るべく校長室に参上した。「終業式と検定とどちらが大切か」当然大爆発。頭から足先まで、ビーンと響くような大声である。先生の心には初めての他校での実技テストを案じてのことだったに違いない。暫くの間無言でたっていた私は、意外な声を耳にした。「しっかりやってきなさい」真っ青な顔が笑顔となって私を見ていたのである。筋の通った曲ったことの嫌いな先生。でも建設的なことをよく理解して下さる温かい心をもっておられた。どんなに叱られても、そのあと素直に反省されるのは、先生の人間性からであろう。テストの結果はすばらしい成績。指導した私もすっかり自信を得たことは言うまでもない。先生のあの時の許可がなければ、自信をもつこともなく終わったかもしれない。

先生はいつも自転車で通勤されており、本当に質素な生活であった。当時六十歳ごろかと思うが、学校近くの十字路でよろめいて倒れた、そばにいた私はいそいで手伝おうとし、「先生大丈夫ですか」と声をかけると、笑いながら「そちらこそ気をつけなさい」と、倒れた自転車をおこしながら、笑顔で答えてくれた。温かい、人を思いやる気持ちが見うけられ、社会的にも地位のある先生の日常の姿がそこにあった。昭和五十三年に大手術をされてから、すっかり弱られ、「学校がすべて」「学校が生甲斐」といわれた先生も、学校にいる時間も少なくなり、静かで元気の無い声になってきたことは本当に淋しいことであった。

被服教室のある二階の窓から、本館西棟建設の様子をながめながらの横顔が、白くやせ、服もゆるくなったようであった。学校の最後の日も、決して苦しそうな様子を見せず、背すじをのばして静かに歩かれた様子が、今も目に残っている。

先生の残された「一人は一校を代表する」という言葉も、生徒の一人一人がそれぞれに本校の生徒としての価値を知って、その価値を自分で見捨ててはいけぬ、という意味だ。栄子先生の残された個性・能力をのばす教育を引きつがれ、二万の卒業生の心に息づいている。そして私の心中に先生の教えの数々が生きている。

父・友正校長とともに学校の人生を歩んだ母・華子も父の死の二ヵ月後、十一月二日に後を追うようにして亡くなりました。私にとって大きな悲しみというほかはありません。栄子先生の残した女性としての教養を生徒たちに身につけさせるべく、作法、和裁などの実技を教えていた母の姿はいまでも私の脳裏に焼き付いて離れません。私が文部省から戻ってくると「淳が戻ってきたら私は引退しようと思う、私が出ると淳がやりにくいから」と言って学校には姿を見せませんでした。だからこそ私にとっては父母が二人三脚ですべてを傾注して築き上げた須賀学園を守り抜かなければならないと強く決意したわけです。

私が校長を引き継いで改めて打ち出したのは「全人教育」の実践にほかなりません。教育の現場に立ち、毎日ひとりひとりの生徒を見ると、この原点こそが何よりも大切ではないかと考えました。当時私は次のような言葉で、全教職員、生徒、PTAに本校の教育理念の「全人教育」を訴えています。

宇都宮短期大学附属高校は、普通科、家政科、商業科に加えて、全国でも数少ない音楽科、調理科と、五つの科をもつ総合高校となっていますが、これは高等学校への進学率が全国平均で九〇%をこえた今日、高校生の適性や能力は多様であり、高校卒業者に対する社会の要請も多様となっているので、高等学校においては、一人一人の生徒の能力、適性、進路に応じた適切な教育を行なう必要があると考えているからです。本校では、これらの各科をいくつかの専門類型、専攻コースに分けて、生徒の適性、希望に応じ、より深く専門的な教育が受けられるようにしています。同時に総合高校の利点を生かして、各科とも、他の科の専門の先生や特別教室を活用して、幅広い多彩な教育が展開されています。

このように、生徒の個性、能力、特性を伸ばすという全人教育の基本方針のもとに、先生方が個々の生徒の能力、適性の把握につとめ、一人一人の生徒を大切に、親切にキメこまかな指導を行ないます。施設、設備は近代化され、教育内容も時代の進展にそった新しいものになっていますが、それにもまして大切なことは、「教育は人なり」といわれるように、先生と生徒のあたたかい人間関係です。本校では、先生と生徒の人間関係を密にし、心と心のふれ合いによって、ほんとうの人間教育を行なおうとしています。本校はしつきのきびしい学校といわれています。「一人は一校を代表する」を柱に、だれからも愛され、信頼される人間を育てることを目標に、厳しさのなかにも温かみのある教育を行ないます。

このような本校の教育の基本方針は、須賀栄子先生創立以来一貫して受け継がれてきており、またこんごも変わることはない大方針です。

## **全地域で父母と懇談**

この大方針を実践するため、徹底的に行なったのが、友正校長のはじめた在校生の父母全員との各地区ごとのPTA懇談会です。いくら学校が力を入れて教育しても生徒が家庭に帰ってからを忘れては何もなりません。学校と家庭がいっしょになり、力を合わせてこそ教育の目的は達せられます。昭和三十年ごろから夏休みを利用して、各地区ごとに集まってもらった方法で取り組んでいましたが、私は県内外全地域に全教員をくり出して取り組むことにしました。父母に学校に集まってもらうのではなく、地域、地域に出かけてこそ生徒の様子がわかり、意味あるものと考え実行したのです。

各市町村単位ごとに、とくに生徒の多い地区では出身中学校単位ごとに、PTAの支部を置き、七、八月に各地区の会合に学校側から全担任教員が出席して、父母との個別面接を行なうことにしたのです。学校側の出席者は二、三人の幹部教員だけというのではなく、本校ではその地区に一人でも担任の生徒がいる場合は、その担任教員は必ず出席することにしました。

私を先頭に、教頭以下六十余名の全担任教員がバスを仕立てて各地区に出向くわけですが、なにしろ支部の数が五十余にのぼっているので、午前と午後、一日二回公演になりました。夏の暑い盛り、しかも借りる各地の中学校の体育館は蒸し風呂状態、長時間に及ぶこの会合は大変な難行でした。

しかし年に何回もない貴重な面接の機会であり、担任の生徒の成績表や心理テスト、個人面接の結果表など細かい資料を持参して、話しておきたいこと、聞いておきたいことなど、話題も多く、時間のたつのも忘れて熱中してしまうほどでした。

父母の方もせっかく担任の教員が地元まできてくれるのですから、どの地区も一〇〇%の出席率。学校で開く父母会の出席率とは比較にならない好成績でした。担任教員も一〇〇%の出席なので、父母に十分な満足感を与えることになったようです。

この父母面接に私はいくつかの大きな意義を見出していました。

一つは、担任教員にとっては、生徒たちが生れ、育ち、そして毎日生活している土地、土地に実際に足を運び、じかにその姿をみ、接することに大きな意義があります。教員はおおむね宇都宮かその近辺に住んでいるので、県内各地、ましてや県外の地はあまりよく知らないわけです。バスに長時間ゆられて山間の町などに入ることによって、生徒は毎日こんな遠くから朝早く起きて通学してくるんだなあとその努力がしのばれます。その土地や人々にふれて、生徒ひとりひとりの個性や特性をはぐくんでくれた風土や人情を身をもって感得することになるのです。

二つには、私は全父母に会うことのできるこの機会をとらえて、学校の基本的な教育の考え方などを説明しますが、これをただ単に学校の行事としてとらえるのではなくて、父母に対する社会教育の場と考えて、高校生など子をもつ親の心得などの話をして、大いに効果をあげたと思っています。

また、この父母との会合を重ねることによって県内の隅々まで知るだけでなく、将来入学してくるであろう中学生以下の子どもたちの様子もわかり、大いに参考になりました。どこに行ってもいちばんうれしいのは、私が陣頭に立って進めている生徒ひとりひとりの個性や特性、能力に応じた「全人教育」をよく理解してもらい、「一人は一校を代表する」親の立場から、学校といっしょになって子どもを育てていこうという気運が高まったことです。

## 県内私学初の東大合格

教職員と生徒、その父母との一体感が日増しに高まってくるのを肌で感じつつ、学校発展への期待に応えるにはどうするのがよいのか。ただ単に、学校関係者にとどまらず、栃木県内における私学として実績と伝統をどのように生かしていくべきか自問自答を繰り返しました。このころになると、「宇短附」という校名も定着してきただけでなく、何かをやってくれる、他の学校、とりわけ公立とは違った教育に取り組もうとしていると思われるようになり、会う人ごとに声援を送られるようになりました。これは、私が全責任をもって学校運営にあたるようになって、毎日毎日続けて来た教育方針が、やっと世間に認められるようになったものであると意を強くしました。ここで気を緩めてはならないといつも緊張しつつ、新しい道を探り、新しい構想を練りました。そこにはいつも創立者の栄子先生がいるのはいうまでもありません。

まず、昭和五十四年に普通科に男子クラスをとることにしました。「須賀さん」と親しまれていました本校は、栃木県の一般的風潮としては、発足以来の歴史からどうしても女学校、しかも家政科というイメージが強かったので、これを打破したいと考えたからです。それにはやはり大学進学で実績をあげなければなりません。幸い、男子生徒は昭和三十九年開設の音楽科に毎年三、四人入学していましたし、昭和四十五年開設の調理科には六〇～七〇%と男子が多く入学してきました。といっても大学受験となると話は別です。私は内心どうかと思いながら職員会議に諮ると、全員から「ぜひやりましょう」という声が起こりました。「宇短附」として発展していくには、自らが脱皮しなければ何事も成就しない、一人でも多くの優秀な生徒を入学させ、みっちり鍛えようではないかというのです。

こんなうれしい支持はありません。内が固まれば鬼に金棒です。最初は果して優秀な男子が四十人集まるかという心配もありました。しかし「宇短附なら安心だ」と入学者が続きました。これが普通科特進コースの始まりでした。勢いに乗って、翌五十五年には特進の女子クラスを設けるということになり、どちらも順調に発展し、後で共学にしました。世の中は大学進学時代に入っていましたので、その要望に応じてこそ私学だと確信しました。その成果は着実にあがり、第一期生は、数人の浪人生は出しましたが、全員が大学に進学し、五十八年度には男子生徒が栃木県私学初の東大合格を果たし、さらには宇都宮大や医歯薬系大学合格者続出という快挙を成し遂げることができました。県立の有名進学高校ではないと東大合格は無理という現状に風穴を開けたわけですが、本校生徒たちに東大にも行けるという大きな自信を与えたのです。

この特進コースという新しい試みは県内の他の私学も採用するところとなり、私学興隆の端緒となりました。私はこの新方針こそが栄子先生による須賀学園の教育理念である「全人教育」を今日にりっぱに実らせる原動力になったのではないかと思います。第一に、私



学といえども有名県立高校に伍して、自らが目指す大学進学に向って胸を張って挑戦する。第二には、相乗効果によって本校に優秀な生徒が多数集まるようになったということです。家政科は生活教養科として県内随一の活動を示すにいたり、情報商業科は男子生徒が七〇%を占めるまでになっています。だからこそというわけではありませんが、第三に、こうして結果として「全人教育」が全校として見事に結実したのです。多様化という言葉の裏にあるひとつの方向づけとしてではなく、「宇短附」という大きな屋根の下で、生徒ひとりひとりの個性を生かした教育ができるようになったということです。

東大合格のお陰で、生徒を送り出す中学校側からは「宇短附」として高い学校評価をえるようになり、時代に先駆けて新しい手を打つのはいつも「宇短附」と注目される存在になったのです。

昭和五十八年四月には、栃木県初の中高六ヵ年一貫教育の附属中学校を設置しました。今日では、中高一貫教育が文部省でも取り上げられ、いくつかの公立学校でも実践されるようになりましたが、本校は時代にさきがけて優秀な生徒を六年間みっちり教育しようとスタートさせました。一貫教育である以上、六年間を見定めてカリキュラムを組み、大学への進学を確実にしたいと考えました。しかし、公立優先の栃木県の風土のなかではなかなか大変でした。しかし、この中高一貫教育は成果をあげて、毎年、東大、京大、東北大、筑波大などの国立大学ならびに都立大などの公立大学や、早稲田、慶応など有名私立大学に多数の合格者を出すことができ、また難関といわれる医歯薬系学部にも多数進学し、学校の評価を高めてくれています。勉強する雰囲気こそ大きな効果を与えるものではありません。

この中高一貫教育の成功は県内から大変注目され、とくに、中学、高校の六年間、何ものにも煩わされることなく勉強したいという生徒や父母に支持されました。平成八年度からは、附属中学校に特進コースに加えて総合コースが設けられました。総合コースは、各自の個性や進路に応じて、本高校の普通科をはじめ、生活教養科、情報商業科、調理科、音楽科の特色ある各科に進むことができるものです。子どもたちひとりひとりに合った道をつけたいという願いです。

## 広がる国際交流

音楽科には昭和六十三年から電子オルガン（エレクトーン）専攻を設け、幅広い音楽教育を目指すことにしました。全国でも数少ない高校音楽科の伝統を守りつつも、時代の要請に応じて音楽教育の幅を大いに広げようというねらいからでした。

また昭和六十三年には家庭科を生活教養科に、商業科を情報商業科に、それぞれ科の名称を改めるとともに、カリキュラムを時代の要請に沿った内容にしました。介護福祉やワープロ、パソコンなどの授業もいち早く採り入れ、長年の学校の伝統を基礎に新しい技能や技術を積極的に学び、いままでにない分野を開拓しました。職業高校が低迷している時ただけにこの大胆な試みは評価され、就職や大学、短大、専門学校進学に大変大きな役割を果たすこともできました。

時代はまた国際化への対応が急務となっていました。高校レベルからも海外の人たちとの国際交流が叫ばれていたので、平成二年にニュージーランド・マヌカウ市のハウィック・カレッジと姉妹校の提携を結び、毎年夏休みに語学研修旅行を実施し、ハウィック・カレッジからも、たびたび来校して国際交流をはかっています。調理科でも本場の料理づくりを学ぼうと、中国杭州市とフランスのポークリューズ県に研修旅行を実施しています。それぞれの国でプロの料理人から手ほどきを受けるだけでなく、食材や食事を楽しむ心遣い、マナー、さらには食生活への取り組みなど本場ならではの勉強を重ねています。



遠来の友とひとしよに書道の実技

また、ロータリークラブの交換留学生も迎えて、一年間本校の生徒としてひとしよに勉強してもらっていますし、本校生徒も毎年留学生を多数出しています。

このような教育内容の充実ぶりは中学校の受験生を招いての一日体験学習や学校祭で外部の方々に発表されるわけですが、誰もがその発表に目を輝かせて見ているのを知り、いっもうれしく思うのです。ファッション・ショーや調理の実技、音楽の演奏が、一流大学

進学の実績などと合わせて次々と示されると、子どもたちだけでなく、引率の先生方あるいは父母の皆さんが高校教育はこれではなくてはと手応えを感じてくれているのがわかるのは、何にも代えがたい喜びです。

宇都宮短期大学では、昭和六十二年十一月十日に創立二十周年記念式典が新築の須賀友正記念ホールで開かれ、音楽短大として素晴らしい実績を内外から高く評価されたのも忘れられません。高校音楽科の延長線上にとスタートした宇短大が、先生方の熱心な指導のお陰でりっぱに成長し、合奏、合唱、そして「宇都宮短期大学讃歌」と続いて、聴衆の胸に大きな感動を刻みました。手塚武作詞、楊枝郎作曲の「讃歌」には、音楽教育をいかに考え、どのように取り組んできたかがにじみ出ています。田淵進先生の情熱あふれる指揮による大合唱が始まると、式場はシーンと聴きほれ、歌い終わると同時に大きな拍手がわき、共通の感動に包まれました。

## 宇都宮短期大学讃歌

このいのちに

このいのちに燃ゆる火の歓喜 山の八汐は花盛り 花ざかり  
雪解け水を 押して流して ごうごうと みなぎる河  
あなたの焔を あかあかと点して 心のつぼみが花開く 花開く  
すべての幸に 火を点して 歌の花輪をかざそう 天の涯 地の極みまで

うた

悲しみをこらえている人びとのために わたしは弾き ぼくらは歌う  
うたごえは低く 小さくとも 心はこの世の隅々をひたし充ちはじけた  
それを聞くのは誰だろう 貧しい巷のお母さん  
優しいふるさとのお母さん きょうだい達

音楽の持っている理念、精神が見事に表現されていると感じるのは私一人ではないと思います。世の中は、「物の時代」から「心の時代」に移り変わっています。それだけに、音楽はますます注目され、多くの愛好者がそれぞれに楽しんでいます。宇都宮短期大学は「心豊かな時代」の担い手としてのアーティストの育成に力をそそいでいます。高校の音楽科からは、宇短大に進学するほか、東京芸大をはじめ、桐朋、武蔵野、国立などの一流音大に進学し、欧米の音楽大学に直接留学する人もいます。

これらの卒業生の中から、前にも述べたとおり、国際舞台で活躍する音楽家が多数輩出しています。茨城県下館市から本校に学んだ声楽家の中丸三千繪さんはマリア・カラス国際声楽コンクールで日本人でははじめて優勝しました。このほか、東京芸大講師でオペラ演出家の直井研二さん、東京フィルの吉沢慎一さん、日本フィルの宇田紀夫さん、読売日響の増山一成さん、大阪フィルの飯島豊さん、名古屋フィルの藤沢伸行さん、フランス・アコーディオンの伊藤浩子さんなど、多くの卒業生が世界を舞台に活躍中です。倉澤大樹さんが、エレクトーン世界大会で見事優勝し、グランプリを獲得しました。これら先輩の活躍は後輩の大きな励みとなっています。

私も、父譲りの音楽好きで、栃木県交響楽団会長、栃木県オペラ協会会長をつとめました。多くの卒業生が主催したり、出演する演奏会に出かけていくことも私の大きな楽しみです。

あの日 あの時

「調理科 フランスへ」

ひめまつ 47号より

須賀学園の国際交流は年とともに活発になり、高校生のニュージーランドのハウィック・カレッジへの語学研修、短大音楽科の学生のウィーンへの音楽研修と広がっていますが、高校調理科のフランス料理研修旅行は特筆されます。

須賀淳校長先生は、「南フランスのプロバンス地方にあるアヴィニオン市は、栃木県と友好県の関係をもつヴォークリューズ県の県都です。このアヴィニオン市をはじめ各地での研修は、両県の配慮で、内容の濃いものとなっています。ホテル調理学校でフランスの生徒と一緒にフランス料理研修、三ツ星級レストランでの実施研修と食事、ワイン工場や香草、養鶏農場見学、ジャム、キノコの加工場見学などに加えて、旧ローマ法王庁をはじめとする中世の文化遺跡の見学など盛りだくさん、ふつうの修学旅行では体験できないこの研修を通して国際親善に大きく寄与しています。この国際交流の成果を二十一世紀を支える生徒たちの教育にぜひとも生かしていきたいものです。」と述べています。

(平成5年3月発行)

## 第十章 待望の大学誕生

### 「全人教育」を進める中で

二十一世紀を前に、学園としてどうするべきかいろいろ検討した結果、社会の変化に対応できる、個性ある人材や創造的な人材を育成することが、これからの日本が活力ある社会に発展し、世界の平和と繁栄のために役割を果たしていくうえで不可欠と考えました。このような社会の要請にこたえて、地域社会と共生しながら、より豊かな社会システムを構築する場として、新しい大学をつくろうと決断し、那須大学都市経済学部（現宇都宮共和大学シティライフ学部）を創設して、栃木県内の高等教育機関の創造的進歩に貢献しようと取り組んだのでした。

都市経済学という新しい学問分野にしたのは、私たちが生活している都市には生産と生活の拠点となっていることから生じる地価上昇や住宅難、乱開発、環境悪化、高齢者介護などいろいろな問題が生じていますが、必ずしも満足いく状態ではありません。これまでは経済成長一本槍だけでとても国民一人一人の身の周りを考える余裕がなかったからです。これらの問題を直視して、とくにその経済的側面について総合的な教育研究を行なうための学問が都市経済学です。

栃木県内の高校生の大学進学率は上昇を続け、約五十%（平成八年度）と、この十年間大きく上昇しています。栃木県は人口の社会増が続き、ついに二百万人を突破しました。栃木県の次に大きい岡山県は、百九十万人でとまったままなので、今後日本で二百万人になる県は出ないとの厚生省の発表でした。このように発展を続けている栃木県内の高校生が、大学に進学する場合の県内残留率は、十五%と情けない状況にあります。全国平均が三十六%ですから、半分以下で、全国第三十六位という低位にあります。これは、栃木県が東京に近いということもありますが、県内に立派な大学が少ないということが大きな原因です。とくに県北部地域には、一般の大学は皆無という状態です。このため、栃木県や地方公共団体、経済団体、県高等学校会長等から、須賀学園に対して大学設置の要望がたびたび出されており、とくに黒磯市（現那須塩原市）は県北の大学空白域を埋めるための大学誘致を市の最大の施策に掲げていました。

### IT革命の拠点として

大学が開学する那須の地こそ都市経済学を教育研究するのにふさわしい地域であると思いました。東京から那須塩原駅まで新幹線で七十分、駅から大学まで立派な道路が通り、JRバスで八分です。現代は都市とリゾートの共生が進展しています。情報通信技術（IT）革命によって日本は経済活動ばかりか政治や社会のシステムを改革していかなければなりません。そのために新しい場で思い切った理想の環境共生都市をつくり、先駆的な取

り組みを通して二十一世紀の日本が本当に実力のある強い国であることを世界に示す必要があります。

栃木県の経済発展にはめざましいものがあります。液晶やメディカル・通信など、多数の先端産業が進出してきています。那須大学は栃木県、市町村、経済団体等からの強い要望と期待をもって設立されたのですから、「地域に役立つ実務に強い人財」を育成して、卒業生も県、市町村、企業等に確実に受け入れられることでしょう。こうした公私一体となった大学の体制は、これからの時代と社会に即応した新しい取り組みであると全国的に注目されています。

現代の国際化や情報化に即応して、学び、働き、生活するレベルでの研究実践を行うのが国初の都市経済学部（現シティライフ学部）です。教育の内容は、都市のあらゆる経済問題、たとえば住宅、交通、ゴミ、騒音公害、福祉、資源環境などを、総合的に研究教育し、それぞれの解決策を経済の観点から検討し、実践していくものです。これには行政や法律、経済政策や経済分析にとどまらず、社会福祉、住宅、地域社会など、都市現象のすべてにわたる学問を究める必要があります。これまでの経済学と違った特色ある学部です。しかも、コンピュータと英語というこれからの社会活動にとって不可欠な技術をしっかり身につけることを重点にしています。グローバル化という時代の要請に対応して、社会人や留学生を特別枠で入学させる制度も設けました。社会人には会社の社長や現職の市議会議員などがおり、年齢も五十代とバラエティーに富んでいます。講義を教室の最前列で聞き、若い学生といっしょになってクラブ活動もするという頼もしい存在です。留学生は韓国、中国、インド、モンゴル、ネパール、台湾から元気のいい学生が集まっています。日本語の特訓を受けて入学しただけに溶け込みも早く、大学祭ではお国自慢の料理をつくって地域の皆さんに喜ばれました。

## 二十一世紀を象徴したモニュメント

那須大学（現 宇都宮共和大学）では勉強も厳しく、学年ごとに先生方が全学生を集めて講評するのは、ていねいな教育を目指してのことです。各授業でも小テストを重ねて、大学全体が一体となって教育研究に熱心に取り組んでいます。

キャンパスは総面積二十ヘクタールと広大で、アカマツと同色のオーソドックスな校舎が、いかにも二十一世紀にふさわしい大学として建っています。二十本の円柱がどっしりと構え、二十一番目の柱、すなわち二十一世紀を象徴させています。このモニュメントは、台座にNという字体と合体させ、那須とNEW、NATURE、NETWORKなどこれからを感じさせるものになっています。百年前に栄子先生が燃えるような気持ちで学園を創立したと同じように、時代と社会を見誤らないようにとの願いをこめています。

校舎は研究・管理棟（四階建）をはじめ、講義・厚生棟には、食堂、購買・医務室もあ

ります。図書館・情報棟（三階建）は教育研究の中核となる所で、コンピュータ実習室や学生が自由に使える情報メディアコーナー、図書館、体育館（二階建）など合計一万三十七平方メートルです。学生のクラブハウスも十分に用意され、広々としたサッカー場やテニスコートなどとともに課外活動を思う存分楽しめるようになっています。駐車場は五百台収容できます。

こうした大学の建物は栃木県のマロニエ建築賞に選ばれ知事から表彰されました。自然と調和しているうえに学生本位かつこれからの教育研究環境にふさわしい建物と評価されたのです。校舎は、東洋建設株式会社の大西社長はじめ社員の誠意ある施工によるものです。

大学には、宇都宮短大附属高校から多数が進学し、これらの学生たちが須賀学園の伝統を生かして、率先して活躍してくれているのはうれしい限りです。

栄子先生が学校を創設してから九十九年目に大学を誕生させることができたのは、何とんでも「全人教育」という教育理念が確立され、つねにこれを基準に、時代の変遷がいかにあろうとも、社会がどのように動こうとも、教育はいかにあるべきか考えてきた伝統の力だと確信します。中学校、高校、短期大学、大学と順次拡大していく中からはさまざまな意見や工夫、あるいは反省がありますが、学生生徒ひとりひとりの個性、能力、特性に対応しての教育をいかに行うか、持っている力をどのように伸ばすかを思い、「全人教育」という言葉に集約される栄子先生が学園創設にすべてをささげた魂を大切にしていきたいと考えます。十代の大切な時期を中学、高校、大学と一貫していっしょに学ぶ中から人間に対する尊厳を自分のものにし、希望を高く掲げて前進できる人間であってほしいと願ってやみません。友正校長が学校復興の中で感じ、考え、実践してきたのもまったく同じ精神ではないかと思います。その言葉のひとつひとつが心の底にずっしりと重く響いてきます。そして、大学に「全人教育」の精神を結実できた喜びと自負を持てるのです。次の友正校長の教育に取り組む基本姿勢こそこれからの指針ではないでしょうか。

既成の権威をはねのけ、何ものにもとらわれない弾力性が生き生きと躍如している。自由に、率直に、堂々と自己の見解を表現する明るい態度、これら伸びゆく生徒たちの姿を見る時、ここに次の世代のモラルを感じ、若い息吹きを心強く思うばかりである。

しかし、こうした行動と態度の中に、将来の目標、自己主張と責任、内省的努力が欠如してはいないだろうか。私は皆さんに「希望をもって進め」と言いたい。常に人間は明日に希望をかけている。何らかの意味で、人間は希望に生きているとも考えられる。しかし若人の前には、この希望の燈火が大きく揺れ動き、時には風前の燈と変わるのであるまいか。私どもは常に希望に満ちあふれるとともに、この希望を実現するために、自己に対して深い思索と自覚、反省と努力を要するわけである。



友正校長の書き記したひとことひとことはずっしりと重いものがあります。たとえ年齢に差があったとしても、中学、高校、短大、大学に学ぶ者は同じ一人の人間に違いありません。成長に従って思う存分、自らの発見に基づいて進むべきところをつかむ。それができる「全人教育」を誇りに感じるのは私一人ではないと確信しています。

あの日 あの時

「活発な音楽活動」

宇都宮短大資料から

宇都宮短大の須賀友正記念ホールは、宇都宮市内にあって最高の音響効果をもったホールとして、音楽関係者や愛好者に高く評価されています。毎年夏には音楽講習会を開いて一流教授陣が直接指導に当るほか、学外の方々によるコンサート、ピアノ発表会にも開放して大変喜ばれています。

毎年ピティナ・ピアノコンクールの栃木県予選会、東日本本選会が開催されるほか、木曜音楽研究会演奏会、ピーターラングピアノリサイタル、卒業生の演奏発表会などが行われています。さらに宇短大附属子供音楽教室、発表会などの楽しい催しも行われ、幅広く市民に親しまれています。学生生徒の学内演奏会や内外の一流演奏家を招いての特別演奏会や特別交會レッスンは、ピアノに限らずバイオリン、チェロ、クラリネットなど、音楽科の授業に即応した内容で注目されています。

## 第十一章 人にやさしい宇短大人間福祉学科

### 「福祉のまちづくり」を担う

宇都宮短期大学は昭和四十二年創立以来三十有余年、音楽大学として素晴らしい実績をあげてきましたが、これに加えて平成十三年春には新たに人間福祉学科が開設されました。

これは、高齢社会進展の中で緊急課題となっている社会福祉の現場で働く専門職を宇都宮地域において養成していこうというものです。県中部にあって中核都市として活発な活動を続けている宇都宮市ですが、今まで福祉の教育は専門学校が主で、高等教育機関が存在しませんでした。県全体を見ても県北の国際医療福祉大学と県南の佐野国際情報短期大学のみです。人口四十万人を抱える県都として社会福祉施策の拡充が求められていますが、人材育成面から必ずしも十分とはいえません。介護保険制度が平成十二年度からスタートしました。このように施策も大きく転換する中で、何よりも必要なのはこうした施策を支える人材にほかなりません。助けを必要とする高齢者に本当に親身にお世話する人がいなければ何もできないのです。いくら施設や設備を増やしても主役は人、しかもお世話をするとってもただ単にさまざまな器械を用いてお風呂に入れたり、食事の面倒など介護介助をするだけでは十分とはいえません。

助けを必要とする人も、どんなに年齢をとっていても、いかに身体が弱っていても一個の人間であるにかわりはない。やはり、その尊厳を大切にしながらいねいに親身になってお世話をしなければいけないと思います。

さまざまな社会福祉施設に赴いて附属高校の生徒たちがボランティア活動に参加しているので、その様子を知っていますが、それぞれの立場や状況をわきまえ、なおかつ目線を同じ位置に置いていっしょになってか活動しなければならぬと痛感しています。生活するために身体を動かす時間も手間も、元気だったころに比べてたくさんかかります。かかるけれども自分の力、自分の判断でやれてこそ生きる喜びは大きいというものです。こうした現場を知れば知るほど、これこそ「全人教育」を必要としているのではないかと考えます。栄子先生が百年前に、当時女性の地位が決して高くはなかった時代に、女性も教育を受けなければならないと目標を高く掲げて取り組んだ気持ちと相通じるものがあります。

### 生きる「全人教育」

このような観点から、宇都宮短期大学に、あえて人間福祉学科と「人間」を学科名に入れて、社会福祉士受験資格取得のコースと介護福祉士資格取得コースを設けることにしたので、その教育にも、福祉の専門職としての技能に先立って、まず「人間を知る」ことに重点を置きます。人間とは一体どのような存在なのか、身体を支えている生理、構造（解

割)、病理だけでなく、家族や地域社会の関係、歴史や文学、さらには国際化や情報化など  
とのかかわりなどをじっくりと学んでいます。とりわけ、現代社会特有のストレスに対し  
て有効といわれる癒しについては、宇都宮短期大学音楽科が長年培ってきた音楽教育の成  
果を人間福祉学科にとり入れてレクレーション活動ができるようにしています。老人ホー  
ムなどで昔歌った文部省唱歌や童謡などをかすかな記憶をたどって合唱する姿をみると涙  
が溢れます。人間福祉学科ではこのように「全人教育」を福祉活動の中で生かしていきた  
いと考えました。

幸い、宇都宮短期大学は宇都宮都市圏の中央部に位置して、鹿沼、栃木、今市をはじめ  
県内各地と高速道路で直結しています。友正校長が日夜精力的な交渉を重ねて入手した宇  
短大キャンパスは、広々とした高台だけに市内を一望できます。そこにいちばん新しい施  
設設備を持った新校舎が建っています。

できれば、地域の人々にも参加してもらって、いっしょに勉強してもらうことも検討し  
ます。これからはどうしても一般家庭でのお世話がふつうになってくるはずで、在宅介  
護について大学のような場を開放することによっていっしょに学び、実際の問題を解決で  
きるのも決して夢ではないと思います。

「全人教育」がこのような形でひとつひとつと花を咲かせることができるのも、栄子先  
生、友正校長が心血を注いで本学園の教育を進めてきた大きな成果だと自負しています。  
人間福祉学科の新設に対して、栃木県および宇都宮市が補助金を支出して協力してくれて  
たこともありがたいことです。公私協力という新しい時代にふさわしい方法を大学に続け  
て実現できるのも、須賀学園に対する地域社会の支持があつてのことです。百年の実績が  
信頼をかちうる原動力となつたのは間違いありません。それを可能にしたのは栄子先生、  
友正校長のもとに結集した教職員、学生生徒ひとりひとりによる伝統と実績のお陰と感謝  
しています。

## 第十二章 創立百年——教育は人なり

### もっとも尊くむずかしい教育

最初に述べた通り、私は、人間の仕事のうちでもっとも尊く、またむずかしいものは教育であると思っています。それは対象が十人十色、それぞれ個性を持った人間であるからです。教育はその個性をいかしながら、人それぞれに伸ばしてゆかなければなりません。私は崇高な理想と信念によって栄子先生によって創設された須賀学園の建学の精神である「全人教育」に基づき、時々刻々と移り変わる時代の趨勢を見きわめながら本学園の教育に日々取り組んで来ました。

しかも、この偉業が一朝一夕になしえたものではなく、栄子先生をはじめ多くの方々の努力の賜であることに心をいたし、卒業生、在校生、教職員の皆さんの協力をえて成果をあげています。

とくに教育においては、何といたっても直接その任に当たる教職員の責任がいちばん大きいことはいうをまちません。私は教職員には常に生徒たちと人間的な接触を深め、ひとりひとりの生徒を大切に、親切に、キメ細かな指導を行うようお願いしています。「教育は人なり」といわれるように、先生と生徒の温かい人間関係、心と心の触れ合いによってこそ、ほんとうの人間教育が行われます。

教育基本法にもある通り、「人格の完成をめざす」教育に従事する教員は、「自己の使命を自覚し、その職責の遂行に努めなければならない」のであって、そのためにこそ「教員の身分は尊重され、その待遇の適正が期せられなければならない」ということになっています。教員の使命は何より重いものです。

### 若い世代に継承

「教育は人なり」——だれもがひとことで言い切ってしまうですが、私があえてこのことを強調するのも、栄子先生の存在こそが須賀学園の百年を築き上げ今日を迎えることができたと実感しているからなのです。教育が進めば進むほど、教える内容はふえ、教員は指導の方法や教育技術に走りがちです。科学技術の進展、とりわけ情報化によってこの点が強調され、技術やテクニックさえわかればよいという風潮が強まっていますが、何よりも基本は人間でなければならないと考えます。栄子先生の自らの全生涯をかけての学校づくりを常に思い起し、私自身どこまで実践できたかを自問自答しています。「全人教育」をいくら説いたところで、具体的にはどのようなものかと問われたときに答えられなければ意味はないからです。「一人は一校を代表する」と共通の目標に向って教職員が生徒ひとりひとりと正面からぶつかり合い、手に手をとって前進しない限り教育は達成できるもの

ではありません。

生徒たちが、こうした私の考えをどう受け止めているのか心配していましたが、次のような生徒たちの言葉をきいてとてもうれしくなり、やれば通じる、わかってもらえると私に自信が湧き、励ましとなっています。

私が考える心の豊かな人は、教養があり、機転が効くといった言葉で表わせるものだけでない。人の心にズンとくるような何かを持っている人だと思う。容姿が美しい人の心の中に、冷たい風がピューピュー吹き荒れていたら、見た目は美しくても、その美しさは、どこか寂し気なものになってしまう。つまり、心あっての人間なのだ。だから、人間的にすばらしいと思える人は、心の中も充実していて、力がみなぎり、誰にも何かを与えてくれるような気がしてくる。

(近藤順子)

人間は、感情で物事をとらえてはいけない。何事もおおらかにとらえるということは、決して簡単なことではない。悲しかったこと、苦しかったこと、辛かったことを、どれだけ多く経験してきたかで、その人の心が分かる。その経験と心の豊かさは比例する。いや、比例すると私は信じたい。一言に「心の豊かな人になりなさい」と言われても、理解に悩む。それは考えても絶対に思い浮かぶはずがなく、自分が実際に何かに陥っている時、立ち直らせてくれた人に教えられて、初めて実感することだ。

やはり人間、最終的には思いやり、そう、心の豊かさで勝負だと思う。顔形やスタイルが良いだけでは、世の中に通用しない。心が豊かな人は、普通にしている、自然におおらかさが外見に表れ、外見だけきどった人の美しさとは、全く違った魅力があふれている。引き付けられる何かを、持っている。

(臼井小百合)

このように「全人教育」を、生徒ひとりひとりが心の豊かさとしてそれなりに身につけることとして努力しているのに感動します。人間は一様性と同時に多様性を、普遍性と同時に個性をあわせ持っています。

目立たない生徒たちの場合は、まずその生徒を知るという作業から始めなければなりません。知る手がかりとしては面接、作文、観察といろいろの方法はあります。これを正確につかめるかどうか教員の力量を問われかねない問題ですから、教員は「燃える授業」、「わかる授業」「楽しい授業」の三目標に努力する。生徒たちが、自力で積極的に立ち上がり、自分達のために「無気力返上」の意欲に燃えて、教員を奮い立たせる火付役となるようにと期待しているわけです。

この根底にあるのは、人間の尊厳、平たくいえば人間として生まれ、人間として生きてきた、ひとりひとりにとって掛け替えのないものを大切に、大事に守り育て磨き上げ

て行く——「全人教育」の真髄はここにあると思います。栄子先生が全生涯をかけ、友正校長が戦後学校復興にすべてを注いだのも、正にこの一点にあると理解しています。

生れる、生れてきた、これは天からの授かりもの、神さまや仏さまからの授かりものです。この世の中にはさまざまな生き物が数限りなくあります。人間は種族の違いや文明、文化の進み具合の相違こそあれ、本質において同じです。その尊厳性も、全く同じです。

私は、日本人をして日本に、栃木県人として栃木県に生まれて本当によかったと思います。しかも、若く美しい生徒たちと毎日と一緒に送ることができて、こんな幸せなことはありません。ひとりひとりの生徒には、いろいろ言い分があると思いますが、大筋から見ると、世界の中で日本ほど自由で、豊かで、平和な国はありません。

栃木県は山紫に水清く、怖いものはなし。地震、雷、火事、親父、どのひとつをとって見ても、怖い物なし、といえそうです。といっても、この幸せに慣れてはいけません。これは全世界に、人類全体に向かっていえることなのですが、問題はすでに、人類が生き伸びるためにはどうすればよいかというところまできているのです。人間の尊厳について考えることは、自然と人間の共存、国際理解の感覚を磨くことです。「全人教育」をぜひともこのレベルまで持っていきたい。そのためには「教育は人なり」という言葉の意味を大切にしなければならぬと心しているつもりです。

## 平和に勉強できる幸せ

平成十二年十一月三日、須賀学園は創立百周年を迎えました。栄子先生、友正校長、そして私と、引き継いできた学園の百年の歴史を思うと、万感胸に迫るものがあります。歴史の一ページ、一ページが鮮明に浮かんできます。にぎやかな歓声、生徒たちの笑顔、はりつめた試験……。どれひとつとっても忘れられないものです。本当に良かった、良くここまで発展してきた……と実感できるのも日本が平和で、毎日学校で勉強できるという事実からではないでしょうか。

戦争で学徒出陣を経験した私にとって、勉強したくてもできなかった時代ほどつらいものはありませんでした。子どものときから、先生の話聞く、本を読む、数式を解く、実験をする……。どれひとつとっても私にはつねに新しい発見でした。無駄な勉強など何ひとつありません。学問は先へ進めば進むほどその懐は深く、私たちが気づかなかった真理を教えてくれます。これも平和であるこそできるのです。私たちは何といてもこの単純な事実を大切にしていかなければならないと思うのです。いまから半世紀前、戦災で失った教室を求めて走り回った朝、ようやく手に入れた兵舎を改造して授業ができるようになった日を思い出します。栄子先生、友正校長も同じような経験をしているはずですが、どうか、この平和であるからこそ学校で勉強できる喜びを大切にしてほしいと願っています。

## 私学の誇りと自信

平和のありがたさと同時に強く感じるのは、私学の自信と誇りです。学校の中で生れ、育った私は、戦前・戦中・戦後の私学の苦労というものを身をもって知っています。官尊民卑の気風が強かった戦前にくらべて、戦後は、私学振興という国の政策もあり、また私学関係者の努力もあって、私学が大きく発展充実し、その地位が向上し、私学も尊重されるようになりました。今や私学は、それぞれ特色を発揮してお互いに切磋琢磨しながら、日本の教育を担っているという気概のもとにがんばっています。

この私学の自信と誇りは、二十一世紀に向かって私学の宝としなければなりません。今日、教育に対する社会の要請はますます多岐にわたり、なおかつ複雑なものになっています。それに応えられるのは私学です。須賀学園は「全人教育」という伝統と実績ある教育理念をしっかりと守りながら、時代の求めに応じた教育を実践する力をつねに身につけることが大切です。須賀学園には三千人の在學生と五万人をこえる卒業生がいます。私はこれらの人々の期待に応え、夢を描きつつつねに前進していきたいと考えます。

創立百周年は在學生に大きな感動をもたらしています。創立百周年記念学園歌を公募したところ、全学園から多数の応募があったのにはびっくりしました。次に掲げる生徒たちの一言一句、その胸を張った喜びこそが学園の貴重な宝物です。みんなでそれを分ち合って、二十一世紀を私たち須賀学園のさらなる発展の世紀とするよう願っています。生徒たちの決意にはなみなみならぬ思いがみなぎっています。

二十世紀は戦争の世紀だと言われるが、戦争とその後の平和の歩みは、本校の歩みでもある。この期間、現在に至るまで本校はどのように発展してきたのだろうか。私達の教育および生活環境は充実してきた。各科、各コースなどの発展にも目を見張るものがある。本校の内容・設備や対外活動等は、創立以来めざましい変革を遂げ発展してきたと言えるだろう。

創立百周年は二十世紀最後の年、二千年である。本校は、二十世紀の間、対外的にも大きな発展を遂げてきた。二十一世紀は内面的にもいっそうの充実を図り、本校が内面的・対外的ともに発展することを期待したい。

私の学ぶ生活教養科は、学園創立以来続いてきた最も伝統ある科です。授業内容や科の名称は何度か変わり、生徒数も大幅に増えました。しかし、その長い歴史を持つわが生活教養科が、最近影が薄れた気がしてなりません。その理由の一つに、私は女子だけの科であることが関係していると思います。最近、男子校でも家庭科が必須科目となり、男女平等の社会に一步近づきました。そして、家庭科を専門に学びたいという男子も増えてきたに違いありません。女性の仕事とされてきた看護婦や保母が、看護師、保育士と呼ばれ、男性も大いに活躍しています。それには一般科目よりも生活に役立つ専門科

目が必要なはずで。

女子だけと限定された生活教養科ですが、現代においてそうである必要は全くないと思います。実際、男子が入学したいかどうかは別として、まず募集してみるのもいいのではないのでしょうか。創立百周年、一世紀分の歴史を持った生活教養科に、最大の変化を起こしてください。

(小林奈々)

創立百周年を控えて、痛感するのは、何と母校の歴史に疎いかということです。我々の在学は三年間、先生方のように長期的に学校を考えないのです。我々にとって、百周年は少々遠い未来です。

本校の一世紀の伝統は誇りうるものであり、学ぶべきものが多いと思います。しかし、その全てが現代に有効でしょうか。校則にしても何にしても、残すべきものは残し、そうでないものは改善してゆかねば、時代遅れになってしまうのではないかと心配です。

(木村太一)

新しい気持ちで高校一年がスタートしたとき、他の科の友達に「生活教養科では、どんなことをするの」と聞かれ、知っている範囲のことの全部を話しました。制作発表会で初めてのステージに立ち、「全校生徒にも見てほしい。」と強く思いました。生活教養科の作品は、学校祭にも展示され、素晴らしいと思うのですが、実際に作った人が着ているのを見ると、同じ作品が不思議と輝いて見えるのです。この喜びを生活教養科の生徒だけが知っているのは、惜しいことだと思います。

全校生徒に見てもらえる機会は学校祭しかありません。だから、体育館や記念講堂を利用して発表会をしてほしいのです。これが三年間思い続けたことです。

百周年の学校祭では、実現したらとてもうれしく思います。

(荒井由起子)

校庭から屋上を見ると、校舎の屋上に高々とそびえる看板が見える。そう、「一人は一人を代表する」だ。一人と一校のつながりは深い。しかし一校が一人を代表することもおおいにある。初対面の人を的確に判断するには、学生ならば学校、社会人なら会社と、その人の所属する団体をきくのが一番いいからだろう。一人一人の意識のレベルを高め、魂としての「宇短附」を、もっと向上させたいと思う。

(糸川美紀)

学校の在り方は生徒に左右されます。私はその生徒一人一人が目的を持って学校に通うことが大切だと思います。私は音楽科なので、やはり学校でも家でもピアノを重視した生活をしています。音楽をするためだけに学校に来てるわけではないけれど、好きな



ピアノができるからこそ、学校が楽しいのです。将来の夢でも希望でもいい、目的を持って学校へ来ることで自分自身の気持ちの持ち方も変ると思います。目的を持つということは、がんばるぞという、入学当初の初心を忘れず行動することにつながると思います。そういう気持ちを皆が持てば、さらに一段と活気のある学校になるのではないのでしょうか。私も今の気持ちを忘れずに、希望をしっかりと持って頑張っていこうと思います。

(小野崎希)

学校の校風は素晴らしいものであふれていると思います。私は、生徒達の清潔感を感じます。活気に満ちていることにも、私は励まされました。先輩方の行動力や人柄にもあこがれます。「音楽」という、生きがいがあるおかげで、毎日学校が楽しくて、夢を探し、それを実現しようと努力することを、自然に教わり、自然に身につくようになりました。

「人の二倍努力すれば、二倍の人生を楽しめる」と聞いたことがあります。学科の勉強と音楽の勉強、確かに大変ですが、先輩方の演奏を目で見、耳と心で聴くと、その大変さも忘れ、やる気が出てくる。この素晴らしい学校を、より活気あふれる学校にするために、「私にはできる」と最後まで信じて努力をし、夢を追い求めることが、学校生活を盛り立てることだと思います。

(鈴木敦子)

## 百周年を新たな出発に

以上のような創立百周年を迎えての生徒たちの気持ちに接すると、いま平和で民主的な日本に生きる若い人たちの将来に、どういう夢を与えるか、いかなる目標を持たせることができるか——これが私たちの大きなつとめであると思います。いま、若い人たちは自分のことばかりしか考えないとか、モノばかりを追い求めているとか非難ばかりが聞えてきますが、それだけでよいのでしょうか。学生生徒たちが二十一世紀を担っていく運命にあることがはっきりしている以上、私たちはただ黙って手をこまぬいているわけにはいきません。やはり、学生生徒ひとりひとりがこの世の中に生まれてきたという事実をしっかりと自覚してやっていってもらわなければなりません。そのためには、日本という国を若い人たちが生きる希望をかきたてるような立派な国、立派な社会にしてゆかなければならないと思います。物は豊かになったが人の心は貧しい国、自国の歴史を否定的にのみとらえる歴史教育、改革といいながら現状維持にのみ感心を持つ企業人、新しい産業を興すために必要な支援に無関心な環境……こういうことでどうして若い人が未来に希望を持つことができるのでしょうか。

しかし、このような現状の中で決して光明が見つけられないわけではありません。阪神大震災で活躍したボランティアや被災から雄々しく立ち上がる人たちの姿をみると、あるいは、東海村の臨界事故の時の地域のまとまった安全行動などに接すると、私は決して日本は悲観するような国ではない、すばらしい国だと思います。これらの大きな災害を契機として、日本の国民が心をついて立ち上がっています。日本人の底力はまだまだあります。それを実践するのも若い人たちにほかなりません。

私たちは、須賀学園創立百周年を新たな出発点として、未来に向って大きな希望をもってがんばりましょう。



桜の大樹の下で：新入学生を迎える対面式

おわりに、私にとってたいへんうれしいことは、創立百周年を機に、長男の英之が意義ある勉強の期間を終えて、平成十二年十月から本学園に戻り、私と一緒に学園の経営に当ることになったことです。

英之は昭和三十年の生れで、東京の中高一貫教育の私学御三家といわれた武蔵中学・高校から、私と同じ東大経済学部に進みました。卒業と同時に日本興業銀行（現みずほコーポレート銀行）に入り、本店の外国営業部、人事部を経て、産業調査部主任部員、営業部課長、そして営業部副部長をつとめていました。興銀に勤務させたのは、学園の将来の大きな発展を考えると、私のような教育一筋よりも、日本の産業経済の総本山である興銀という大きな舞台で勉強した方が、広い視野で物事を見ることができると思ったからです。

英之の妻の房江は、東大文学部から大学院博士課程をおえ、東京学芸大学の教授をしています。NHK教育テレビや放送大学などで源氏物語の講義にも出て、「源氏ブーム」で結構忙しいようです。

本学園の未来は大きく開かれています。二十一世紀の須賀学園が「全人教育」を高く掲げて、今後も大きく発展することを心から願っています。



## あとがき

この『ひかり輝く「全人教育」—須賀学園の一〇〇年』には、須賀淳理事長がこの半世紀にわたって献身した教育に寄せる並々ならぬ想いと、この学園とともに教え、学び、鍛えた多くの人々の喜び、感動、躍動がっぱいつまっています。

ふつうの百年史とは違っているかも知れませんが、お読みになる方には一ページ、一ページにきっと素晴らしい発見があるはずです。その内容も須賀淳理事長の論述を柱に、教職員、学生生徒の生々とした証言、体験談であり、「全人教育」こそが私たちの未来にとって貴重な指針を与えてくれることをはっきりと教示していると思います。

教育はもちろんのこと、子育てや子弟の進路、生き方などを立ち止まって考えたいときにぜひ読まれるようお勧めします。温かな見方、素晴らしい発見に出会うはずです。

発行に際して多くの関係者にご協力をいただいたことに謝意を表します。 (M)



SUKA GAKUEN

宇 都 宮 共 和 大 学

宇 都 宮 短 期 大 学

宇都宮短期大学附属高等学校

宇都宮短期大学附属中学校